

群馬大学

# 教育実践年報

第5号 2015年

## 特集 ■ グローバル化に対応した英語教育改革の実際

- ・ 英語教育強化地域拠点事業について
- ・ 教員の指導力向上について
- ・ 英語教育カリキュラム開発についての概要
- ・ 実践事例
- ・ 外部専門機関との連携

## 連載 ■ 県外実践校に学ぶ

- ・ 新潟県長岡市立阪之上小学校
- ・ 秋田県仙北市立角館中学校

## 発信 ■ 若い教師を育てるワンポイントアドバイス

- ・ みる楽しみを—子どもをひらく鑑賞活動への誘い—
- ・ 1日1回の気温測定で理科に求められる技能を高める活動例
- ・ これからの「学校におけるいじめ対応」
- ・ 学校内外の連携について
- ・ 障害の重い子どもとのコミュニケーション

## 報告 ■ センター部門の取組

- ・ 教育実習・実践開発部門
- ・ 教育臨床心理部門

附属学校教育臨床総合センター  
〒371-8510 前橋市荒牧町四丁目2番地



# 埼玉県志木市立志木小学校

地域の方々に見守られ、本年度で創立141年、卒業生10932人

平成15年に『地域と育む学社融合の学校づくり』を目指して、小学校と社会教育施設 **いろは遊学館**（公民館）・**いろは遊学図書館**（市立図書館）の複合施設となりました。

教室棟

二つの棟をつなぐ  
レインボーガーデン

生涯学習棟

## 日常型の融合

日々の交流で社会性の育成

- ・いろは遊学館利用者の会の方による授業、休み時間、クラブ活動での支援
- ・ホール、パソコン室、調理室、図書館など施設の活用
- ・児童委員会活動
- ・おもてなし会食 な



国旗、市旗、校旗の掲揚



いろは遊学館入り口の掲示物作成

いろはジュニア委員会の活動



いろは遊学図書館



読書の時間は、いろは遊学図書館で読書します。  
図書委員会児童は、貸し出し業務体験もします。

## イベント型の融合

開会式の司会や受付をします。

3施設合同のおまつり

- ・児童、教職員、地域の方ステージ発表
- ・利用者の会の展示や模擬店
- ・PTAの体験コーナーなど



## 連携事業

いろは大学の皆さんと4年生の音楽の合同授業



イベントや連携事業から新たな交流が始まる



いろは大学作品展を昼休みに見学に行く児童

火災・地震・不審者

3施設合同避難・防犯訓練



レインボーガーデン、生涯学習棟から教室棟の児童の避難の様子がよく見えます。

ガラス張りの壁で見通しのよい校舎



児童とともに校庭に避難した生涯学習棟の職員

## 「教育実践年報」第5号の発行に寄せて



### グローバル化に対応した英語教育改革の実際

附属学校教育臨床総合センター長

上 原 景 子

私は、2015年度から前任の黒羽教授に代わりまして、附属学校教育臨床総合センター長を勤めさせていただいております。当センターでは『教育実践年報』を5年前から毎年1回発行しており、今年度は第5号を皆様にお届けすることとなりました。

当学校教育臨床総合センターでは、教育実践に関する臨床の学びの創出を目指して、附属学校園、教育関係諸機関や地域社会と連携しながら、教育実習、教育実践、教育相談に関する様々な理論的・実践的研究を行っております。また、こうした理論的・実践的研究の成果を踏まえた教育と研修を実施し、豊かな教育実践力と子どもの成長をめぐる諸問題の解決力を身につけた学校教員の養成に寄与するための数多くの取組を行っております。

今日の日本の社会では、政治、経済、産業など、あらゆる面で急速に情報化や国際化が進んでおり、教育におきましても、世界的な情勢の中での日本を強く意識して、様々な学習活動を行う必要性がさらに大きくなって参りました。最近では、「国際化」という言葉に加え、「グローバル化」という言葉が頻繁に使われるようになりました。「グローバル化」(globalization)という言葉は、英語のglobe(地球)という語がもとで、世界が一つになること、世界全体に渡ること、地球規模になることを意味します。このような世界規模で物事が進んでいく時代を背景として、学校教育では数々の改革や改善が行われています。

こうした改革の一つとして、英語教育改革が始まっていることは、皆さんもよくご存知だと思います。かなり前から、「日本人は何年間も学校で英語を学んでいるのに、なぜ英語が使えないのだろう？」と言われてきました。世界規模の発展についていくためには、共通語として重要な役割を担う英語を使う力が問われます。そのため、英語教育の改革が始まりました。文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革」は2014年度に開始されました。高校の「英語で英語の授業」や小学校の「高学年で英語が教科」など、新聞やテレビのニュースなどで取り上げられてきたため、ご存知方が多いと思います。しかし、英語教育改革はこれだけではなく、小・中・高の全てで、一貫した目標のもとに行われている改革です。実際にどのようなことが行われているのだろうと思われる方も多いのではないかと思います。

そこで、『教育実践年報』第5号では、英語教育改革を特集として取り上げ、群馬県の素晴らしい取組を紹介させていただくことにしました。大変お忙しい中、貴重な特集記事をお寄せいただいた群馬県教育委員会の皆様に心から感謝いたします。

## も く じ

## 発行に寄せて

上原 景子

## 特 集 ■ グローバル化に対応した英語教育改革の実際

英語教育強化地域拠点事業について	2
教員の指導力向上について	7
英語教育カリキュラム開発についての概要	11
実践事例	16
外部専門機関との連携	21

## 連 載 ■ 県外実践校に学ぶ

「学びの質的向上」を図る教育活動の創造	新潟県長岡市立阪之上小学校	22
生徒の「学習力」を伸ばす授業づくり	秋田県仙北市立角館中学校	30

## 発 信 ■ 若い教師を育てるワンポイントアドバイス

《教科教育Q&A》	
みる楽しみを一子どもをひらく鑑賞活動への誘い	郡司 明子 38
1日1回の気温測定で理科に求められる技能を高める活動例	小野 智信 40
《学校教育Q&A》	
これからの「学校におけるいじめ対応」	吉田 浩之 42
学校内外の連携について	新藤 慶 44
《特別支援教育Q&A》	
障害の重い子どもとのコミュニケーション	中村 保和 46

## 報 告 ■ センター部門の取組

教育実習・実践開発部門	48	
教育臨床心理部門	74	
編集後記		
*カメラレポート	埼玉県志木市立志木小学校	表表紙・裏表紙

## グローバル化に対応した英語教育改革の実際



私が先生になったとき 宮沢賢治

私が先生になったとき

自分が真実から目をそむけて

子どもたちに本当のことが語れるのか

私が先生になったとき

自分が未来から目をそむけて

子どもたちに明日のことが語れるのか

私が先生になったとき

自分が理想をもたないで

子どもたちにいったいどんな夢が語れるのか

私が先生になったとき

自分に誇りをもたないで

子どもたちに胸を張れと言えるのか

私が先生になったとき

自分がクラスの外にいる

子どもたちに仲良くしろと言えるのか

私が先生になったとき

自分の闘いから目をそむけて

どうして子どもたちに勇気を出せと言えるのか

昨年と同じ内容を強調したいと思います。

二十一世紀の教育の方向性は示され、その方向性はもの凄  
い勢いで加速されています。

いま、これからの学校や教育の在り方とともに、教師そのもの  
の在り方について見つめ直すことが求められ、教師にこれ  
までも増して、大きな期待と関心が寄せられています。

学校という組織が脆弱になっているのでしょうか。教師の  
子どもに対する情熱や思いが失われてきているのでしょうか。  
子どもに生きる喜びを与えられる学校や教師が少なくな  
ってきているのでしょうか。

教育という営みは、教師がその確かな眼と心で子どもたち  
ひとりひとりと向き合うことから始まります。その原点を教  
師から奪っているのも今の学校の真実です。子どもたちを伸  
ばすかぎを握っているのは、私たち教師なのです。

# 「グローバル化に対応した英語教育改革」 における群馬県の取組

群馬県教育委員会

## 1 英語教育強化地域拠点事業について

### (1) 群馬県の英語教育改革の推進について

群馬県教育委員会では、「国際的視点に立ち、自らの考えを発信できるぐんまの子どもの育成」を目指して、平成 26 年度から 4 年間の計画で、英語教育強化地域拠点事業を中核とした英語教育改革に取り組んでいる。以下はその取組の概要である。

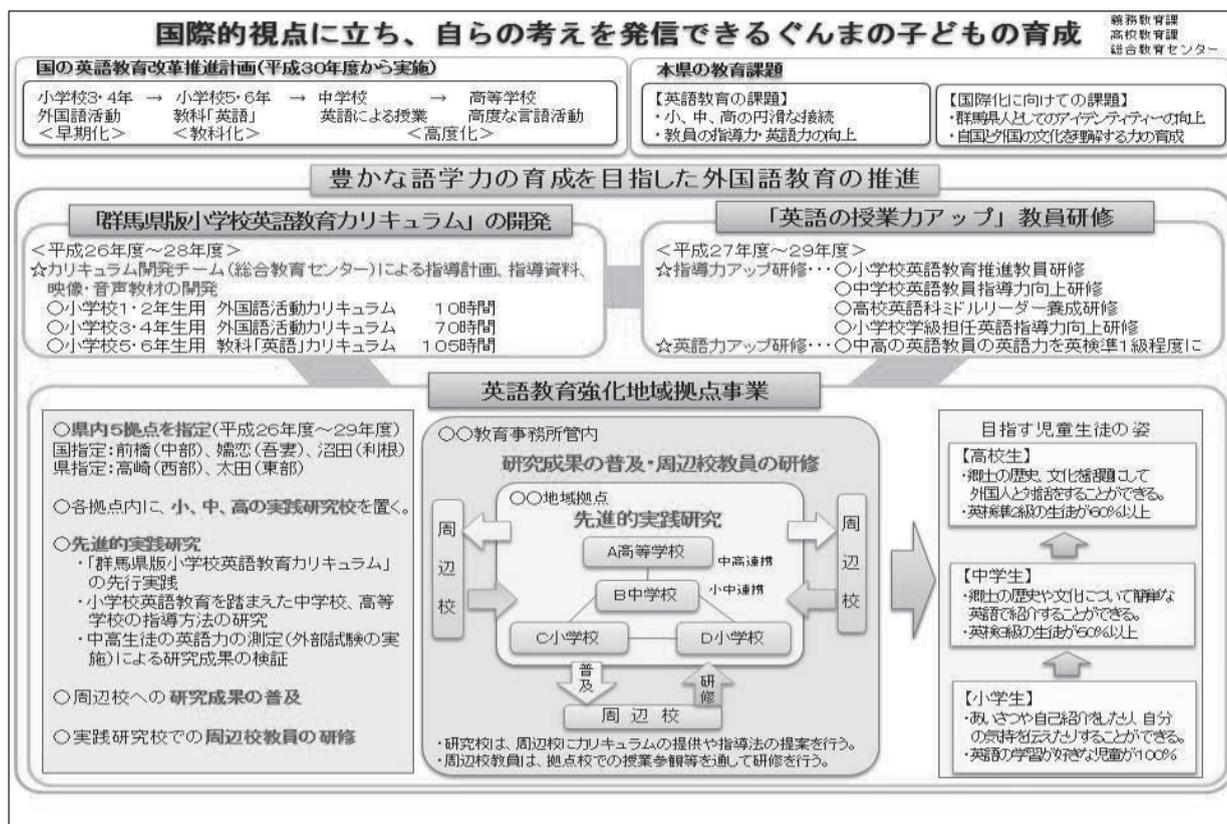
#### ① 群馬県英語教育連絡協議会の設置

県教育委員会義務教育課が主催し、小・中学校長会の代表校長、有識者、拠点校教員、教育事務所・市町村教委・総合教育センターの担当指導主事等により、改革の方向性を共通理解するとともに、目指す児童生徒像や実践課題などを確認するなどして、全県一致の取組を目指している。

#### <目指す児童生徒の姿>

国際的視点に立ち、自らの考えを発信できる ぐんまの子どもの育成	
高校生	・郷土の歴史、文化を話題にして、外国人と対話することができる。 ・英検準 2 級の成果が 60%以上
中学生	・郷土の歴史や文化について、簡単な英語で紹介することができる。 ・英検 3 級の生徒が 50%以上
小学生	・あいさつや自己紹介をしたり、自分の気持ちを伝えたりすることができる。 ・英語の学習が好きな児童が 100%

＜群馬県における英語教育改革 全体構想図＞



② 「群馬県版小学校英語教育カリキュラム」の開発

小学校における授業実践を進めるに当たって、群馬県総合教育センター内に設置したカリキュラム開発チームが、小学校英語の早期化、教科化を見据えた「群馬県版小学校英語教育カリキュラム」の開発に取り組んでいる。拠点校において、開発したカリキュラムの試行や活用を行い、より実態に即したカリキュラムとなるように研究を進めている。また、カリキュラムは拠点校だけではなく、県内の全ての小・中学校にも配付をしている。(「群馬県版小学校英語教育カリキュラムの詳細については、「3 カリキュラム開発」参照)

③ 英語教育強化地域拠点事業の推進

本事業では、3つの地域の国指定に加えて2つの地域を県指定とし、5つの拠点地域で県内全域をカバーできる体制を敷いている。

＜拠点地域一覧＞

市町村	学校名
前橋市(国指定)	桃井小、中央小、城南小、第一中、渋川女子高
高崎市(県指定)	南小、東小、城南小、中央小、城東小、高松中
嬬恋村(国指定)	東部小、西部小、嬬恋中、嬬恋高
沼田市(国指定)	沼田東小、沼田北小、沼田中、沼田女子高
太田市(県指定)	旭小、旭中

拠点地域ごとに、研究推進を行う拠点校を設け、早期化、教科化、高度化に向けた教育課程、指導方法、指導体制の実践研究を行っている。また、拠点ごとに、地域連絡協議会を設置し、拠点校相互の公開授業や研究協議を県教育委員会も参加し定期的に行っている。

拠点校の授業は、広く県内各学校の教員にも公開し、研究成果の普及を図っている。平成 27 年度には、のべ 21 回の公開授業及び授業研究会が行われ、1,200 名を越える県内の先生方の参加があった。



公開授業の様子



県英語教育連絡協議会の様子

今年度、各拠点校における研究を進める中で、以下のような成果と課題が見られた。

## 成 果

### <小学校>

- 9割以上の児童が、「英語の学習が好き」、「英語の授業が楽しい」と感じている。  
(児童の英語学習に対する高い意欲)
- 学級担任が主体となって、クラスルームイングリッシュを用いながら英語の音声に十分触れさせる授業の実施(担任主導の授業)
- 群馬県版小学校英語教育カリキュラムに基づいた実践による授業スタイルの確立  
(英語授業スタイルの確立)
- 児童が授業で多くの英語に触れたり、英語を使ってコミュニケーションをとったりすることができる時間の確保(聞く、話すを重視した指導)
- 児童がコミュニケーションに対する興味や関心を高められるような教材や題材の工夫(児童の興味や関心を高める工夫)

### <中学校>

- 英語検定3級程度(以上)の取得率が上がるなど、生徒の英語力に向上が見られる。  
(生徒の英語力の向上)
- 教員が授業のほとんどを英語で進め、生徒も教師の英語で進める授業に対応している姿が見られる。(英語で行う授業)
- 中学校の英語教員が小学校の英語授業を見たり、小学校の先生方と授業研究会を行

ったりして、小学校の英語教育について理解を深めるとともに、中学校の英語授業に生かそうとする様子が見られる。（小学校英語の理解）

- 授業公開に向けて、授業者の教員だけが準備をするのではなく、校内の英語担当教員全員が組織的に授業改善に取り組む様子が見られる。（組織的な授業改善）
- 生徒が即興的に英語を話す場面を、授業に位置付け、生徒が英語を話す際に、原稿を書かずに話すことに取り組んでいる教員も見られる。（即興的な言語活動）

#### <高等学校>

- 各拠点校においては、すべての英語教員が学習到達目標を共有し、授業中の言語活動について組織的に工夫するようになった。（言語活動の工夫）
- 教員が、授業中に英語で発話する割合が飛躍的に向上した。（英語で行う授業）
- 異校種の授業を参観したり、情報交換を行ったりすることにより、小・中・高等学校で一貫した英語教育を行う必要性を意識するようになった。（小中学校との連携）

### 課 題

#### <小学校>

- 1 児童の英語学習に対する意欲の更なる向上
  - ・英語学習に対して肯定的にとらえる児童は多いが、学年が上がるに従って、「英語学習が好きだ」と答える児童の割合に減少が見られる。
- 2 学級担任の英語指導力の向上
  - ・英語の専門ではない学級担任には、英語指導に対する不安感が見られる。
- 3 ねらいを明確にした授業の実施
  - ・小学校の英語授業のねらいが明確になっていない。
- 4 高学年（教科英語）における「読む」「書く」の指導の工夫
  - ・本来の目的である態度を身に付けたり、関心を高めたりすることではなく、技能を身に付ける指導となっている。
- 5 児童の英語の力を図る適切な評価のあり方の確立（外国語活動、教科英語）
  - ・指導に生かすための評価ではなく、評定をつけるための評価の意識がまだまだ強い。

#### <中学校>

- 1 中学校3年時において、目標値とする英語力が身に付いていない。
  - ・目標値を達成するための授業改善が十分ではない。
- 2 授業で身に付けさせる力を明確にしていく。
  - ・教科書の本文内容や文法事項を理解することが、主たる目標になっている。
- 3 生徒と教員の英語によるやり取りを増やしていく。
  - ・生徒と英語でやり取りをしながら授業を進めるイメージがもてていない。
- 4 生徒が、授業中に英語を使う時間を増やし、テーマに沿って自分の考えを話したり、相手と意見を伝え合ったりする言語活動を取り入れていく。
  - ・教員が教科書の本文内容や文法事項を説明することが指導の中心になってい

る。

- 5 授業中に、生徒が即興的に英語を話す場面を多く設定していく。
  - ・生徒が即興的に英語を話すということのイメージがもてていない。
- 6 中学校3年時に生徒に身に付けさせる英語力（英語検定3級程度）を意識した指導を行い、定着しているかを客観的に把握していく。
  - ・中学校において身に付けさせる英語力のゴールが意識されていない。

#### <高等学校>

- 1 「CAN-DO リストの形での学習到達目標」を年間指導計画に適切に反映させ、妥当性のある評価を行う。
  - ・学習指導と学習評価の一体化が不十分である。
- 2 授業中の生徒の言語活動に即興性をもたせる。
  - ・事前に書かれた原稿を読んだり、暗記したことを発表したりする活動が多く行われている。
- 3 定期考査の問題を改善して、生徒の英語力を適切に評価する。
  - ・筆記試験において、単に知識を問うような出題が中心となっている。

今年度、今後の本県の英語教育改革を一層推進していく上で、貴重な成果及び課題を得ることができた。これらは全て、拠点校における日々の授業実践によるものである。

次年度以降も、各拠点校において、今年度の成果と課題を踏まえた実践研究を進めていく計画である。実践研究の成果については、公開授業を通じて、広く県内に普及していきたいと考えている。

#### ④ 総合教育センターの研修講座の充実

「小学校英語教育推進教員研修」「中学校英語教員指導力向上研修」を指定研修（全小中学校の英語担当教員対象）として開設している。受講教員は、英語教育改革の方向性や実践のあり方を学ぶとともに、研修の一環として強化地域拠点校の授業公開へ参加し、研修を深めていく。（総合教育センターの研修の詳細については、「2 教員の指導力の向上」参照）

#### （2）今後の方向性

以上のように、本県では、英語教育強化地域拠点事業を中核として、群馬県版小学校英語教育カリキュラムの開発、教員研修等を、全県で一体的に取り組んでいる。

これらの取組は、緒についたばかりであるが、全県一致の英語教育改革を推進することで、一定の英語教育水準を確保するとともに、群馬県の全ての子どもたちが目指す児童生徒像に向かって成長していけるよう今後も支援していきたいと考えている。

## 2 教員の指導力向上について

### (1) 群馬県総合教育センターでの教員の指導力向上について

群馬県総合教育センターでは、「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」の一環として、平成27年度は、小・中・高のそれぞれ校種において、教員の英語指導力向上と英語運用能力向上を図るために以下の研修を実施した。

#### ① 「小学校英語教育推進教員研修」

対象：小学校の教員（県内各小学校から1名）

目的：小学校英語教育の早期化・教科化に伴い、校内・地域で英語教育を推進する中核的教員の英語運用能力及び英語指導力の向上を図る。

概要：国や群馬県の動向についての知識を得たり、実践発表や授業を参加したりして、各地域や各学校での英語教育を担う中核教員として、授業指導力の向上を目指す研修である。なお、第2日の講義・協議「英語教育推進リーダーの役割」では小学校の英語教育推進リーダーを講師として、研修を実施した。国は、平成26年度から、各学校段階における英語教育推進リーダーを養成するための「中央研修」を開始した。英語教育推進リーダーは、その研修対象者で、教員研修センターでの集合研修を受けたり各所属校での授業実習を実施したりして、英語教育推進リーダーとしての様々なスキルを身に付けている。研修修了後は、研修指導者として、各地で英語担当教員を対象とした研修の講師等、研修成果の普及を複数年にわたり実施することになっている。

#### <日程及び研修内容等>

期日	講義題・講師等	会場
6/11 (木)	講演「小学校英語教育の充実について」 講師 文部科学省初等中等教育局 教科調査官 直山 木綿子 氏	総合教育センター
7/23 (木)	講義・演習「担任が行う授業づくり」 講師 関東学院大学 教授 金森 強 氏 実践発表「英語教育強化地域拠点校の取組」 講義・協議「英語教育推進教員の役割」 講師 英語教育推進リーダー（小学校）	総合教育センター
9月～ 11月	授業参観及び授業研究会 ※中学校英語教員指導力向上研修（講座コード2340）と合同開催	各教育事務所管内の小学校

## ② 「中学校英語教員指導力向上研修」

対象：中学校の英語教員（指定した中学校から 60 人）（平成 27 年度）

目的：中学校において英語教育を推進する中核的教員として、小学校との接続性を高め、英語によるコミュニケーション力を育成するための指導力の向上を図る。

平成 27 年度より 3 年間ですべての中学校から 1 名の教員が参加する。

概要：講義・演習や授業参観及び授業研究会を通して、小学校及び中学校における英語教育の効果的な連携を探り、小・中学校の系統的な英語教育について授業の改善を図る。なお、第 1 日の講義「小学校から中学校への学びの連続性と Can-Do リストの活用」では、群馬大学教育学部上原景子教授、また、演習「言語活動充実のための授業づくり」では、中学校の英語教育推進リーダーを講師として、研修を実施する。

### <日程及び研修内容等>

期日	講義題・講師等	会場
5/20 (水)	<p>講義・演習「小学校での学習内容を生かした中学校の授業改善」</p> <p>講義・演習「コミュニケーションを重視した、英語で行う授業の実際」 講師 英語教育推進リーダー（中学校）</p> <p>講義「小学校から中学校への学びの連続性とCAN-DOリストの活用」 講師 群馬大学教育学部 教授 上原 景子 氏</p> <p>演習「言語活動充実のための授業づくり」 講師 英語教育推進リーダー（中学校） 総合教育センター指導主事</p>	総合教育センター
9月～ 11月	<p>授業参観及び授業研究会（各教育事務所管内拠点校）</p> <p>※「小学校英語教育推進教員研修」第3日と合同開催</p>	各教育事務所管内の小学校

## ③ 「高校英語科ミドルリーダー養成研修」

対象：高等学校及び中等教育学校の英語科教員（指定した学校から 23 名（平成 27 年度）

目的：高等学校及び中等教育学校において英語教育を推進する中核的教員として、英語運用能力及び教科指導力の向上を図る研修である。平成 26 年度より 3 年間ですべての学校から 1 名の教員が参加する。

概要：ALTを交えた外国語習得活動や授業参観及び授業研究会を通して、英語運用能力を伸ばし、英語指導の在り方を考えたり、「話すこと」に視点を当て、授業中の

言語活動やディベートの授業での導入方法について考えたりする。また、第3日では、生徒主体の英語授業について大学教授の特別講義から授業づくりについて学ぶ。第2日、第3日の研修では、高校の英語教育推進リーダーを講師として研修を実施する。

＜日程及び研修内容等＞

期日	ねらい・講義題・講師 等	会場
6 / 1 (月)	オリエンテーション 演習「フランス語講座 ―英語以外の外国語を学ぶ―」 授業参観 協議1「参観した授業について」 協議2「ALTとの効果的なTTについて」	群馬県立 中央中等 教育学校
7 / 10 (金)	演習1「Speaking Activities」 演習2「Personalization and Authentic English」 講義・演習「ディベートについて」	総合教育 センター
11 / 30 (月)	演習1「Reading Activities」 演習2「Teaching Grammar」 協議・演習「生徒主体の授業づくりについて」	総合教育 センター
	〔公開講座（選択受講可）〕 特別講義「Teaching English in the globalized world: Issues related to enhancing students' intercultural communicative competence in Japan」 講師 共愛学園前橋国際大学 准教授 中山 夏恵 氏	総合教育 センター

④ 「小学校学級担任英語指導力向上研修」

対象：小学校及び特別支援学校の教員（80人）

目的：小学校における学級担任及び英語担当を対象に、英語教育に対する理解を深め、英語指導力の向上を図る。

概要：子どもの意欲を高め自然な発話につなげる指導等に関する講義・演習を通して、小学校外国語活動における学級担任の役割について理解を深め、学級担任の英語指導力の向上を目指す。また、授業参観及び授業研究会を通して、コミュニケーション能力を育成するための工夫や指導方法を協議し、授業中の学級担任の役割や使用する英語について理解を深める。

なお、第2日の演習「人と関わる楽しさが感じられる授業づくり」では、小学校の英語教育推進リーダーを講師として、研修を実施する。

＜日程及び研修内容等＞

期日	講義題・講師等	会場
7/28 (火)	<p>講義・演習「外国語活動における学級担任の役割」 講師 東京都小学校英語活動研究会 理事 成美堂 教育研究開発室所属 井上 美佐子 氏</p> <p>講義・演習「学級担任が使う教室英語とその場面」 講師 県内小学校 教諭 総合教育センター 指導主事</p> <p>実践事例発表「群馬県小学校英語教育カリキュラムを基にした授業の工夫」 講師 総合教育センター カリキュラム開発チーム</p> <p>演習「人と関わる楽しさが感じられる授業づくり」 講師 県内小学校 教諭 総合教育センター 指導主事</p>	総合教育センター
10月	<p>授業参観及び授業研究会（各教育事務所管内拠点校） ※「小学校英語教育推進教員研修」第3日と合同開催</p>	各教育事務所管内の小学校

（2）群馬大学と連携した教員の指導力向上について

群馬県教育委員会と群馬大学との連携を踏まえ、群馬大学では、英語担当の教員向けに次のような公開講座を実施した。

① 英語教師の英語力アップ講座1：

英語で授業を行うための「発音力UP」ワークショップ

対象：小・中・高等学校及び中等教育学校の英語担当教員（55人）

目的：生徒への指導において、担当教員が適切な英語の発音を用いることができることを目的として実施した。実施に当たっては、群馬大学の施設を利用し、講師は、群馬大学の教授とした。

② 英語教師の英語力アップ講座2：

英語で授業を行うための「流暢さUP」ワークショップ

対象：小・中・高等学校及び中等教育学校の英語担当教員（65人）

目的：小学校外国語活動と中学校英語科及び高等学校外国語科を効果的に連携できる

ようにするため、指導方法や授業づくりについての研修を通して実践的指導力の向上を図る。ワークショップの実施に当たっては、県教育委員会の指導主事等が講師として参加することにより、大学と連携して指導力向上を図った。

### (3) 小・中・高の英語教育の接続を図るための研修について

小・中・高の英語教育の接続を図るために、小・中・高それぞれの校種の英語教員が一堂に会する研修を実施した。

- ① 「群馬県英語教育研究協議会」〔11月11日（水） 会場：県立渋川女子高等学校〕  
 対象：県内公立高等学校等英語教諭、県立特別支援学校英語教諭、市町村立小・中学校英語担当教諭等  
 目的：県立渋川女子高等学校における英語教育の取組とその成果を県内の英語教員に公開し、研究授業・研究協議・ワークショップ等を通して、同校の取組を推進するとともに、群馬県における英語教育の向上を図る。  
 内容：  
 ・授業参観  
 ・ワークショップⅠ：「『CAN-DO リストの形での学習到達目標』の活用について」  
 群馬大学教育学部 教授 上原 景子 氏  
 群馬県総合教育センター 指導主事  
 ・ワークショップⅡ：「英語教員の英語力アップ講座」  
 群馬大学教育学部 教授 上原 景子 氏  
 群馬大学教育学部 准教授 レイモンド・フーゲンブーム氏
- ② 「群馬県英語教育フォーラム」〔12月9日（水） 会場：群馬県総合教育センター〕  
 対象：県内公立高等学校等英語教諭、県立特別支援学校英語教諭、市町村立小・中学校英語担当教諭等  
 目的：平成30年度から始まる英語教育の早期化を踏まえ、小・中・高の一貫した英語教育推進に向け、小学校でどのような英語教育が行われているかを知る。また、文部科学省が求める英語の授業について、その具体的な方向性を確認する。  
 内容：  
 ・小学校英語（外国語活動）の取組について  
 小学校英語カリキュラムの説明とカリキュラム開発チームによる模擬授業  
 ・講演「コミュニケーション能力の育成をめざして ～自律した学習者を育てる～」  
 講師 文部科学省初等中等教育局 視学官 太田 光春 氏

## 3 英語教育カリキュラム開発についての概要

### (1) 英語教育強化地域拠点事業について

#### ① 事業目的

小学校英語教育の先進的な取組を支援し、英語教育に関する教育課程等の改善に資す

る実証的資料を得るため、市町村単位で「英語教育強化地域拠点」を指定し、研究開発を実施する。

② 強化地域拠点の学校校（県内小・中・高等学校）

国の委託事業として国指定 3 地域 15 校と県指定 2 地域 8 校

※国指定：前橋市、嬭恋村、沼田市 県指定：高崎市、太田市

（2）カリキュラム開発チームの位置付けと業務内容

① 位置付け

群馬県教育委員会義務教育課との連携の下、カリキュラム開発の拠点として総合教育センター内にカリキュラム開発チームを設置する。

② 主な業務

・小学校英語教育の早期化・教科化を踏まえ、小が校英語教育（外国語活動）のカリキュラムと授業モデル（指導案・教材等）の研究開発を行う。

・開発したカリキュラムを英語教育強化地域拠点校で授業実践し、その結果、さらに修正・改善を行う。

③ 構成員

指導主事及び長期研修員（計 7 名）

（3）研究計画・内容

① 実施計画

第 1 年次（平成 26 年度）から第 4 年次（平成 30 年度）までの 4 年間

② 第 1 年次に作成した主な小学校英語教育カリキュラム

内 容 等	
小学校 1・2 年	外国語活動（10 時間程度）
小学校 3・4 年	外国語活動【T T 指導用】（週 1 時間）
小学校 5・6 年	英語（週 1 時間）
小学校 3～6 年生	短時間学習（モジュール）

③ 第 2 年次に作成した主なカリキュラム内容

小学校 3・4 年	外国語活動【学級担任単独指導用】（週 1 時間）
小学校 5・6 年生	評価モデル資料（E-チャレンジ）
学級担任用英語表現集・活動集	

※学級担任が単独で指導できるように音声教材を作成

※昨年度作成したカリキュラムを修正・改善

カリキュラムは、平成 26 年度、全小学校・中学校に配付した。また、平成 27 年度にも修正・改善を加え、新たに配付予定である。

1 単位時間の活動計画例

小学校英語教育カリキュラム



1 単位時間の活動計画例		【6学年 第1時】	
単元名	英語であいさつしよう	ねらい	英語での挨拶や挨拶の返答、理解ができる。
教科書	英語であいさつしよう	教科書	英語であいさつしよう
教材	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)	教材	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)
目標	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)	目標	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)
活動	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)	活動	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)
振り返り	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)	振り返り	英語で挨拶や挨拶の返答のカード、CD (Hi, friends!), ボイチャング・セブンゲームワークシート (教材①)

5・6年生用 評価モデル資料

5・6年生用 評価モデル資料

好きなものをたずねよう!

好きな色をたずねよう!

好きな給食メニューをたずねよう!

好きなものが伝わっているかな?

(E-チャレンジ)

学級担任用英語表現集

学級担任用英語表現集

友だちのことを知ろう

ウォームアップ

活動

ゲーム

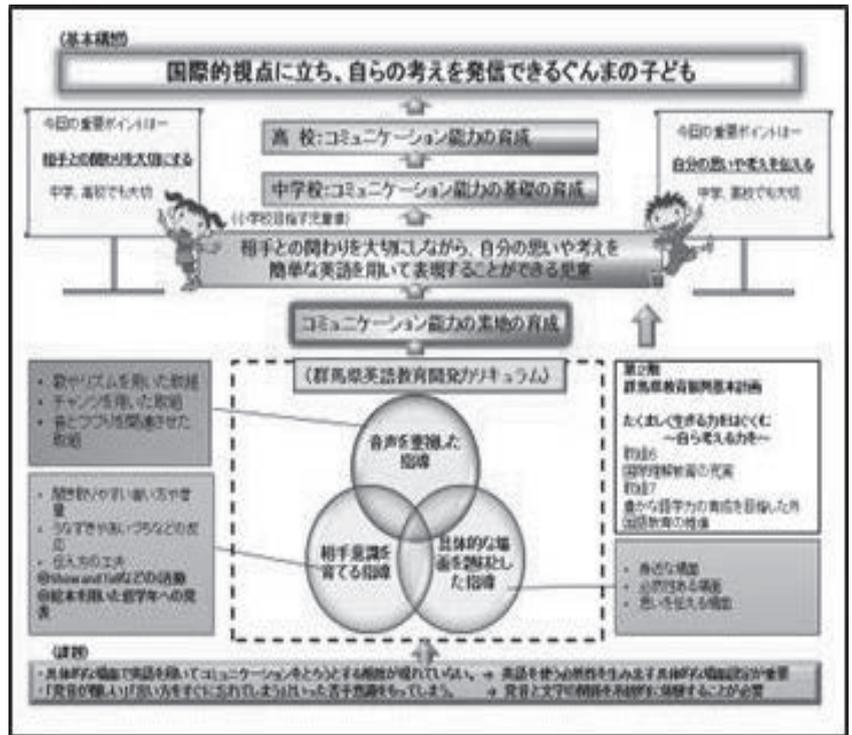
振り返り

#### (4) カリキュラムの基本構想

##### ① 考え方

群馬県版小学校英語教育カリキュラムでは、「国際的な視点に立ち、自らの考えを発信できるぐんまの子どもの育成」を目指して作成した。

カリキュラムの開発では、「音声を重視した指導」「相手意識を育てる指導」「具体的な場面を設定した指導」を3つの柱として、単元計画を作成した。



小学校英語教育カリキュラムの基本構造図

##### ② 目指す児童像

群馬県版小学校英語教育カリキュラムでは目指す生徒像を次のように設定した。

(次のページの図を参照。)

<小学校卒業段階>

相手との関わりを大切にしながら、自分の思いや考えを簡単な英語を用いて表現することができる児童

##### ○低学年・「親しむ」段階

英語に親しみ、身のまわりのものを英語でまねしようとする児童

##### ○中学年・「関わる」段階

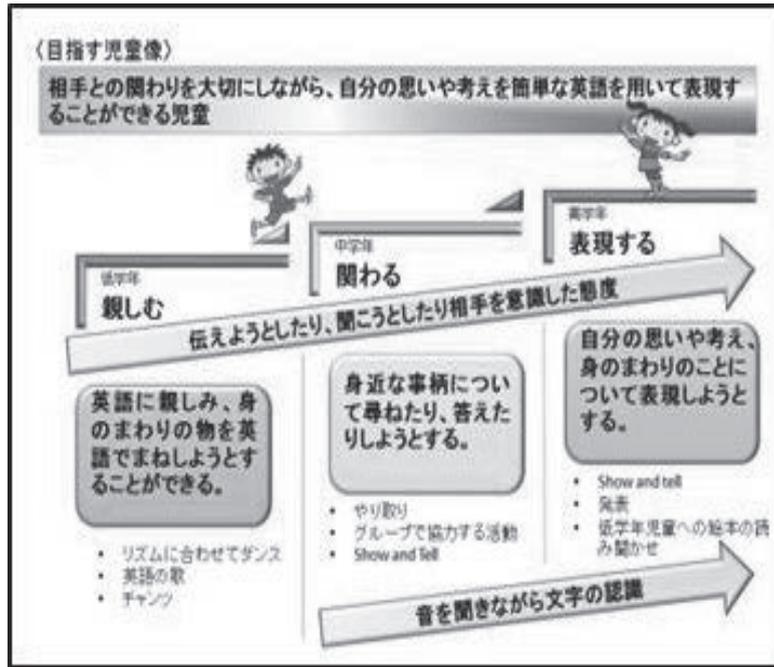
身近な事柄について、簡単な英語で尋ねたり、答えたりしようとする児童

##### ○高学年・「表現する」段階

自分の思いや考え、身のまわりのことなどについて、慣れ親しんだ英語を使って表現しようとする児童

##### ③ コミュニケーション能力を高める指導について

小・中・高等学校を通じて必要なコミュニケーション能力の育成を目指し、群馬県版小学校英語教育カリキュラムでは、「心豊かにコミュニケーションを図る児童」を目指し、左の図のような構想を基に、単元計画を作成した。



目指す児童像



心豊かに英語でコミュニケーションできる児童

(5) 英語教育強化地域拠点校でのカリキュラムの活用と実践

平成 26 年度にカリキュラムを作成し、2 学期以降各拠点校で活用している。

実際に活用するにあたり、各学校の実態に合わせ、カリキュラムに新しい活動を加えたり、児童の実態に合ったものに換えたりしながら実践した。

#### ○成果

- ・カリキュラムの活用による「ねらい」から「振り返り」までの授業設計
- ・ワークシート・音声教材など資料や教材の活用
- ・学級担任の授業支援

#### ○課題

- ・県内小学校へのカリキュラムの周知及び普及
- ・小中連携したカリキュラム開発

### (6) 今後について

拠点校では、カリキュラムの活用を実態に合わせて行っているが、周辺校への普及等が必要である。さらに、中学校の授業改善を踏まえ、小・中英語教育の連携を図った指導法を提案できるよう、新しいカリキュラムの開発、そしてカリキュラムの改善・修正が必要となってくる。

また、学校視察を行い、学校との連携を密にしながら、より活用しやすいカリキュラムの開発を行い、小学校・中学校の英語教育の推進に努めたい。

## 4 実践事例

### (1) 小学校の実践について

#### ①取組内容

- ・群馬県版小学校英語教育カリキュラムに基づく授業実践  
(3、4年生は外国語活動、5、6年生は英語科として実施する)
- ・補助教材の効果的な活用
- ・授業公開の実施(小中高の連携)
- ・評価についての研究  
(身に付けさせたい力を明確にした学習到達目標の作成、評価方法の開発、パフォーマンステストや調査等による評価の実施、通知表や指導要録の記載についての研究)
- ・校内の学習環境の整備
- ・児童や教員等の実態調査に関するアンケートの実施と分析

#### ②主な実践

##### <担任教員主導による英語指導>

小学校においては、学級経営に基づいた学級担任による授業づくりを目指し、授業実践に取り組んだ。英語の専門外の担任教員が、ALTや英語専科教員とのチームティーチングを通じて、英語指導力を高め、児童の実態に即した英語指導を行っている。指導を行うに当たっては、県総合教育センターが作成した群馬県版小学校英語教育カリキュラムを活用し、担任教員が自信を持って指導ができるようしている。

##### <専科教員を活用した効果的な指導体制の確立>

各拠点地域に配置されている英語専科教員を「英語コーディネーター」と位置付け、本

事業の英語教育推進リーダーとして、拠点校を兼務するなどし、校内の英語学習環境の整備、教員の英語指導力の向上に向けた支援や助言を行った。また、授業の打ち合わせでは、ALTと教員とのパイプ役、調整役を務めるなど、コーディネーターとしての責務を果たした。

### <英語の教科化に向けた評価の在り方の研究>

外国語活動では3観点、英語科では4観点の評価規準を設け、評価を行った。評価方法としては、外国語活動においては、振り返りカード、観察を中心に行い、英語科においては、振り返りを含めたパフォーマンステストを中心に行った。パフォーマンステストの実施は、「聞く」「話す」に関する評価を学級担任、ALT、英語コーディネーターとの英語によるコミュニケーション形式で行った。その際、学習した表現だけではなく、相づち、アイコンタクトなどについても、評価を行った。

### <公開授業、授業研究会による成果の普及>

各校の校内研修と連携しながら、年間にわたり公開授業・授業研究会を計画的に実施し、研究成果の普及に努めた。また、公開授業に向けて、事前に指導主事の訪問を行ったり、校内研修への参加を要請したりした。児童のコミュニケーション力の育成に向けた共通した視点での話し合いを重ねたことにより、英語の指導法の改善や指導力の向上にもつながった。初めは不安を感じていた英語専門外の教員が、自分のアイデアを生かしながらALTとの打ち合わせに積極的に取り組むなど自信と意欲をもって英語の授業に臨む姿が多く見られるようになった。



公開授業での児童の様子

### <英語環境整備>

毎日の学校生活の中で、児童の英語に触れる機会を増やすことが英語に慣れ親しむことにつながると考え、英語環境整備を行った。校内に英語コーナー等を設け普段の授業の中で使う挨拶をはじめ、授業で扱った単語や既習表現を使ったゲームを掲示するなど、児童が日常的に英語に接することができるように環境整備を行った。

また、英語学習の専用教室を設置し、教員が May I come in? と児童に話しかけながら、児童一人一人を教室に迎え入れ、英語学習への雰囲気づくりを行いながら授業に取り組めるようにした。



校内に設置された英語コーナー

## (2) 中学校の実践について

### ①取組内容

- ・学習した表現を使って自分の意見や考えなどを伝え合う言語活動の充実
- ・英語で行う効果的な授業の在り方についての実践研究
- ・授業公開の実施（小中高の連携）

- ・英語能力判定テストの実施と分析
- ・生徒や教員等の英語学習に対する質問紙調査の実施と分析
- ・学習到達目標（試案）の修正と改善
- ・身に付けさせたい力を明確にした上でのパフォーマンステストの実施
- ・定期テストへのパフォーマンステストの導入

## ②主な実践

### <小学校の英語学習を踏まえた授業>

小学校での学習の流れを継続するために、語彙や文法知識に関する学習の導入場面では音声を重視した学習過程をとった。また、小学校英語で身に付けたジェスチャー、相づち、スマイル、アイコンタクトなどの言葉によらないコミュニケーションの手段を意識させ、言語活動に取り組みさせた。小学校における英語学習を十分に踏まえることにより、生徒は中学校の英語学習への苦手意識をもつことなく、授業に取り組むことができた。

### <「CAN-DO リスト形式」の学習到達目標の設定>

「CAN-DO リスト形式」の学習到達目標を設定したことにより、3年間を通して生徒に身に付けさせたい英語力の目標が具体的な生徒の姿をとって共有しながら、授業実践にあたることができている。

### <「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標（例）>

外国語表現の能力				外国語理解の能力			
Speaking(話すこと)		Writing(書くこと)		Listening(聞くこと)		Reading(読むこと)	
<b>Grade 3 社会的な話題に関して、自分の考えや気持ちを伝え合うことができる</b>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>●切り直し質問をしながら姿勢やアイコンタクト、音量、英語の音やリズムに気をつけながら話すことができる。</li> <li>■郷土の歴史・文化や社会的な話題について、1分程度の説明や紹介ができる。</li> <li>★相手の言った内容に関する質問を加えながら、友だちとの会話を30秒程度続けられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察</li> <li>・英会話サーキット</li> <li>・スピーチ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分の書きたいことや複数の絵や写真について、順序を表すことばなどを使用し、100語以上で書くことができる。</li> <li>■教科書の文についての簡単な感想を3文程度で書くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチ原稿</li> <li>・レポート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●簡単なアナウンスや道案内について、聞いて理解することができる。</li> <li>■知っている単語をヒントに類推しながら内容を理解することができる。</li> <li>★先生や友だちのクラスルームイングリッシュがわかり、対応することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容に関するTF,QA</li> <li>・観察</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●意味の区切りを意識し、正しいイントネーション強勢で教科書を音読することができる。</li> <li>■100語程度の初見の読み物について概要を理解することができる。</li> <li>★1200語以上の語彙の意味を理解し、読むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音読テスト</li> <li>・観察</li> <li>・内容に関するQA</li> <li>・単語テスト</li> </ul>
<b>Grade 2 夢や身近な地域に関して、自分の考えや気持ちを伝えることができる</b>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>●簡単な感想を加えながら姿勢やアイコンタクト、音量、英語の音やリズムに気をつけて話すことができる。</li> <li>■自分の夢や沼田などについて、理由を加えて40秒程度の説明や紹介ができる。</li> <li>★身近な話題について、友だちとの会話を30秒程度続けられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察</li> <li>・スピーチ</li> <li>・パフォーマンステスト</li> <li>・観察</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分の気持ちや出来事・好きなことなどについて、理由を加えて50語程度で書くことができる。</li> <li>■日記や予定・計画について3文程度で書くことができる。</li> <li>■自分の夢や沼田についての紹介をつながりを意識して書くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチ原稿</li> <li>・レポート</li> <li>・ポスター</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日常生活の身近な話題に関する話を聞いて、その内容をだいたい理解することができる。</li> <li>■知っている単語をヒントに類推しながら内容を理解することができる。</li> <li>★先生のクラスルームイングリッシュの意味がわかり、対応することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容に関するTF,QA</li> <li>・観察</li> <li>・観察</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●正しい発音、区切り、抑揚を意識して教科書を音読することができる。</li> <li>■80語以上の身近な話題についての文章や物語について、読んで理解することができる。</li> <li>★800語程度の語彙の意味を理解し、読むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音読テスト</li> <li>・観察</li> <li>・内容に関するQA</li> <li>・単語テスト</li> <li>・観察</li> </ul>
<b>Grade 1 身の回りのことを、簡単な英語で紹介することができる</b>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>●簡単な相づちを打ちながら姿勢やアイコンタクト、音量、英語の音やリズムに気をつけて話すことができる。</li> <li>■自分のことや他人のことについて、30秒程度の説明や紹介ができる。</li> <li>★友達や先生に対して、簡単な質問をすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察</li> <li>・スピーチ</li> <li>・英会話テスト</li> <li>・観察</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●簡単な自己紹介を20語程度で書くことができる。</li> <li>■be動詞、一般動詞の両方を使って、家族や友達を紹介する英文を書くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチ原稿</li> <li>・レポート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ゆっくり、または繰り返して話されれば、日常生活の身近な話題に関する話を聞いて、その内容を理解することができる。</li> <li>■知っている単語をヒントに類推しながら内容を理解することができる。</li> <li>★40種類程度のクラスルームイングリッシュの意味がわかり、対応することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容に関するTF,QA</li> <li>・観察</li> <li>・観察</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●単語と単語のつながりを意識しながら、正確に教科書の英文を音読することができる。</li> <li>■50語程度の身近な話題についての文章や物語について、読んで理解することができる。</li> <li>★500語程度の語彙の意味を理解し、読むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音読テスト</li> <li>・観察</li> <li>・内容に関するQA</li> <li>・単語テスト</li> <li>・観察</li> </ul>

### ＜即興的に伝え合う言語活動の実施＞

事前に準備をした原稿をそのまま読んだり、暗記したことを発表したりするだけではなく、即興的に話す場面を授業に位置付け、自分の思いや考えを、間違いをおそれずに、英語で話すことができるようにした。

また、相手に対して一方的に英語を話すのではなく、相手が話した内容をしっかりと聞いて、それに対して英語で話ができるようにしている。



生徒同士の即興的なやりとり

### ＜「話すこと」の評価の工夫＞

生徒のスピーチやショーアンドテル、音読などによる「話すこと」の評価を実施した。

スピーチでは、既習表現を使いながら、自分なりの思いや考えが表現されているかに中心をおいて評価を行った。また、「アイコンタクト」「なめらかさ」「声量」「態度面」など、自分の思いを伝えるための工夫についても、評価の視点をとした。

ショーアンドテルでは、パフォーマンス後の友達からの質問に対して、相手に伝わるように分かりやすく答えているかなど、即興的に応答できているかという視点から評価を行った。

## （３）高等学校の実践について：群馬県立渋川女子高等学校の取組

### ① はじめに

本校は平成 24 年から 25 年にかけて、文部科学省より「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」の事業指定を、さらに、平成 26 年以降、「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、新しい英語教育モデルで実践を行ってきた。その結果、多くのポジティブな成果が本校の英語指導にもたらされ、今後、英語教育がどのような方向に進むべきかについての様々なヒントを得ることができた。この報告では、本校の取組の概要及びその成果と課題について述べたい。

### ③ 指導体制について

新しい方向性での指導を英語科職員全体で共通理解のもとで行っていくのに欠かせないものが、「CAN-DO リスト形式での学習到達目標」を設定することであった。これにより、学年間で担当者や使用教科書が変わっても、学校全体として同じ方向性で学習指導ができるようになってきた。従来は、文法項目ごとに問題が解けるようになってきているか、大学受験の模擬試験での成績はどうか、などが習熟度をイメージする基準のようなものであったが、現在では、目標設定したコミュニケーション能力の観点から、日々の生徒の状況を観察したり指導方法や評価方法を模索したりする姿勢が教員全体に浸透していると感じている。

### ④ 授業におけるスピーキングの指導について

本校では、「CAN-DO リスト」に掲げた学習到達目標の達成を実現するために、特にス

スピーキングを重視し、スピーキング力向上への生徒のモチベーションを高めることが他のスキル（リスニング、リーディング、ライティング）の能力向上を導くように、言語活動を工夫し、毎日の授業の中でできるだけ多くのスピーキング活動を行わせている。スピーキングでは、言いたいことが伝わるかどうかを絶対的に重視し、「文法的な誤りは気にする必要はない」というスタンスで指導している。ただし、会話した内容をレポートの形で記録させるという活動の中では、「書くときは正しく書く」という指導を行い、表現における文法的な正確さを少しずつ育てるよう配慮している。このように、毎日の授業で英語を話させることは、2～3年生で行う英語によるディベートやディスカッションなどの高度な言語活動への確実な基礎作りとして不可欠であると考えている。

#### ④ 多読指導について

「英語表現」の授業において、副教材として多読用のリーダーを使用している。生徒は入学後、最もやさしいレベルから始めて、興味・関心のある読み物を自分の進度に応じて自ら選んで読み、レポートを書き、英語による「ビブリオバトル」の形でプレゼンテーション活動をしたり、クラス全員で同じ物語を読んで「英語による読書会」の形式でディスカッション活動をしたりしている。その結果、生徒は単に物語を読んで楽しむ、というだけに留まらず、仲間と感想や意見を交換・共有し、お互いに英語で表現して伝え合うというところまで意識して学習に取り組むようになってきている。

#### ⑤ 取組の成果及び課題について

ア. 生徒の英語力の向上

新たな指導方法を導入して以来、生徒の英語力は着実に向上してきている。本校は「いわゆる進学校」であるため、大学受験のための模擬試験が評価資料のひとつであるが、全国偏差値が年々上がってきている。授業時間の多くの部分をスピーキングの指導に割いているにもかかわらず、筆記中心の試験でこのような結果が出ていることは、注目すべきことであると受け止めている。GTECのようなコミュニケーション能力を重視した外部試験において、この傾向は更に顕著にみられ、特に、リスニングとライティングの分野において成績の伸長が大きい。スピーキング能力にも明確な成果が現れており、英検2級の試験でも2次の面接で不合格になる生徒はほとんどいなくなった。

イ. スピーキングと多読指導の課題

スピーキング活動で、「準備してから話す」ということに関しては、上級学年ではかなり高度な内容のことまで話すことができるようになってきている。ただ、メッセージや情報を交換した後に、即興的に会話を継続していく力をいかに育てるか、ということはまだまだ課題があると感じている。特に、自分が言いたいことがよく伝わらない場合に、何が原因で伝わらないのかを正しく分析し修正するという力をいかに育てるかが大きな課題である。多読については、今後多読教材の内容の多様化を図りたいと考えている。現在、難易度別に構成されて出版されているのは物語中心であるが、ドキュメンタリーやエッセイ、評論などの他分野にわたる書籍を難易度別に集めてライブラリーに加えていくことができれば、多読活動が更に充実したものになると思われる。

## ⑥ おわりに

「英語教育強化地域拠点事業」における主要なテーマである「小・中・高等学校の連携」に向けて、県内でも授業公開、意見交換など、様々な有益な取組が始まっている。今後、「各校種の指導をいかにつなぐか」についての研究が大変重要であり、日本の英語教育発展の鍵をにぎるであろうと感じているところである。



公開授業での生徒の様子

## 5 外部専門機関との連携

2020年度の完全実施に向けて英語教育改革が進行する中、先の1～4で述べたように、群馬県では小学校・中学校・高等学校の一貫性を重視して、英語教育強化地域拠点授業に取り組んでいる。また、2で述べたように、外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の取組として、小・中・高の各校種における教員の英語指導力と英語運用能力の双方の向上のための様々な研修を行っているが、特に地域の大学として、主に以下の項目において群馬大学との連携を図っている。

- ・英語教員を対象とした群馬県教育委員会と群馬大学の共催による公開講座の開催
- ・教員の英語指導力向上および英語運用能力向上に関する各種研修会への講師派遣
- ・連携協議研究会および連携協議連絡会への委員としての参加

こうした連携における大学の主な役割は、有識者としての専門的知識の提供や提言・助言などである。英語教育の実践と関連づけた大学側からの言語学や第2言語習得理論などの情報や知見の提供は、英語教育改革の取組の有機的、効果的な実践に貢献することが期待されている。また、群馬大学は教員養成学部をもつことから、連携をとおして、教育現場から大学側へ、英語教員の養成に役立つ情報や知見を提供することができる。連携協議研究会や連携協議連絡会への参加では、大学教員が授業参観や現職教員との意思疎通の多くの機会を得ることができるため、教育現場のニーズを大学教員が学び、それを研修や教員養成に還元することができる。特に、小・中・高の教員養成機関として、各校種の英語教育の充実はもとより、これらを見通す一貫性のある英語教育の展望を近い将来教員となる学生に提供することは、地域大学の重要な使命の一つである。

以上のように、教育現場とともに改革の方向性、目指す児童生徒像、実践の状況や課題を大学側も共通理解し、全県一致の取組に積極的に参加することには大きな意義がある。

## 県外実践校に学ぶ

今日の学校には、確かな学力向上のための学校と家庭・地域の人々が一体となった教育が強く求められています。そのためには、子どもの学びの事実を通して家庭・地域の人たちを力強く巻き込んでいく力が必要です。

今回は、「学びの深化」と「学びの拡充」を視点に、「学びの質的向上」を目指した地道な校内研修を通して、教職員が一丸となって学力向上に取り組んできている新潟県長岡市立阪之上小学校の実践を紹介します。



校長 荒木 正

研究主題 「学びの質的向上」を図る教育活動の創造

副題 「学びの深化」「学びの拡充」を視点とした取組

新潟県長岡市立阪之上小学校（児童数299名）

新潟県長岡市今朝白町1丁目11番21号

TEL 0258-32-2134 FAX 0258-32-2135

URL <http://www.kome100.ne.jp/sakanoue-es/>

### 1 本校の概要

本校は、戊辰戦争後の廃墟と化した長岡の地に、長岡復興のシンボルとして明治2年5月に開学した国漢学校の流れを汲む新潟県屈指の伝統校です。JR長岡駅から徒歩5分の長岡市の中心地に位置しています。

前身の国漢学校は、分家の三根山藩から救援米として送られた百俵の米を長岡藩士らに配分せず、長岡復興を担う人材育成のための学校開設資金に組み込んだ小林虎三郎らの英断によって設立された学校です。そうした歴史的背景から、本校は「米百俵の学校」と呼ばれています。また、小泉純一郎首相の所信演説でも「米百俵の精神」が引用され、全国的にも知られるようになりました。学校には「米百俵」の故事に関わる資料が収められた伝統館があり、全国から多くの見学者が訪れます。国漢学校、阪之上小学校からは、大日本帝国憲法の制定に深く関わった法学博士の渡辺廉吉、日本で最初の図工教科書を作った小山正太郎、連合艦隊司令長官の山本五十六をはじめ多くの優れた人材を輩出しています。

本校が歩んできた歴史は、長岡市の発展とも大きく重なっています。学区には様々な文化的遺産、施設があることから、伝統教育には特に力を入れてきた学校でもあります。近年は、伝統教育に加えて、文部科学省の学力向上フロンティアスクールの指定校になったり、新教育システム開発事業に参加したりするなど、新しい時代の教育をリードすべく、実践研究を重ねています。

ここ5年は、授業改善を通じた学力向上に力を注いできました。特に、子どもの「学びの深化」と「学びの拡充」を視点に、「学びの質的向上」を目指して校内研修を進めてきました。その結果、全国学力・学習状況調査では、国語、算数、理科で、ほぼ全国平均を15～20ポイント上回るようになってきています。平成27年11月には、教育研究発表会を開催し、全学年の授業、ポスターセッション、音楽発表、英語劇「米百俵」の上演など、本校の特色がよく見える教育活動を公開いたしました。

## 2 本校の研究

### (1) 主題設定の理由

全国学力・学習状況調査の実施により、時代の求める学力の一端がより具体的になり、「基礎的・基本的な知識・技能」と「活用力」の育成を目指した授業が行われるようになって久しい。調査問題は、学力の一部を測定しているに過ぎないと言われるが、一方で、時代の求める確かな学力を見事に反映している。授業を中核にしながらも、教育活動全体を通してこうした調査問題にも対応できるような学力の形成を図っていくことが求められる。

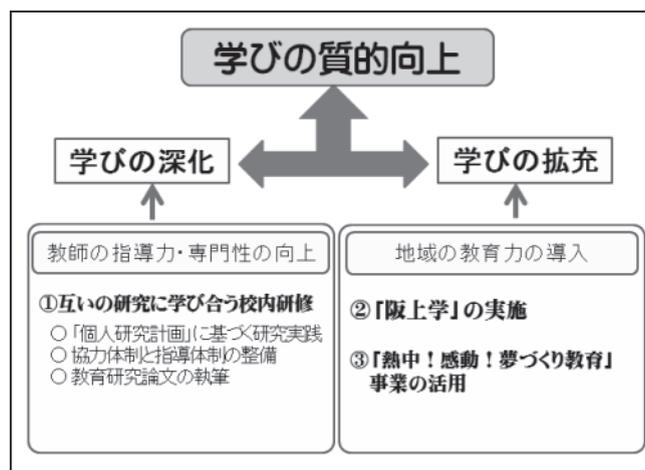
確かな学力の育成に強いこだわりをもつ本校は、国立教育政策研究所発行の資料なども参考に、全校体制で授業改善に努めてきた。しかし、調査結果は、いわゆる「A問題」と「B問題」との正答率の差が大きく、無答率は高い状態だった。一人一人に根付いた学びとは言い難く、授業改善というレベルを超えて、教育活動全体から学力向上の在り方を根本的に見直す動機付けとして十分であった。

そして、この結果は「米百俵の精神を引き継ぐ学校」としての誇りをもつ本校に、「一人一人の確かな学びを確立し、学力ナンバーワンの学校づくり」という目標を創り出すものとなった。

### (2) 「学びの質的向上」を図る教育活動の構想

この目標を具現するために、本校が着目したことは、子どもの学びを質的に向上させることである。これは、ただ闇雲に学びを量的に保障することだけで学力を高めようとする反省の上に立っている。「学びの質的向上」は、子どもの学びへの期待感を引き出し、自ら思考し判断し表現して学習に対峙しようとする構えをつくる。そして、そこで得られた知識や技能は、子どもの学びへの達成感や満足感を帯び、本物の学力となる。

しかし、このような「学びの質的向上」は、限られた時数や人的、物的条件の中で行われなければならない。そこで、私たちは、「スクラップ・スクラップ・アンド・ビルド」を合い言葉に、これまでの教育活動の徹底的な見直しを図り、特化してその具現化に取り組んできた。その中で大事にしたことは、「学びの深化」「学びの拡充」の2つの視点である。



【「学びの質的向上」を図る教育活動 構想図】

#### ① 「学びの深化」をつくり出す教師の指導力・専門性の向上

子どもの「学びの深化」は、教師の高い指導力と専門性が必要不可欠である。そこで、校内研修については、従来の職員全員が同じ研究内容に取り組み、授業力の底上げや一律化を目指す研修スタイルから、職員の個々の特性を生かす研修スタイルに転換を図って取

り組むこととした。各自の専門分野から授業改善に深く取り組むとともに、互いの専門性に学び合うことにより、学校全体としての授業改善が図られ、結果的に一人一人の授業力を向上していけると考えたからである。

## ア 互いの研究に学び合う校内研修

校内研修では研究主題のもと、「個人研修計画」を中核に据えた研修を行う。その際に、次のような年間サイクルを構築して研修を進めていく。

	職員一人一人の研修の取組		サポート体制
前期 4-5月	計画立案	・個人研修計画の作成	・校内研究主題の検討 ・研究主任による動向に関する情報提供 ・学年部チームによる個人研修計画検討 ・外部指導者の決定
中期 6-12月	授業実践と市教育論文の執筆	・日常的な授業実践と個人研修計画の見直し ・指導案の作成 ・研究授業公開 ・長岡市研究論文の執筆（2年に一度）	・学年部チームによる個人研修計画・指導案検討 ・学年部チームによる本時授業シミュレーション検討 ・外部指導者を招いた授業協議会の開催 ・研究授業に関する研究通信の発行 ・教頭・教務・研究主任による論文指導
後期 1-3月	校内研究の執筆	・校内研究紀要の執筆 ・次年度の個人研修計画の構想	・教頭・教務・研究主任による紀要執筆指導

そして、この年間サイクルでの研修を推進していくに当たり、次のような方策を講じていく。

## イ「個人研究計画」に基づく研究実践

「個人研修計画」とは、学習指導上の課題、その課題を克服するための教師の主張、具体的な手立ての3点を記述した研究計画である。年度当初に職員一人一人が「個人研修計画」を作成し、その提案に基づいて授業公開するとともに、日常の授業の中でも実践を積み重ねていく。

「個人研修計画」で取り上げる教科・領域は、校内として特定の研究教科に絞らず、各自の研究教科とする。それぞれの専門性を生かすことで主体的な取組を促すとともに、それまでの研究実績に支えられた、より提案性の高い研究となるようにする。とくに国語や算数を専門とする職員は、全国学力・学習状況調査等の結果分析を生かして提案するなど、実効性の高いものにしていく。

## ウ 協力体制と指導体制の整備

個人研究を補強し、研究内容・方向性を説得力あるものにするために、学年部（5～6名）を研修の母体とし、研究推進委員が主となり授業研究を進める。また、研究実践をより確かに、より効果的に行うためには、専門性の高い指導者が必要不可欠である。そこで、外部指導者を実践者自らが選び、年間を通した指導をお願いする。授業とともに、それぞれの「個人研修計画」に基づいて各教科・領域の最新の考え方について指導を受ける機会とする。

## エ 教育研究論文の執筆

毎年校内で研究紀要を作成し、個人研究の成果をまとめるとともに、概ね2年に1度長岡市の教育研究論文コンクールに応募することとする。論文に仕上げることは、自分の研

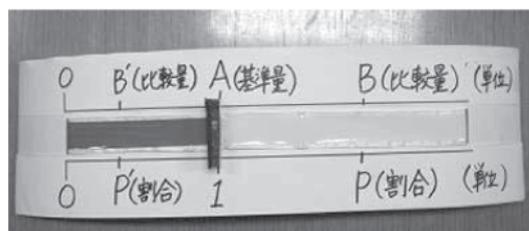
究を整理することであり、客観的な評価を受けることである。研究が自己満足に終わらず、論文コンクールで入選するレベルとなることを求めていく。

## ② 「学びの深化」をつくり出す～互いの授業に学び合いながら新たな授業を構想実践～

教師の高い指導力と専門性の向上を目指し、互いの研究に学び合う研修に取り組んだ実践例を算数科の実践を例に述べる。

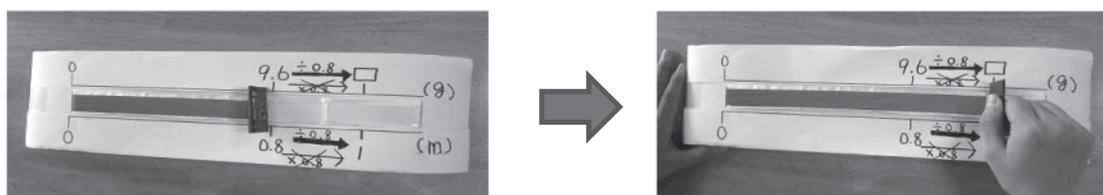
6学年の担任であったA教諭は、全国学力・学習状況調査で定着が不十分であった「割合に関する意味理解」の指導の充実を課題として研究を進めた。そして、「割合」にかかわる単元（「5年：割合とグラフ」「6年：比とその応用」）において、対応数直線を繰り返し活用して問題解決を図り、比例的推論の考え方をスパイラルに高めていくことの大切さを明らかにした。

次年度、それまでA教諭と同じチームで検討してきたB教諭は、「小数の割り算」の単元を授業公開し、A教諭の研究と同様に、対応数直線を活用して授業実践した。その際に、これまでの対応数直線を可動式にし、操作したり書き込んだりできる機能を持たせた「動く対応数直線」の教具を新たに開発した。



動く対応数直線

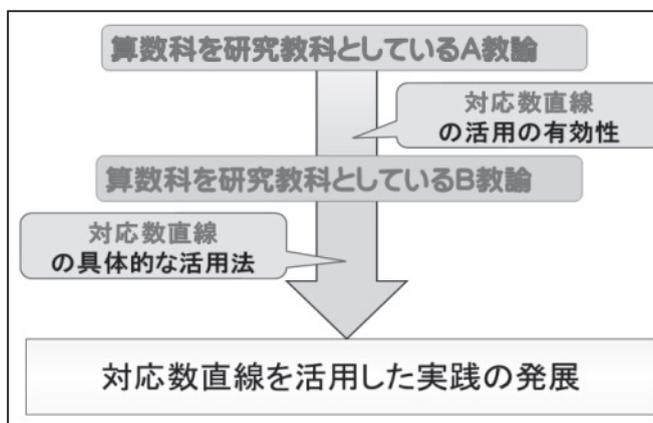
そして、B教諭は、この教具を課題解決への自己活動や仲間との話し合いの場面において、単元を通して活用することで、子どもたちが小数の割り算の計算の仕組みやその意味に対する理解を深めていく姿をつくり出すことができた。



「動く対応数直線」の操作と書き込みの様子

このように、割合に関する単元において、対応数直線を活用していくことが有効であることを確認したA教諭の成果を踏まえ、B教諭は自らの授業において、さらにその具体的な活用法を明らかにし、対応数直線を活用した実践を発展させていった。

この例では、B教諭が一人でA教諭の実践を発展させているように思われるが、実際には、B教諭の実践に際してその都度具体的なA教諭の関わりがあった。互いの授業に深くかかわり合うことにより、実践の価値や可能性が共有され、よりよい実践研究へとつながったのである。本校で大切にしてきた互いに学ぶ教師集団の姿が見られたときでもあった。



互いに学び合う関係

### (3) 「学びの拡充」をつくり出す地域の教育力の導入

子どもの学びへの興味・関心は多種多様であり、必ずしもこれまでの教育活動の枠に収まるものではない。そこで、本校では、子どもの様々な特性を生かし、追求力を育むことをねらいとして、地域の専門的知識・技能を有する人材を有効に活用しながら、子どもの「学びの拡充」を図る教育活動に力を入れてきた。

#### ① 地域の教育力を活用した「阪上学」の実施

「阪上学」は、夏季休業中を利用し、学習、スポーツ、文化活動、ボランティアなど様々な分野の講座（約10講座）を設定して、全校の子どもの希望制により実施する阪之上小学校独自の教育活動である。各講座については、地域や全国レベルで活躍する人材を講師として招き、保護者ボランティアの協力を得て、補充・発展的な内容を中心に設定する。この「阪上学」では、学ぶ意欲を向上させ、子どもの可能性を引き出すことをねらいとする。

#### ア これまで開設してきた講座

- 基礎学力向上コース<指導：学級担任>
- 基礎泳力アップコース<指導：学級担任>
- 「河本耕平選手と泳ごう」<講師：河本耕平様>
- ハローイングリッシュコース<講師：長岡市ALTの皆様>
- 本となかよしコース<保護者ボランティア>
- エッグポプリコース<保護者ボランティア>
- さいほうにチャレンジコース<講師：地域ボランティア>
- 絵手紙にチャレンジコース<講師：地域ボランティア>
- アダージョ福住訪問コース<引率：学校職員>
- プチ生け花コース<講師：MOA美術文化インストラクター>
- 「電気を学ぼう」<講師：東北電力長岡営業所員>

#### イ 27年度の「阪上学」の実際

平成27年度の「阪上学」では、延べ1665名の子どもが参加した。全校児童一人当たりでは、平均約5.5コースを受講した。毎年連続で同じコースを受講する子どもも多く、講師は毎年違ったメニューとなるように工夫し、内容の充実を図っている。

「阪上学」の実施に当たっては、保護者からのボランティアを募集しており、平成27年度は、延べ133名（全家庭数248）の保護者ボランティアを得て実施した。講師のレベルが高く、協力する保護者ボランティアも事前の学習や準備をして臨んでくださる方が多く、子どもたちの活動の質を高めることや更なる意欲付けによい影響を与えている。

#### ② 長岡市「熱中！感動！夢づくり教育推進事業」の活用

豊かな体験と確かな学びで夢を描く力と生き抜く自信を育むことを目的とした長岡市の「熱中！感動！夢づくり教育推進事業」を本校の教育活動に積極的に組み込む。特に本校では、総合的な学習の時間の活動において、長岡の歴史を学ぶ事業を多く活用している。

この「熱中！感動！夢づくり教育推進事業」は、各学校で自由に選択活用が可能であり、基本的には一部を除いて市教育委員会の予算で執行されている。特色ある教育活動の推進に極めて貢献する事業である。平成27年度本校における活用は、次ページに示した15事業に及ぶ。

- 地層見学＜講師：市立科学博物館職員＞（6年理科）
- ジョイフル里山木工塾＜講師：雪国植物園職員＞（4年図画工作科）
- 「巨大書に挑戦」＜講師：書道塾指導者＞（6年書写）
- 「楽しい草花あそび」＜講師：市立科学博物館職員＞（1・2年生活科）
- 「探検しよう！学校の生き物ウォッチング」＜講師：市立科学博物館職員＞（4年総合）
- 「しらべてみよう 小林虎三郎」＜講師：市立科学博物館職員＞（4年総合）
- 小学生ロボコン教室＜講師：NPO法人ながおか未来創造ネットワーク＞（クラブ活動）
- ハローイングリッシュ＜講師：長岡市英語指導教室＞（阪上学）
- ーようこそ「まちの先生」事業ー
- 「琴指導」＜講師：地元琴教室講師3名＞（4年音楽）
- 「着衣泳指導」＜講師：消防署員＞（1～6年体育）
- 「そろばん指導」＜講師：珠算塾指導者＞（3年算数）
- 「囲碁・将棋指導」＜講師：元教員2名＞（クラブ活動）
- 「長岡の三傑」＜講師：河井継之助記念館長 長岡高校記念館館長 北越銀行資料室＞  
（5年総合）
- 「学校の歴史指導」＜講師：元教員 本校OB＞（3年総合）
- 「書写指導」＜講師：元教員＞（6年書写）

### 3 研究の成果として

「学びの深化」「学びの拡充」を視点とし、「学びの質的向上」を図る学校づくりを推進したことにより、次のような子どもの変容を促すことができた。

#### （1）「学びの深化」の視点から

自分の専門分野から授業改善に深く取り組むとともに、互いの専門性に学び合う職員集団となった。また、学校全体としての授業改善が図られ、一人一人の授業力が向上している。そして、そのことによって、次のような成果を生み出すことができた。

- 深い教材研究を行い、考え応えがある問題ややりがいのある活動が設定されることによって、対象を深く吟味したり、仲間と協働して解決したりしようとするなど子どもの追求力を育むことにつながっている。
- 学校全体としての子どもの学びへの意識が高まり、仲間を憧れとしたり、手本となろうとしたり、競い合ったりするなど、子ども同士で切磋琢磨して学習する気運が生まれている。

#### （2）「学びの拡充」の視点から

地域の教育力を生かす教育活動を推進することにより、次のような成果を生み出すことができた。

- 子どもの憧れや目標となる地域の人材を指導者として招聘し、それぞれの分野での取り組み方を示してもらうことにより、子どもたちは真摯に学んでいくことの大切さを感じるとともに、将来への夢や希望を育むことにつながっている。
- 総合的な学習の時間の学びの中で、子どもの問題意識に基づいて地域を学ぶ際のゲストティーチャーとして地域の人材を活用することで、ふるさと長岡に思いを馳せるとともに、長岡で生きている自分を自覚することにつながっている。

(3) 全国学力・学習状況調査の本校の結果

<H25年度の結果> (％)

	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	理科
本校平均正答率	77.9	67.8	91.9	76.6	
全国平均正答率	62.7	49.4	77.2	58.4	
<b>全国比</b>	<b>+15.2</b>	<b>+18.4</b>	<b>+14.7</b>	<b>+18.2</b>	

<H26年度の結果> (％)

	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	理科
本校平均正答率	86.8	74.8	93.4	78.5	
全国平均正答率	72.9	55.5	78.1	58.2	
<b>全国比</b>	<b>+13.9</b>	<b>+19.3</b>	<b>+15.3</b>	<b>+20.3</b>	

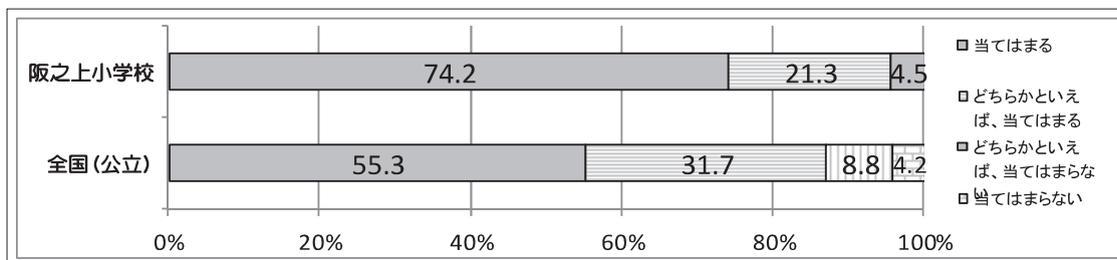
<H27年度の結果> (％)

	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	理科
本校平均正答率	88.9	86.2	91.9	63.8	75.3
全国平均正答率	70.0	65.4	75.2	45.0	60.8
<b>全国比</b>	<b>+18.9</b>	<b>+20.8</b>	<b>+16.7</b>	<b>+18.8</b>	<b>+14.5</b>

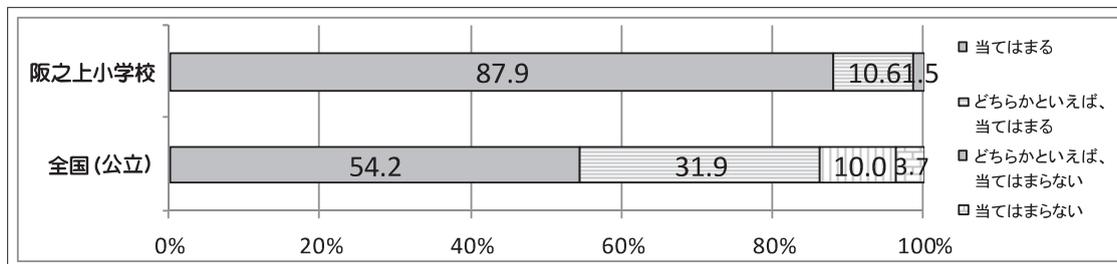
本校の平均正答率は、全国水準を大きく上回り、県内トップのレベルにあると推察される。しかも、国語、算数とも、A問題よりB問題の方が全国比で高くなっている。これは、子ども主体の問題解決を中心に据え、思考力・判断力・表現力の育成に重点を掛けて授業改善を図ってきた成果と捉えている。また、教育界の動向を踏まえて個人研修計画を作成し、実践を積み重ねてきたことが、国語、算数の学習にも生きて働いていたと推察される。

授業改善は、学校生活全体にもよい影響を与えているようだ。H27年の「児童質問紙」では次のような結果を示している。

「質問事項 (24) 学校に行くのは楽しいと思いますか」



「質問事項 (26) 学級みんなで協力をして何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」



肯定的評価を行った子どもの割合が、それぞれ全国比で+8.5、+12.4ポイントであった。学校生活の大半を占める学びの時間が充実しているからこそ、学校生活に対する満足感が高い結果となったととらえる。教師の高い専門性と地域の教育力を活用することで、子どもたちの興味・関心に応える教育活動を提供することができた成果と考える。

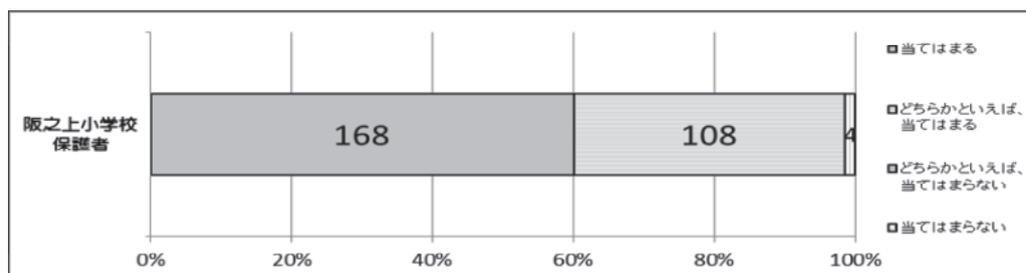
#### (4) 長岡市教育研究論文の結果

H24・25・26・27年度の長岡市の教育研究論文では、本校職員の多くの論文が入選した。

	市内総応募数	市内総入選数	本校応募数	本校入選数
H24年度	155	25	5	5
H25年度	153	25	6	5
H26年度	141	23	5	4
H27年度	151	21	5	4

#### (5) 本校の学校評価・保護者アンケートの結果

＜保護者アンケート「阪之上の教育は、信頼できますか」＞



保護者の98.5%（280人中276名）が肯定的評価を行っている。子どもの「学びの質的向上」を図り、充実した教育活動を具現していることが、確かな信頼の獲得へとつながっていると考える。

今後も、更なる「学びの深化」「学びの拡充」に向けて、常に新しい教育の教育課程を創造し、一つひとつの教育活動を一層発展させていくことに取り組んでいきたい。私たちが目指した「学力ナンバーワン」の学校づくりは、一旦成果が出始めると、その成果に学び、次の活動へと発展させていこうとする気運が生み出されてきた。それはさらに、「よりよいものを求める」子ども、そして、教職員の姿を生み出してくることができたと考える。

#### 4 まとめとして

ボトムアップ方式による研究スタイルを徹底し、教職員の提案性を大事にしてきた。教職員各自の専門性が発揮できるという点では、非常に活気のある、また、主張のある授業研究となった。互いの実践、提案に学び合う教職員の姿も見られるようになり、授業を巡る意見交換が日常的になされるようになってきたことはうれしい限りであった。

学力向上は、学校だけの努力では限界があり、保護者・地域、専門家等の力を借りることで、子どもの学びへの意欲は飛躍的に高まり、知識・技術の獲得につながっていくことがはっきりした。学校と保護者・地域との連携協力が、学力向上を図る上でも重要であることを改めて確認することができた。

しかし、当然ながら、教科間の違い、個人差は大きく、時として見解の相違も見られた。各自の実践をどのような形で学校の財産として蓄積し、各自の授業改善につなげていくのか、本校に合う研究スタイルになるよう改善を図っていく必要がある。今後は、子どもの学びの姿がさらに輝くものとなるよう教職員一丸となって授業改善に努めたい。

## 県外実践校に学ぶ

今日、多忙感を訴え、教師生活に生き甲斐を見いだせないでいる教師が多くなっている中で、全国の小中学校では授業研究を核にした学力向上の取組が熱気を帯びています。

今回は、個別教師の協働性に裏打ちされた同僚性を育むために、校長のリーダーシップの下で校内研修を核とした生徒の「学習力」を伸ばす授業づくりを推進しつつ、生徒と教師の学び合う学習空間を創り出している秋田県仙北市立角館中学校の実践を紹介します。



校長 佐藤 心一

学校教育目標 学び合い 高め合い

研究主題 生徒の「学習力」を伸ばす授業づくり  
～「聴く、つなぐ、学ぶ合う」授業の追究～

秋田県仙北市立角館中学校（生徒数300名）  
〒014-0347 秋田県仙北市角館町小勝田字小倉前73  
TEL 0187-53-2411 FAX 0187-53-2420  
URL [http://www.city.semboku.akita.jp/sc\\_kakuchu/](http://www.city.semboku.akita.jp/sc_kakuchu/)  
mail kakucyu@city.semboku.akita.jp

### 1 はじめに

秋田県仙北市は県の南部に位置し、平成17年にそれまでの仙北郡角館町、田沢湖町、西木村の2町1村が統合してできた人口約28,500人の市である。現在、仙北市内には5中学校、7小学校がある。

全国的にも観光地として「みちのくの小京都」と呼ばれ、春には「桜祭り」（4月中旬～5月上旬）、夏には「ささら舞い」（8月15日）、秋には国無形重要民族文化財の「角館のお祭り」（9月7日～9日）、そして冬には「火振りかまくら」（2月13日～14日）と四季折々の伝統行事に溢れており、武家屋敷を有する町である。

### 2 本校の概要

角館中学校は、昭和60年に町内にある白岩中学校と統合し、平成27年度で創立31年目を迎えている。統合当時の生徒数は788名であったが、今年度は300名まで生徒数が減少している。学区内には、3つの小学校（角館小学校490名、中川小学校47名、白岩小学校85名）と秋田県立角館高等学校（709名）、秋田県立大曲養護学校せんぼく分教室（18名）がある。

### 3 文部科学省委託「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」協力校として

私は平成27年4月1日に着任したが、本校は平成26年度から2年間「確かな学力の育成に係る実践的調査研究協力校」として文部科学省から委託を受け、研究をしてきている。平成27年10月23日には、全教科、全学年を公開し、授業研究会を開催した。昨年度から本年度までの研究の計画、流れ、成果と課題等について記す。

#### (1) 平成26年度の研究

学校教育目標「さわやかな若者を育む～地域が好き！学校が好き！仲間が好き！学びが好き！～」とし、生徒の育成と学力向上について「心力・体力・知力をバランス良く鍛えようとする生徒」として研究推進した。

① 秋田県検証改善委員会が推進する「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校～5つのエッセンス～」からIIとIIIを選択。

#### 一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～ 5つのエッセンス ～

- I 全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえ、学校体制でのPDCAサイクルの確立
- II 子どもたちが安心して学習できる環境づくり
- III 子どもたちの思考を促し深める授業づくり
- IV 自発的学習を生み出すきめ細かな指導の充実
- V 豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の連携の充実

- ② 研究主題を「生徒の『学習力』を伸ばす授業づくり～生徒一人一人の学習意欲を高め、確かな学力を向上させるための工夫～」とした。
- ③ 5つのエッセンスⅡを推進するために「心力」を高める取組として「仲間が好き」という感情を醸成するために「先に挨拶，元気な返事，協力する清掃」を学年生徒会で日常的に取り組んだ。
- ④ ③と同様「体力」を高める取組として「学校が好き」という感情を育むため、「家庭学習，早起き，朝食で元気に登校」を生活ノート等で把握する活動を行った。
- ⑤ 5つのエッセンスⅢを推進するために職員が「授業研究班」「表現活動班」「進化・補充班」に所属し授業における「学びの過程」，「話し合いテクニックシート」の作成，「学びの手引き」の作成を行った。さらに，小中連携で，9年間を見通した「角館のまなび」を作成し，本校並びに学区の小学校3校の児童生徒全員に配布した。

以上の結果，秋田県学習状況調査から成果と課題は次のとおりである。

- 成果
  - ・「心力」「体力」に係る項目への好意的反応が県平均を上回る。（「人の役に立つ人間になりたい」「仲間が好き」等）
- 課題
  - ・通過率で教科によるばらつきがある。
  - ・県平均を下回っているのが生徒の主体的な学習活動。（「普段の授業で自分の考えを発表する場がある」「学級の友達と話し合う活動がある」等）
  - ・「学力」の3要素（基礎・基本の習得，活用力，主体的な学び）が課題。

## (2) 平成27年度の研究

### ① 学校経営案と研究仮説

4月当初の職員会議で，目指すべき生徒像を学校経営案で示した。（ホームページ：[http://www.city.semboku.akita.jp/sc\\_kakuchu/pdf/h27youran.pdf](http://www.city.semboku.akita.jp/sc_kakuchu/pdf/h27youran.pdf) 参照）

学校教育目標を変え（「学び合い 高め合い」），研究主題の副主題を変えた。

（～「聴く，つなぐ，学び合う」授業の追究～）経営の中で一番重要視したのが，授業改善である。学校経営の要点の中の中心部に位置している同僚性の構築を目指した校内授業研究会を推進した。

同僚性の構築を目指した校内授業研究会  
研究主題 生徒の「学習力」を伸ばす授業づくり  
～「聴く，つなぐ，学び合う」授業の追究～  
(1) 課題解決型の授業を提示する。  
(2) 「学び合い」に耐えうる課題提示と教材開発（作業的活動を含む課題）を行う。  
(3) 「分からない」ときに友達に「分からないから教えて」という人間関係をつくる。  
(4) 4人で1グループを形成し，市松模様の男女構成とする。平素はコの字型形態とする。  
(5) 友達の話す内容を聞き合うことが基本である。  
(6) 生徒と生徒，生徒と教材(モノ)，教材(モノ)と自分(教師)をつなぐ。

（～「聴く，つなぐ，学び合う」授業の追究～）経営の中で一番重要視したのが，授業改善である。学校経営の要点の中の中心部に位置している同僚性の構築を目指した校内授業研究会を推進した。

前述の「5つのエッセンス」のⅡ・ⅢにⅤを意識した取組にも力を入れた。

研究仮説を「『健全な心力と体力』の育成を目指した取組を継続・充実させながら，全校体制で授業改善の在り方を追究していくことにより，生徒が自ら学ぶ『学習力』が高まり，『心力・体力・知力を鍛え，求めて学ぶ生徒』を育むことができる。」とした。

### ② 平成27年度の継続的な検証改善サイクルスケジュール

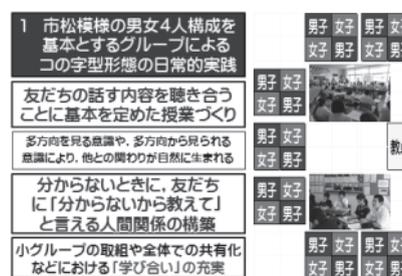
月	短期的課題	中・長期的課題	授
	基礎的な知識及び技能の習得	活用する力や主体的に学習に取り組む態度	

4	仙北市主催のテスト(全学年) 全国学力・学習状況調査(3年)	継続的課題，根拠を基に自分の考えを説明するなど，活用する力	業 改 善 に よ る ア プ ロ ー チ
7	改善のための取組		
9		全国学力・学習状況調査と，7月の1・2年生アンケート結果分析	
10	県学習状況調査過去問題を活 した検証(新たな課題の把握)	自主公開研究会による生徒の見取りと分析	
11	改善のための取組(全校体制で 学び直し)		
12	秋田県学習状況調査	秋田県学習状況調査と3年生12月アンケートで分析・検証(新たな課題の把握)	
2	改善のための取組(全校体制で 学び直し) 検証(新たな課題)	次年度に向けた計画立案	

③ 研究の実際

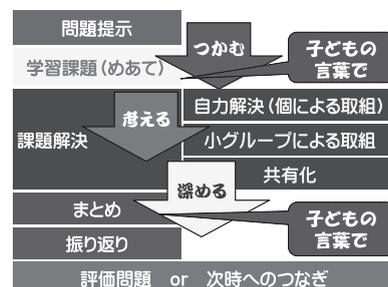
ア 授業改善－同僚性の構築を目指した校内授業研究会

課題解決型の授業を行うよう，右のような形で授業を行った。重要なのは，一人で解決できない課題の提示である。意味も無く小グループを組むことではなく，自力解決できない程度の課題を設定することを心がけた。



また，校内協議会では，放課後のわずかな時間（20分～30分）をつかって，教科の枠を超えた3つの視点「子どもたちはどこでつまづいているか，それをどのように克服しているか」「『つなぐ』という視点から，子どもたち同士の間関係について」「この授業から教師が学んだことは何か」を基に参会者が全員発言する形で行った。全員の職員が授業参観することを原則として協議会に参加できない職員は，授業参観カードを提出した。このことで率直に意見や感想を伝え合うことができ，生徒一人一人の学びの状況を見取る意識や，教師の支援の在り方等，相互に学ぶ意識が高まった。

授業形態は，秋田県の場合「あきた型算数・数学」が全県下に広まっており，また県教委の指導もあり，ほとんどの教科でその特性に合わせて行われている。右の流れがその主流であり，本校もこれに従っている。



平成27年10月23日に文部科学省委託校として自主公開を行った。当日は，仙北市教育研究会の大会と重ね，会員160名，また県内外から30名ほどの参加者で一般授業公開(全11学級公開)，特別授業公開(国語，社会，数学，理科，保体，美術，英語の7学級)と研究協議会を行った。

各授業を詳細に伝えることは紙面の都合上無理であるが，参加された会員，指導主事らの指導・感想を拾うと次のようになる。

教 科	指導主事（C）、参加者（P）からの指導・感想
1年国語 C	ゴールに向かって学習活動をスモールステップで進める中で、生徒から解決すべき必然性をもった課題が出され、それらの課題を解決していくことで、本時のゴールに到着する授業だった。
3年社会 P	発表者と聞き手のルールがしっかりと身に付いている。発表の仕方が鍛えられており、前の発表者の意見に付け足して自分の考えを述べたり反論したりしている。はじめは分からないことでも、話し合い活動を行うことで、「なるほど」「そうか」などの声が自然と出ていた。（P）
3年数学 P	授業の流れが分かりやすく、キーワードが整理された板書構成だった。一単位時間の授業の流れやノート指導、実物を使っての問題提示、他者説明など、小から中への学び方の系統性が見えた授業であった。
1年理科 C	前時までの学習や生活体験から、生徒自身が課題設定することで、自分のものとなっていた。子どもたちは、課題に対する答えとして、しっかりまとめていた。生徒・教師ともに、まとめの位置づけ、まとめの意味をしっかりと意識していた。
1年英語 C	男女の仲がよく、親和的でオープン。机の配置効果あり。興味をひくデモンストレーションがあり、ゴールの姿を最初に示すのは大切。見通しを示して、子どもたちが安心して取り組むことができ、授業の終末に子どもたちが自分の学びを実感できていた。
3年体育 C	集団活動が個からペア、小グループ、大グループへと変化し、一貫性のある指導が見られた。ポイントを明示したことで、ペアでのアドバイスが活発になり、「つなぐ」活動になっていた。
2年美術 C	生徒同士の関係がととてもよく、試作でのグループ活動が活発で個々の新たな発想や構想を促していた。この題材は、角館中学校の生徒のために生み出したオリジナルなものである。ふるさとへの思いをあかりの制作を通して今後さらに深めていってほしい。

イ 「心力」の向上を目指した集会活動（全校集会、学年集会）

1週間に一度、朝の10分間（平素は読書）を利用して学年集会を開催した。各学年が計画的・継続的に実施していく中ですべての生徒が年1回学年もしくは全校生徒の前で発表をする機会を得ることとした。人前での活動に苦手意識のある生徒など、生徒一人一人の適切な支援を基に、緊張する場面を乗り越えていく経験や相手意識に立った表現力の大切さを学ばせたいと考えた。

ウ 「体力」を高める取組

体育委員会を中心に放課後、全校生徒で「5分間走」を実施した。また、ふるさと秋田の雪を活用した1・2年生スキー教室も復活した。

エ 「知力」を高める取組

授業改善はもちろんのこと、学びの連続性



で家庭学習に力を入れた。定期テスト前2週間の家庭学習状況を調査した。

オ 小中高連携，中中連携への取組

平成26年度から職員を「授業研究班」「表現活動班」「深化・補充班」に分け、中学校区の小・中学校教員で年2回（5月11日は校長・教頭・研究主任の会，8月19日は小中の全職員で）協議会をもった。さらに，今年度は隣の神代中学校とも研究面で連携した。地元に一校ある角館高校とは，9月1日に中高学習指導研究協議会（それぞれの授業公開並びに研究協議会）を開催した。

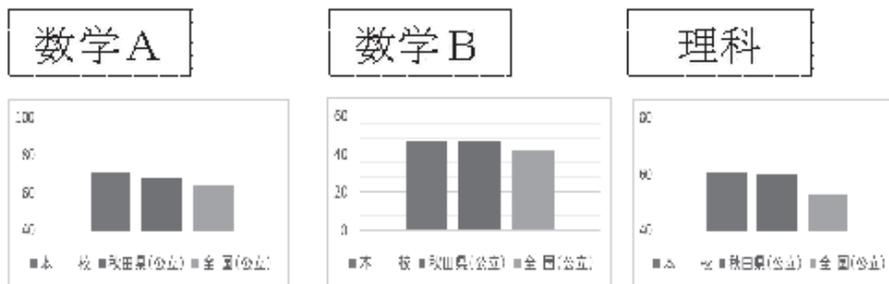
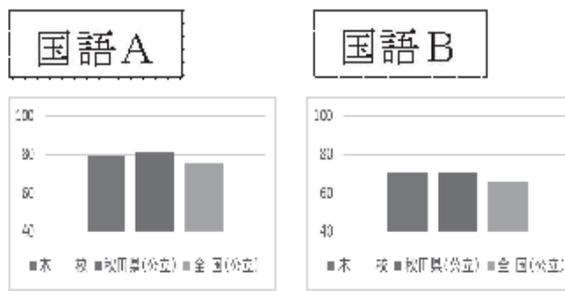
④ 研究の成果と課題

ア 授業改善からの検証

○ 3年生の状況。

4月に行われた全国学力・学習状況調査で，図の左側から本校，秋田県，全国の通過率である。学習の定着状況は，

全教科ほぼ良好である。昨年の県調査に比べ，理科の数値が大幅に改善された。



○ 1，2年生の状況

12月の秋田県学習状況調査から教科のばらつきはあるが，両学年ともほぼ県平均通過率である。

○ 全国調査生徒質問紙と県調査からの推移

4項目「はじめに授業の目標（めあて・ねらい）を立てて取り組んでいる」「授業で自分の考えを発表する機会がある」「授業で学級の友達との間で話し合う活動をよく行っている」「最後に学習活動を振り返る活動をよく行っている」について，「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」の割合は年度を通して，90%台を超え，授業における生徒の主体的な活動がなされていることが分かる。（具体的数値省略）

また，教師の意識調査を12月に行ったところ，授業における各項目の意識は次のようになっていた。

- ・ 授業のはじめに目標（めあて・ねらい）を立てさせて取り組ませている・100
- ・ 授業では生徒が発表する機会を設けている・・・・・・・・・・・・・・・・・・89.5
- ・ 授業では生徒の話し合う活動を設けている・・・・・・・・・・・・・・・・・・94.7
- ・ 授業では最後にまとめや振り返りを行う活動を設けている・・・・・・・・84.2
- ・ 課題解決的な学習に取り組ませている・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
- ・ 授業でノートやカードに学習の目標とまとめを書く時間を設定している・73.7

この割合を見ると、ほぼ良好な状態にあるが、まとめやノート指導に課題があることが分かった。

イ 「心力」の向上を目指した集会活動（全校集会、学年集会）からの成果  
集会を継続していく中で話し手が途中で間違ったり、言葉に詰まっても、決して笑ったり馬鹿にしたりせずに最後まで全員が話を聴く習慣が定着した。

ウ 「体力」を高める取組からの成果  
全県新人駅伝大会で男子2位、女子5位という1・2年生が結果を残した。また保健体育科で行っている「NEW 体力テスト」の結果からシャトルランを筆頭に生徒の体力は向上している。

エ 「知力」を高める取組からの成果  
3回の家庭学習調査を行った結果、一日の平均時間(分)は次のようになった。

学年	第1回	第2回	第3回	期 間
1年生	88.5	102.7	140.3	5月20日～6月3日
2年生	90.8	100.6	124.2	8月24日～9月2日
3年生	98.5	107.6	143.8	3年生11月12日～25日，他12月3日～16日

### (3) 今年度の成果と課題の総括

#### ○ 成果

- 「健全な心力と体力」の育成を目指した取組を継続したことで
- ・「聴く、つなぐ、学び合う」ための基盤となる、相手の話を最後まで聴く習慣や、相手を思いやる心が定着した。
  - ・主体的に「体力づくり」に取り組む意欲や持久力が向上した。
  - ・家庭学習への取組状況の改善と、相手意識を大切にした発表活動が実現した。
- 「全校体制で授業改善の在り方」を追究したことで
- ・全国学力学習状況調査及び秋田県学習状況調査の結果から、「学力の三要素」における改善が見られた。
  - ・主体的な学習活動のスキルや意欲の向上が図られた。
  - ・学びを次時の授業や将来の生活に役立てようとする生徒の姿が見られた。

#### ○ 課題

- 「健全な心力と体力」の育成では
- ・9年間のスパンで児童生徒を育てる意識の向上をさらに推進すること。
  - ・キャリア教育における小中連携をさらに強化すること。
- 授業改善では
- ・基礎的・基本的な知識や技能を習得させるための取組を更に充実させること。
  - ・各教科の「ねらいに迫るための言語活動の在り方」を共通理解すること。
  - ・主体的な学習活動に結び付く、まとめやノート指導の更なる充実を図ること。
- そして、これらの課題を解決するために、アクションとして「児童生徒への系統的な指導を目指した学校間協力体制の更なる強化をすること」、「教科の枠を超えた授業改善のための教科主任会の開催を行うこと」などを実施していく。

#### 4 総合的な学習の時間から学校を変える

##### (1) 総合的な学習の時間の見直し

本県では、「キャリア教育の視点を重視したふるさと教育」を推進している。今年度、ふるさと角館のよさを生かした「桜」と「角館のお祭り」に焦点化をして取り組んだ。



##### (2) 桜並木追肥活動

昭和63年から続けている生徒による桜並木への28回目の追肥活動を今年度も、平成27年5月1日のご指導により、本校の2年生107名、そして大曲養護学校とそのせんぼく分教室の中学部の生徒39名で行った。

市職員から説明を受けた後、本校の生徒と養護学校の生徒が3、4人で一つのグループを作り、自己紹介をし合った後、協力して800メートルの範囲に生える約160本のソメイヨシノの根元にチッソやリンの含まれる肥料をまいた。

この活動は養護学校だけではなく、本校にとっても良い刺激になっている。本校生徒(2年生)の活動後の感想は次のとおりである。

- ・樹木医の先生のお話を聞いて、樹木医の仕事や桜などの樹木に対する強い思いがよくわかった。どんな仕事でも困難なことがあることを知った。
  - ・毎年、先輩達が行ってきた作業を自分たちも行うことに誇りを感じた。
  - ・桜の町として、この桜並木を大事にしていきたい気持ちが生まれてきた。
  - ・作業体験をしたことで、角館町の歴史に参加できたような気分になった。
  - ・養護学校の生徒と一緒に行動して、土手から川への階段の上り下りを手伝った。階段の上り下りが私たちのように上手くできない生徒がいることがわかった。
  - ・養護学校の生徒とそれまで全く知識がなく、コミュニケーションをとったり交流したり、協力したりすることが大事だと思った。一緒に活動できてよかった。
- 活動終了後、桜への知識をさらに深めるために樹木医の黒坂登さんをお呼びして講話集会を行った。また桜についての探究学習を行った。来年度、観桜会のシーズンに「桜案内人」ができるまでに深く学習した。



##### (3) 角館のお祭りを探究的に学ぶ

平成26年10月に「第29回国民文化祭・あきた2014」に呼応し、角館を訪れた観光客に町を案内する「歴史案内人」のボランティアを当時の3年生が行った。この活動を引き続き、平成27年度は、3年生を対象とした角館のお祭りのボランティアガイド「お祭り案内人」を企画し、実践を行った。

お祭りの意味や成り立ちをこの中学生の時期に理解することが、350年間続いている伝統の継承の基礎となると考えたからである。図書室で角館町の資料を調べたり、町内の歴史案内人やお祭りについて詳しい方をお呼びしての講話集会を重ねた。例年、

休日に行っているお祭り期間の9月8～9日を出校日として「お祭り探究学習日」とした。お祭り案内人を行った3年生の感想の要旨は次のとおりである。

- ・角館のお祭りを観光客から新たな視点で教えられた。角館のお祭りで、交渉人が各家の玄関で膝と手をつき口上を述べる。このシーンを見た観光客が「礼儀正しいお祭りですね」と生徒に感想を伝えた。



- ・お祭りの案内をするために、角館町についての学習を進め、さらに角館町について理解することができた。
- ・お祭り案内人を行ったことで人の役に立つことができた。
- ・外国の観光客も多く、簡単な英会話の技能について身に付けなければと感じた。

#### (4) ようこそ先輩 先輩から学ぶ

今年度新たな試みとしてスタートしたのが7月16日に行った「ようこそ先輩 先輩から学ぶ時間」である。会社経営者や公務員、商店主など地域社会で活躍中の卒業生に、自身の学校生活や職業の内容、やりがいや夢、生徒に望むことなどを語ってもらう時間である。生徒に働くことの楽しさ、厳しさを知ってもらい、勤労や職業に対する関心を高めると共に、将来、自分も社会の一員として役割を果たすことになることを学んでもらいたい願いから企画した。13の教室に講師が一人で、300名の生徒は縦割りです。一人で2名の方のお話を聞いた。13名の人選は、そのほとんどが本校卒業生であるが、地元企業に勤務している他の中学校出身者もいた。自校卒業にこだわらず、「人生の先輩」として講師を努めていただいた。

#### (5) さらにキャリア教育として

各学年が次の活動・宿泊的行事を行った。

1年生－秋田市職場訪問、国際教養大学訪問（1泊2日の宿泊体験学習）

2年生－職場体験学習（夏季休業中3日間）、専門学校訪問（東京修学旅行）

3年生－高校体験入学・学習体験、大学訪問・専門学校訪問と秋田市内高校の教諭による講話（1泊2日の宿泊体験学習）

### 5 終わりに

全国学力・学習状況調査が導入されてから、世の中の目は学力向上に向かっているが、どんな生徒を育てるのかを考えたときに、生きる力を育成することがその根本にある。すなわち、中学校で言えば、9教科を核として、総合的な学習の時間、道徳教育、キャリア教育、ふるさと教育、生徒指導等、すべての教育活動を通して、生徒を育てていきたい。「学力」というのは、その結果であり、最後には一人一人の生徒にとって、社会に出たときに問題を解決していく、あるいは人生を豊かにしていくための基礎・基本だととらえたい。

角館町は歴史と文化にあふれた地域である。この地域に住む人々と歴史を見つめ直し、生徒が学校を出ても角館町のことを常に思う、そんな生徒に育ってくれればと願ってやまない。



## みる楽しみを

### — 子どもとひらく鑑賞活動への誘い —

美術教育講座 郡司 明子

#### はじめに

“描くこと”や“つくること”は“みること（気づき）”と分ちがたく結びついています。したがって、図画工作科・美術科の授業においても表現と鑑賞、それぞれの活動が往来する学びを大事にしたいものです。特に、鑑賞活動の醍醐味は、「Look again Think again」（ラース・ニッティヴ）ということでしょう。つまり、対象に向かい合うなかで何らかの発見や気づきを得て、それまでのものの見方や考え方が更新される。すなわち、「みる」ことを通じて自身のなかに新たな意味や価値をつくり出していくことにあります。そこで「みる楽しみ」をテーマに、「鑑賞」の活動や題材につながる視点を集め、その魅力に迫ってみましょう。

#### 質問

鑑賞の活動は難しさを感じ、敬遠しがちです。何から始めればよいでしょう。

（小学校学級担任）

毎授業において、児童・生徒が互いの作品を見合う機会を保証することから始めます。材料や用具を取りに行く際、活動の様子が見合える教室空間になっているでしょうか。表現活動を遮らないタイミングで、たった5分でも見合う時間を設けることも有効です。仲間の表現に触発されて、そのよさを受けとめ合い、次なる発想や構想が生まれたり、創造的な技能が伝播したりすることもあるでしょう。仲間の表現や活動をまねしたい！という思いが生じるかもしれません。それは、ぜひ寛容に。「学ぶ」ことの根

源は「まねぶ＝まねる」にあるのだということ

を教室全体で共有したいものです。見合い、賞賛し合うことで児童・生徒の自信を高めることはもちろんですが、建設的に批評（批判ではない）し合うことも重要です。仲間同士、その表現に対して素朴な疑問や違和感を出し合うことによって、新たな「問い」が生まれます。すると、再び見る、再び考えるなかで、さらなる可能性として対象（作品）を「みる」ことにつながります。

#### 質問

知識に偏らず、誰にでも親しみやすい美術作品の鑑賞を目指すには、どのように進めたらよいでしょう。（中学校美術科担当）

美術作品は知識を基に鑑賞するもの、となると児童・生徒にとって遠い存在になりがちです。先入観を外して、からだ全体で感じ味わうものと捉えてみてはどうでしょう。まずは、美術作品に親しむという視点から、身体表現や行為に基づく鑑賞活動の要素を4つ紹介しましょう。

#### 1 なりきる

対象に「なってみる」ことで、そのものを内側から理解しようとする鑑賞のあり方です。



写楽の「大谷鬼次奴江戸兵衛」になりきる

美術作品になってみようとすると、対象の造形的な特徴を自身の姿勢や構えを駆使してなぞり、筋感覚（緊張-弛緩）などの身体感覚を働かせて捉えることとなります。対象の立場になりきると、「からだ」は単に見るだけでは得られない気づきや感情が生まれる場となります。

## 2 入り込む

鑑賞＝深く見ることを重視するうえで、対象に入り込むような活動も有意義です。美術作品の登場人物の顔部分をくり抜いて自身が表情をつくり、物語にして演じてみる。その際、作品をどう読み解くのか、という問いを仲間同士で共有し、話し合うことから自然に表現と鑑賞の一体化も図られます。「入り込む」感覚として、自身の分身を準備し、作品を自在に移動するなどの手立ても有効です。



デュビュッフェの「ジャズ・バンド」に入り込む

## 3 活用する

近年、美術館等における「アートカード」（教師用指導書にも在中）が普及してきました。美術作品をカードサイズにし、ゲーム感覚で作品に対する親しみや愛着を形成するものです。例えば、ジェスチャーゲームでは、ある作品の造形性などを身体表現で伝え、それを当てることにより、互いのイメージの一致や相違を楽しむ。誰もが気軽に組み合わせてその場が和むことからアイスブレイクの役割を担うこともできます。



アートカードを並べてカルタとり（読み札は自作）

## 4 おしゃべり（対話）を楽しむ

美術の知識に偏らず、鑑賞者同士のコミュニケーションを通して、美術作品を読み解いていく対話型鑑賞＝VTS（visual thinking strategies）を紹介します。進行促進役（教員）は、基本三つの問いかけから対話を展開していきます。まず、じっくり作品を見た後で「この作品の中で何が起きていますか？」—「どこからそう思いましたか？」—「その他に気づいたことはありますか？」これらの問いをつなぐ中で、異なる考えを尊重し、無理強いをせず、中立性を保ちながら、児童・生徒が発言しやすい雰囲気心がけます。「みる」ことを契機に対話が重なり、「きく・はなす」楽しみに広がります。

### おわりに

児童・生徒のコミュニケーション能力の育成が問われる中、「みる・きく・はなす」ことの重要性はますます高まることでしょう。美術作品は様々な想像をかき立てる力をもつと同時に、作者の意図とは異なる文脈での解釈（大いなる誤読）が歓迎され得ることから、鑑賞活動は思考力を育むうえでも発展可能な学びの要素に溢れています。鑑賞活動を通して、自分の考えに自信をもつと同時に、違いを楽しむ＝多様性を受け入れられる児童・生徒を育みたいものです。



## 1日1回の気温測定で理科に求められる技能を高める活動例

理科教育講座 小野 智信

## はじめに

理科の授業で観察や実験と聞くと「大変そうだな」と感じ、苦手意識を持っている方も多いかと思います。

ところが、ちょっとした工夫をすることで、労力は少ないのですが理科に必要な技能を育てることが可能であり、他にも様々な教育効果を得ることができます。今回はそのような活動例を紹介しましょう。

## 質問

- ①理科で実験結果を考察するといわれますが、どのようなことをすればよいのでしょうか。
- ②授業時間中では観察実験の活動が忙しく、考察が十分にできていない様子です。なかよい工夫はないのでしょうか。
- ③グラフの作成・活用する能力を育てるにはどうしたらよいのでしょうか。

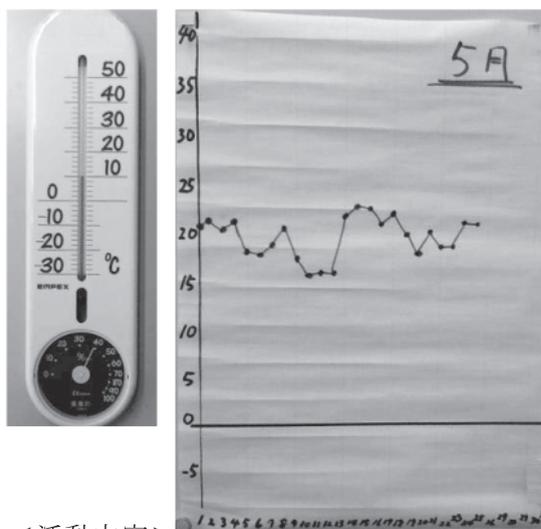
(小・中・高校理科担当教員)

みなさんが理科の教科書には様々な観察実験がありますが、準備に手間がかかったり授業時間中に終わらなかつたりして、観察実験などに苦手意識を持っている方もいます。さらに①のように「観察実験の結果を考察する」といわれても具体的な手法を想起できない方もいるでしょう。

理科で高めたい技能はいくつかありますが、ここではデータの集積、処理、考察に関する技能を高める活動に着目して紹介しましょう。後半には理科とは直接関係ない教育効果についても触れておきます。

## &lt;必要器具&gt;

- ・温度計 ※デジタル以外が望ましい
- ・模造紙 ※グラフ用紙として使用



## &lt;活動内容&gt;

- ・児童生徒が毎日決められた時間（例えば給食時間前など）の室温を測定し、教室内に貼られたグラフ（模造紙など）にプロット（打点）をする。

どうでしょう。活動としてはたったこれだけとなります。先ほど質問を思い出してください。質問②のように授業時間では活動時間が足りないのならば、授業以外のすき間時間をうまく活用すればよいのです。また質問③のような技能は、時間や回数に限られた授業時間で急いで終わるより、年間を通してゆっくりと、そして繰り返し取り組ませることで定着を図ることができます。思考に必要な時間をより多く設定することが考察のトレーニングになり、質問①の解決にもつながります。

では実施上の留意点について説明をしましょう。

<留意点>

・測定担当者を日ごとに変えるなどして、必ずクラス全員が測定にかかわるようにする。

※授業中におこなわれる実験では、器用な子が率先して作業をしてしまい、作業に関われない子が出てしまうことがあります。これが常態化すると、作業に関われない子はいつまでも達成感を得られず、理科への興味も薄れていくでしょう。一方、今回の温度計による測定とグラフへのプロットはさほど難しい作業ではなく、さらに当番制にしてくり返しおこなうことで、作業にも慣れていくことでしょう。すべての子に活躍の場を与えることが可能となるのです。

・温度を記録したグラフは教室内で日常的に見て思考できるようにする。

※子どもの中には物事の飲み込みの早い子やそうでない子などと実に多様です。でも理解が早いのがよいこととは限りません。じっくりと考え思考をめぐらすことも大切です。そこで授業中という時間の制約が厳しい状況ではなく、常に実験データを見て考察できる状況を作っておけるのです。子どもそれぞれに合ったペースで時間をかけ眺めている内に、新鮮な発見を見出すかもしれません。(なお、1年間の温度変化を視覚的に比較できるよう、これまでに得られた全グラフを並べるなどの工夫をして掲示してください)

・測定数値としての温度と、実際に体で感じる温度を結びつけるようにする。

※理科が苦手な子どもの中には、数値へ

の苦手意識がある子もいます。この理由の一つに数値情報と認識の統合ができていないことがあります。「今日測定した18℃はこのような暖かさなのか」「5℃下がると結構寒いな」のように、測定した数値と体感の融合を働きかけてください。

他に得られる効果として、

- ・測定データを蓄積する意義を体感できる。
- ・1時間ごとの測定など、子ども興味に応じた発展性がある。

などがあげられます。

また理科以外の教育効果として、

- ・クラスでの共通の話題を得ることができる。
- ・物事を継続することの大切さや達成感を得ることができる。
- ・協働による責任感を育てることができる。

などが期待され、児童生徒理解やクラス経営に活かすこともできます。

おわりに

1日1回の測定とグラフへのプロット、たったこれだけの活動ですが、教師による適切な働きかけ次第で、この活動は様々な可能性を含んでいます。

授業やクラス運営の中にはまだまだ工夫の余地が存在しています。日々の活動を見直し、皆さんの若い柔軟な発想で工夫を試みてください。きっと教師としての幅が広がることでしょう。皆様のご活躍と皆様がかかわる子どもたちのよりよい成長を願っております。



## これからの「学校におけるいじめ対応」

学校教育臨床総合センター 吉田 浩之

### 質問

「いじめ防止対策推進法」に関して、保護者から以下の質問がありました。どのように回答すればよいですか。

- 1 なぜ、この法律が制定されたのですか。
- 2 この法律で、幼児や大学生は対象になるのですか。また、大人や保護者は対象になるのですか。
- 3 この法律に、「いじめ」は禁止とあります。「いじめ」をしたら、どのような罰則があるのですか。
- 4 「いじめ」であるかどうかは、誰が決めるのですか。 (小・中・高校教員)

平成 27 年 7 月、岩手県矢巾町の中学 2 年男子生徒 (当時 13 歳) が列車にはねられ死亡 (自殺) しました。担任に提出の「生活記録ノート」には、いじめの苦しみや自殺をほめかす深刻な内容が書かれていました。この件に対するマスコミの報道をみると、これまでのいじめに関連した報道に比べて顕著に変化したところがうかがえます。それは、記事の中に、「いじめ防止対策推進法」 (以下、「本法律」) の規定を基準に、学校や教員の対応を問う内容や、本法律の用語が随所に記されている点です。このことは、い

じめに特化した本法律についての認識が社会に広まっていることを示すものです。今後はさらに、いじめ事案については、本法律に則った対応をしているかどうかについての視線が、マスコミをはじめ、保護者や地域からも強まっていくことが予想されます。

したがって、いじめについては、学校および教員が本法律を十分に理解し、法に則った対応ができるようにしておく必要があります。

### 1 について

本法律は、平成 25 年 6 月 28 日に公布され、同年 9 月 28 日に施行されました。法制定の契機となったのは、滋賀県大津市のマンションで、平成 23 年 10 月、同市立中学 2 年男子生徒 (当時 13 歳) が飛び降り自殺し、学校と教育委員会の不十分な対応が指摘され、社会の注目を集めた事案でした。

本法律の第 1 条 (目的) を要約すると、いじめは児童生徒の教育を受ける権利を著しく侵害し、その生命又は身体にまで重大な危険を生じさせるおそれがあることに鑑み、いじめの対策を社会総がかりで効果的に推進することを目的とすることが明示されています。

社会総がかりでいじめ問題に取り組むことが大前提となり、学校は保護者に対して、本法律の説明や学校の方針等を伝える機会を持つことになります。その際に、学校現場では、保護者から「なぜ制定されたのか」、「本法律について、一言で（簡単に）、おしえてください」という質問や要望等がみられます。したがって、教員として自分なりの回答を準備しておく必要があります。たとえば、「いじめられた子どもを守り抜くための法律です」、「社会総がかりで子どもたちの尊厳を保持するための法律です」と保護者に述べた教員がいます。

#### 2 について

第2条（定義）にいじめの定義と対象等が規定されています。対象となるのは児童または生徒とあります。したがって、幼稚園や大学、大人は対象外です。それでは、高校生と同年代が在籍する高等専門学校は対象になるのでしょうか。答えは、対象外です。第35条に高等専門学校は努力義務、と規定されています。

#### 3 について

第4条に、「児童等は、いじめを行ってはならない」と規定されています。これは、一定の禁止事項の明示（訓示規定）であり、違反行為に対する罰則等の制裁措置を伴わない性質のものとされています（衆議院文部科学委員会回答）。たとえば、道路交通法に規定されるような、反則行為の種類（速度超過、信号無視違反など）に応じて反則金や点

数が定められているものとは違います。しかし、態様によっては、別法律に則り刑事罰に触れるケースは想定されます。

#### 4 について

第22条（学校におけるいじめの防止等の対策のための組織）は、学校におけるいじめの防止、いじめの早期発見及びいじめへの対処等に関する措置を実効的に行うため、組織的な対応を行う中核となる常設の組織を置くことを規定しています。この組織がいじめの事実確認の実施とその判断を行います。本法律では、特定の個人が判断するものではないとしています。

この組織は他にも重要な役割を担います。たとえば、学校基本方針（第13条規定）に基づく取組実施や年間計画の作成・実行・検証・修正、いじめの相談・通報の窓口、いじめの疑いに関する情報や児童生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、いじめの疑いに係る情報があった時の緊急会議の開催、いじめの情報の迅速な共有、関係する児童生徒から事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定、保護者との連携などが想定されています。

いじめが疑わしい情報を得たならば、まずは、この組織に報告することが求められています。「自分だけで解決する」、「自分の進め方でする」は、本法律で示す手続きから逸脱することになります。いじめに関しては、本法律を十分に理解し、それに則った中で対応することが、これからは常識になります。



## 学校内外の連携について

学校教育講座 新藤 慶

### 質問

①勤務校における教育課題の解決のためには、どのように組織的対応を進めればよいのでしょうか。

②校種間での望ましい連携とは、どのようなもののでしょうか。 (小学校学級担任)

授業準備や学級経営など、教師の仕事は一人で進める部分が大きくなっています。しかし、同僚の先生方との協働を進め、先生方相互の経験や技術を共有・活用することで、より高い水準の教育実践につなげることができます。

学校内の先生方の連携・協働を進めるために重要となるポイントの一つは、課題の共有です。かつてフェミニズム運動のなかで「個人的なことは政治的なことである」というスローガンが掲げられたことがあります。先生方それぞれが抱えておられる問題は、単にお一人の先生の問題ではなく、多くの同僚の先生の問題でもある可能性は低くありません。そこで、同僚の先生とのちょっとした会話などで困っていることを出し合うことができれば、「その問題は私も困っていた」と課題を共有する輪を広がるきっかけができます。そうなれば、その課題は「学校全体で取り組む必要のある課題」ということになり、学校内の連携をスタートさせることにつながります。その点から、若手の先生方には、積極的に問題提起をしていただくとよいかと思います。

また、2つ目のポイントとして情報の共有があげられます。「報告・連絡・相談」の重要性はどの組織でもいわれることですが、組織内のトラブルは、情報の共有が不徹底であることと結びついている場合が少なくありません。日ごろから、同僚の先生同士で情報を共有できるような関係ができれば、信頼感も醸成されていきます。若手の先生方からベテランの先生方への報告だけでなく、

ベテランの先生方からも、同じ教師仲間である若手の先生方に積極的に情報を提供いただければと思います。

この情報の共有は、校種間の連携でも大きな意味を持ちます。群馬県では、小・中学校間での先生方の異動が多いので、小中間の連携は比較的にスムーズであるかと思います。ただ、就学前の幼稚園・保育所と小学校との連携は、課題の一つになりやすいところです。幼保では「何でもできる年長(5歳)さん」だった子が、翌年の小学校では「何もできない1年生」と扱われてしまうことは、その一例です。このように、子どもの捉え方をめぐる差異は、他の校種間でも生じうると思います。その場合、先生方が所属される学校段階の枠内だけでなく、他の学校段階での教育のあり方をふまえながら、子どもの成長をひと続きのものとしてみるのが大切になります。このように子どもの成長をひと続きに捉えるためには、他の校種の先生方と、互いの教育や子ども観について情報を発信しあう場を持つことが求められるでしょう。

さらに、このことは、障害を抱えた子どもをめぐる「交流及び共同学習」とも関連を持っています。インクルーシブ教育の進展に伴い、障害を抱えた子どもの学びの場は、特別支援学校から通常学級まで多様に展開されるようになりました。そのため、校内での通常学級と特別支援学級との連携や、校種間での居住地校と特別支援学校との連携など、先生方のさまざまな連携が重要となっています。これらの連携は、ここで触れた「課題の共有」と「情報の共有」を基盤として進めることで、より実り多いものとなると考えられます。

### 質問

③保護者とどう関わったらよいのでしょうか。

④「開かれた学校」にするためにはどのようなことをしたらよいのでしょうか。 (小学校学級担任)

学校内の連携に加え、学校外の連携も非常に大切な部分です。このうち、日常的に先生方が関係を持たれるのは、やはり保護者の方々との連携だと思われま

す。保護者の方との関係づくりについては、日々学校で努力されている先生方の方が、私のような大学にいる者よりも何倍も的確に理解されていると思います。そのうえで、保護者対応についての知見をご紹介します。「子の成長を願う保護者の思いを受け止めることが大切」、「学校側の『閉ざされた姿勢』を改善し、情報発信を進めることが重要」といったことなどが指摘されています。ここでポイントになるのは、「思いを受け止める」ということは「いいなりなる」ということではないということです。子どものよりよい成長を願うという点では、教師も保護者も互いの思いを受け止めることはできると思います。しかし、その思いを実現するための方法は多様です。いずれが正しいということは簡単には判断できませんが、子どもの捉え方や成長の見通しなどについて互いの考えを伝えあい、情報や実態を共有することが欠かせません。そのためには、まずは先生方が聞き役となることから始め、保護者との間に、互いに話し合える関係をつくることが求められると思います。

関係づくりが進めば、教師と保護者がともに学ぶ場を設けるということも考えられるかもしれません。たとえば、発達障害について、教師と保護者がともに学ぶ研修の機会を持ったといった取り組み事例も紹介されています。先生方も、保護者が持ち込む課題のすべてに通暁しているということには、なかなかならないと思います。ご自分のなかに十分な蓄積ができていない部分については、「ともに学ぶ」という姿勢で保護者の方と関わられてもよいのではないのでしょうか。

「開かれた学校」づくりも、個々の先生方の取り組みだけでは、新たなご負担を招くことになってしまうかもしれません。できるだけ、既存の枠組みを活用し、なるべく先生方のご負担を減らすような形で進められるとよいと思います。群馬県では、県内すべての市町村立小・中・特別支援学校に「学校支援センター」（学校支援地域本部）が設置されていますので、これを活用することが

入口の一つになります。具体的には、「総合的な学習の時間」など、地域との接点を持ちやすい授業での取り組みが想定しやすいかと思います。コーディネーターの方と連携しながら、授業でのゲストスピーカーや、校外の見学などで地域の方々に協力してもらおうといったイメージが思い浮かびます。こういう取り組みをきっかけに、学校に関わりを持つ地域の方が増えれば、学校・家庭・地域がともに子どもの学びや成長を考え、支える体制ができてきます。そのことが、まさに「開かれた学校」づくりだといえるでしょう。

また、学校と地域との連携は、子どもの世界観を広げるうえでも重要な役割を果たします。ネガティブな話題で恐縮ですが、深刻な教育問題の一つにいじめがあります。このいじめについては、学級や部活動などでの閉塞した関係性が問題を深刻化している、という見立てをする研究も少なくありません。その場合、地域と触れる機会が持てれば、子どもには学校以外の世界を知る足がかりとなります。

小・中学生であれば、家庭と学校の以外の世界を想定することはなかなか難しいと思います。だとすれば、2つの世界の一方である学校でいじめにあっていれば、自分の生きる世界はどこにもないように感じてしまうかもしれません。しかし、地域との関わりのなかで、家庭・学校以外の世界に触れることができれば、たとえ学校での生活がつかなくても、他の世界で生きる自分の姿を想像することも可能になります。家庭・学校以外の世界を持ちながらいじめの問題に向き合うのとそうではないのでは、子どもの受け止め方も変わってくるのではないのでしょうか。

また、「開かれた学校」で学校に関わりを持つ人々が増えれば、学校の問題を自分のことと意識する方々も増えてくると考えられます。そのことは、「いじめなどの問題は、学校だけが責任を負うべき問題ではなく、社会全体で取り組むべき問題だ」という認識を広めることにもつながると思われま



## 障害の重い子どもとのコミュニケーション

障害児教育講座 中村 保和

### 障害の重い子どもたち

特別支援学校には、重度・重複障害と言われる子どもを中心に、話し言葉(音声言語)でのコミュニケーションが困難な子どもたちが在籍しています。こうした子どもたちの多くは、知的障害や肢体不自由をあわせ有しているため、周囲の状況の把握や教師からの働きかけの意図等を即座に理解することが困難となります。また、身体の動きに制約があることから、発声が困難であったり、指さしやジェスチャーなどの身体表出も困難であったりすることが多いです。さらに、見えにくさや聞こえにくさも有していることがあり、周囲の人々(教師やクラスメイト)とのコミュニケーションにおいて多大な制約を抱えながら学校生活を送ることとなります。

このような状態にある子どもたちと出会う特別支援学校および特別支援学級の先生方から以下のような相談を受けることがあります。

#### 【相談】

話し言葉(音声言語)のない子どもが獲得できる(あるいは利用可能な)コミュニケーション手段にはどのようなものがありますか？

(特別支援学校教員、特別支援学級教員)

日々、障害の重い子どもと向き合い、より良い授業を展開しようとする先生方の切実な相談だと思います。

#### コミュニケーションの捉え方

以上の「切実な相談」は、見方を変えれば教師による「切実な願い」でもあります。すなわち、「子どもにコミュニケーション手段を獲得してほしい」あるいは、「何とかしてこちらの意図が伝わるような方法を見つけたい」

という願いです。

ここで1つ確認しておきたいのは、コミュニケーションとは双方の働きかけによって生じるものであって、そこで生じる種々の問題や課題は一方にのみ存在するのではないということです。一般的に、働きかけ手となる教師側には(機能的な)コミュニケーションの問題がないことを前提に、様々な障害を抱える子どもたち側の問題として、コミュニケーションが語られます。そのため、障害のある子どもたちに適用可能な拡大・代替コミュニケーション(AAC)が持ち込まれたり、機能的アセスメントによるコミュニケーション指導と呼ばれるものが実施されたりします。確かに、絵や写真、スイッチ機器を利用した手段の開発や適用、コミュニケーションに必要な機能を育てるコミュニケーション指導というものは、大切な視点であると思いますし、多くの現場で実践されています。

しかしながらその前に、係わり手である私たちは、子どもの行動(運動、分泌、身体表面の色の変化など)から、子どもの内的な状態(内面)をどれほど理解しているか、または理解しようと努力しているかを考えてみるべきではないでしょうか。

#### 外界へ働きかける存在としての子ども

子どもたちは、こちらからの働きかけに対して、または周囲の状況の変化(音や声などの変化、光の差し込める具合、風や空気の動きの変化、ベッドや車椅子、バギーから伝わってくる振動、臭いや香り、など)に対して、何かしらを感じ取り、思い、考えているはずで、そしてそのことを何かしらの方法で外界へ表出しています。例えば、指先や足先の動きとして、瞼の開閉や眼球の動きとして、息

の吐き方や吸い方として、唇や舌の動きとして、表情として、です。それがどんなに微細で微弱であったとしても、それは子どもからの表出です。外界とやりとりをしている、すなわちコミュニケーションしている「表れ」なのです。その「表れ」を、係わり手である私たちは、どうすれば見つけることができるか、加えて、「表れ」に含まれた子どもからのメッセージ(意味)をどうすれば理解できるか、私自身が障害の重い子どもと出会う中で、常にこの問題に行き当たります。

### 「意味を添える」という視点

ことばのない子どもが発現する行動や動きなどを、側にいる教師が了解可能なもの、信号的意味合いのあるものとして受け止め、そこに仮の意味づけ(解釈)を行い、そのことを子どもに働きかけとして返していけば、そこにはコミュニケーションが生まれます。例えば、ベッドで寝たきりの重度障害の子ども近くの窓を開けた時に、偶然、外から柔らかなそよ風が入ってきたとします。それまで天井の一点を見つめるかのように目の動きが全く見い出せなかった子どもの顔が、一瞬開いて目が大きくなりました。係わり手はその顔の動きを捉えて、子どもに「涼しい風が入ってきたね。わかったのかな。気持ちがいいね。」と声をかけます。そしてその後、「次の風はいつ来るかな？」と声をかけ、子どもの横に座り一緒に次の風を待ちます。ちょっとドキドキした一場面を創り出せるのではないのでしょうか。

この時の子どもの顔の動きは偶然動いただけで、もしかしたら窓からのそよ風とは無関係かもしれません。もしくは子どもは確かに風を感じて顔を動かしたけれども、側の係わり手に伝えようとして動かしたわけではないかもしれません。このように、偶然の出来事であっても、あるいは伝達の意志がない場合であっても、係わり手が子どもの行動にメッセージとしての信号的意味を読み取り(また

はあえて添えて)、それに即した働きかけ(返信)をしていけば、係わり手と子どもとの間に1つの「やりとり」が生じるという点で、コミュニケーションと言って良いのではないのでしょうか。

### 係わり手に求められるもの

以上のように、子どもの微細・微弱な行動や動きなどを捉え、それらに意味を添えて返していくことは、障害の重い子どもを対象としたコミュニケーションにおいて、極めて重要な視点であると考えます。そしてそれは同時に、係わり手側に高い感性と読み取りの力量が問われていることにもなります。係わり手にとって、子どもとの出会いの当初から、子どもの行動や動きを介して、子どもの意思や意図を正確に読み取って返していくことは難しいことかもしれません。そのため、子どもの前では、常に自身を感度の高い状態におき、その感度を係わり合いの中で高めていくような志向性が係わり手に求められます。さらに、意味を添えて子どもに返していくということは、新たな活動(またはやりとり)を提案するという形で子どもへ働きかけをすることですから、自身が添えた意味(読み取った内容)が、妥当であったかどうかを、働きかけ後の子どもの行動から冷静に判断する姿勢も求められます。仮に、自身の働きかけが子どもに受け入れられなかったり、期待した(あるいは予想した)応答行動が見られなかった時には、自身が行った意味づけとそれに基づいた働きかけを修正したりやり直したりしなければなりません。こうした手続きを子どもと向き合う時間の中で丁寧に循環させていくことが、障害の重い子どもとのコミュニケーションなのだと考えます。

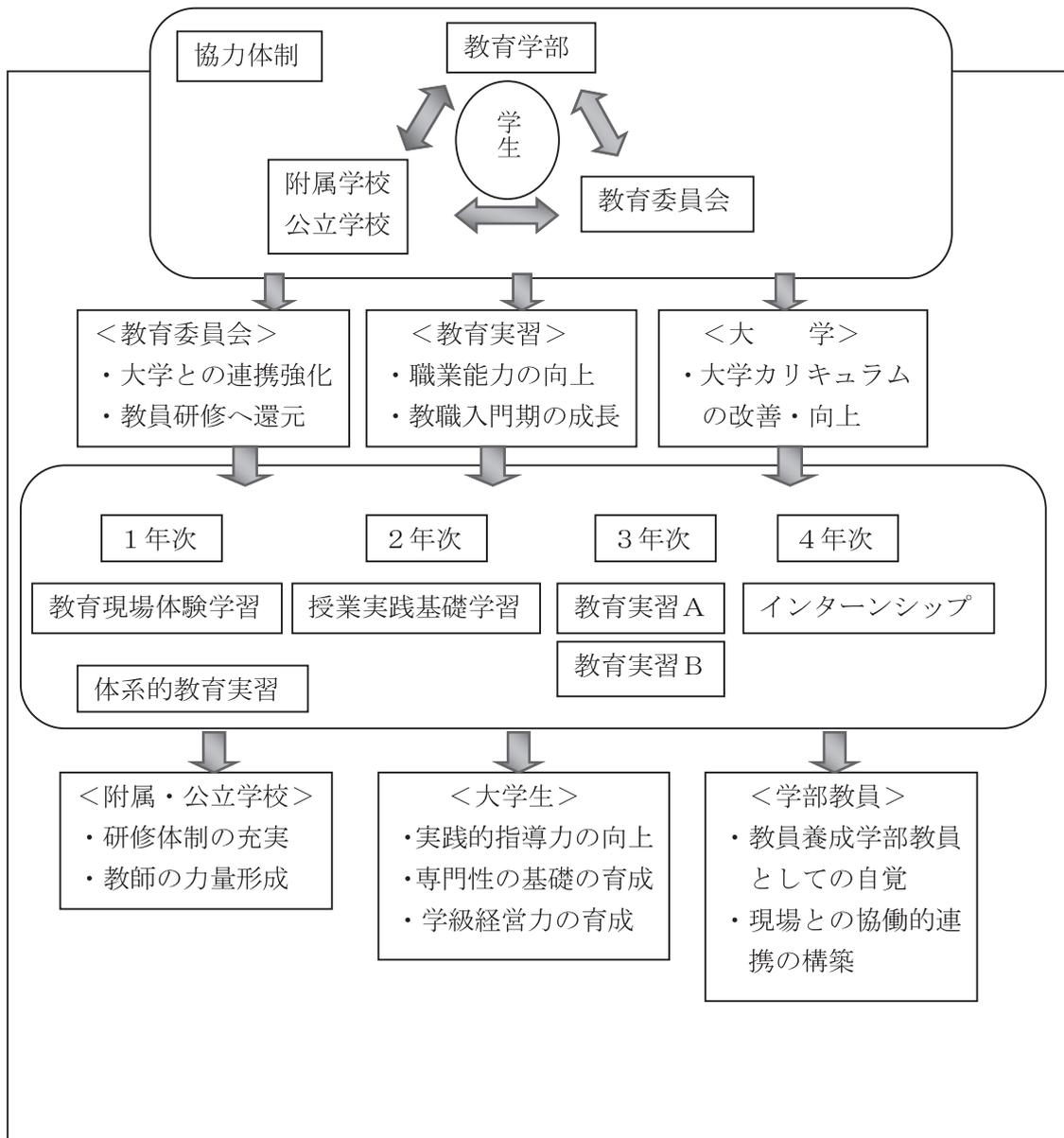
コミュニケーションの問題を、まずは係わり手である自分の側にある問題と捉え直した時に、子どもとのコミュニケーションの新しい世界が開けてくるのではないのでしょうか。

はじめに

今年度は、学校教育臨床総合センターが担当している教育実習活動を中心に報告する。教育実習は、教員養成指導の常に中枢という「かなめ」の位置を占めている。

本学部学生は、生まれて初めて、この教育実習を通して教育の現実世界に直に触れる機会を得る。この機会は、各教育実習生にとり、それまで自分が歩んできた教職への努力を問い質す機会ととらえなければならない。

ここでは、学校教育現場との連携が重要となる1年次の教育現場体験学習、3年次の教育実習事前事後学習を経て教育実習を体験した各学生の意識・態度に焦点をあてて報告する。なお、教育実習の協力体制および実習体系は下図の通りである。



## 教育実習報告

## I 教育現場体験学習

教育現場体験学習の各受入校の先生方には、学校運営、子どもたちの学びや遊びなど、さまざまな活動の様子を観察させていただき、誠にありがとうございました。この教育現場体験学習が各学校の諸先生方の多大のご協力とご理解がなければ、成し得ない性格のものであることも十分に承知しております。お陰様にて、学生自身の教職への思いや今後の大学生活が大変意味深いものになったことを事後学習で確認することができました。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

教育現場体験学習は教育学部1年次生の必修科目です。授業は学部による事前講義、9月中に実施する公立小・中学校での「ふれあい体験」、10月上旬の学部での事後指導で構成されています。平成27年度の教育現場体験学習の流れは、次の通りです。

月・日	主な内容
4/6 (月)	新入生学部別オリエンテーション：教育実習全体の概要説明
4/13 (月)	意向調査用紙の提出
4月下旬	各教育委員会へ学生受入校推薦依頼
5月下旬	各教育委員会からの受入校通知に基づく学生の割振予定表(案)作成
5/18 (月)	事前指導・講義：教育実習委員会、附属小中学校副校長
6/8 (月)	事前指導：教育実習委員会
6/22 (月)	事前指導：講座担当(クラス担任および教育実習委員)
6月下旬～7月上旬	教育現場体験学習実施日程報告書の配布(教務係窓口で学生連絡員が受け取る。「ふれあい体験」関係資料閲覧)
7月中旬	学部担当教員との打ち合わせ(グループ毎)
7月中・下旬	受入校と連絡を取り、事前打ち合わせの学校訪問日時の相談・確定
7月～8月	受入校訪問(全員揃って)
9月中	ふれあい体験学習の実施(約5日間)
9月下旬	ふれあい体験学習の終了後、受入学校宛の礼状作成・送付
10月19(月)	事後指導：講座担当(専攻毎に実施)
10月30(金)	体験記録ファイル(体験記録簿)と体験レポートの提出
12月2(水)	定例教育実習委員会における成績評価

【平成27年度 教育現場体験学習受入校一覧】(合計63校 受入学生231名)

<前橋地区24校82名>

敷島小学校/若宮小学校/天川小学校/朝倉小学校/芳賀小学校/元総社小学校/元総社北小学校/新田小学校/細井小学校/駒形小学校/荒子小学校/大胡東小学校/宮城小学校/時沢小学校/第一中学校/みずき中学校/第六中学校/第七中学校/春日中学校/箱田中学校/南橋中学校/荒砥中学校/宮城中学校/粕川中学校

<高崎地区10校46名>

里見小学校/久留馬小学校/下里見小学校/吉井小学校/吉井西小学校/入野小学校/馬庭小学校/南陽台小学校/中央小学校/北小学校

<伊勢崎地区11校46名>

北小学校/三郷小学校/豊受小学校/赤堀南小学校/あずま小学校/境小学校/境東小学校/北第二小学校/第四中学校/あずま中学校/境西中学校

<太田地区6校16名>

城西小学校/沢野中央小学校/尾島小学校/西中学校/北中学校/東中学校

<渋川地区9校25名>

南雲小学校/伊香保小学校/小野上小学校/中郷小学校/渋川南小学校/橘小学校/金島小学校/豊秋小学校/渋川西小学校

<吉岡地区3校16名>

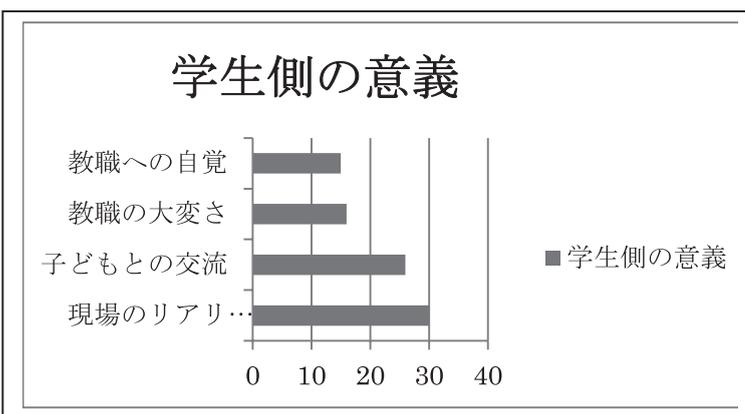
駒寄小学校/明治小学校/吉岡中学校

## 1 平成27年度9月実施「教育現場体験学習」のアンケート調査結果

問1 今回の教育現場体験学習は、学生にとって有意義であったと思われませんか。

学校現場からの総回答者数63校中55名で、「大変意義がある」と「意義がある」の回答を合わせると52/55(94.5%)名であり、その回答数は82項目である。内容項目を整理すると、右図の4項目に大別できる。とりわけ30/55(72.0%)名の回答項目「現場のリアリティ」と26/55(47.2%)名の回答項目「子どもとの交流」、16/55(29.0%)名の回答項目「教職の大変さ」に着

目すべきである。今日の学校現場の多忙感の現実を知っておくこと、その忙しさの中でも「子どもとの心の交流」を図る大切さを学生が実感することは、今後の学生自身の教職アイデンティティを形成する上で効果があるように思われる。一方「全く意義がない」と「意義がない」の回答を合わせると1/55名であり、教育現場体験学習が学生に意義があることをほとんどの学校が理解している。

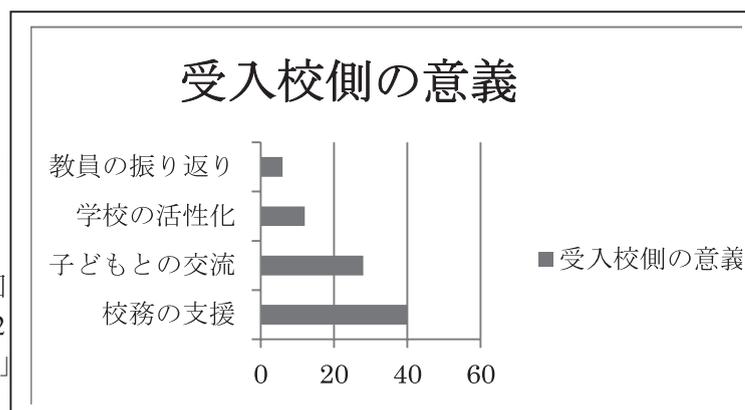


問2 今回の教育現場体験学習を受け入れたことが、貴校にとって、どのような意義があったと思いますか。

学校現場からの総回答者数63校55名で、「大変意義がある」と「意義がある」の回答を合わせると44/55(80.0%)名であり、その回答数は92項目である。内容項目を整理すると、右図の4項目に大別できる。とりわけ40/55(72.0%)名の回答項目「校務の支援」と26/55(47.2%)名の回答項目「子どもとの交流」に着目すべきである。校務支援の内

容は、「運動会の準備」、「TTの補助」、「陸上練習の指導補助」、「校外学習の引率体験」、「自習監督」、「机間指導の際の個別指導」、「体育大会の準備」、「図書館の本の整理」、「プリントの〇つけ」、「表現運動(ダンス)の指導」、「運動会使用物の制作」、「清掃指導」、「理科の顕微鏡操作の手伝い」、「パソコンの調べ学習の助言」等である。事前に各学校に配布している教育現場体験学習要項を各学校がきちんと目を通した上で、学生に指導してくれている様相が窺える。また子どもとの交流を積極的に行わせている学校が多いことは、学生にとって最も難しいとされる「子どもへのかかわり方(子ども理解や児童生活指導や生徒指導の際のかかわり方)」の心構えの素地を育む上でも効果的であると思われる。今年度より、教育実習委員会で「教育現場体験学習(1年生)の心得」を作成して、事前指導のオリエンテーションで学校現場におけるマナーの徹底化を図った。これと併せて、今後も大学に入学して間もない学生の「現場で子どもや教師に関わる上での基本的な態度(言葉遣い、服装、礼儀など)」については、普段の講義、各講座等での十分な指導が必要である。

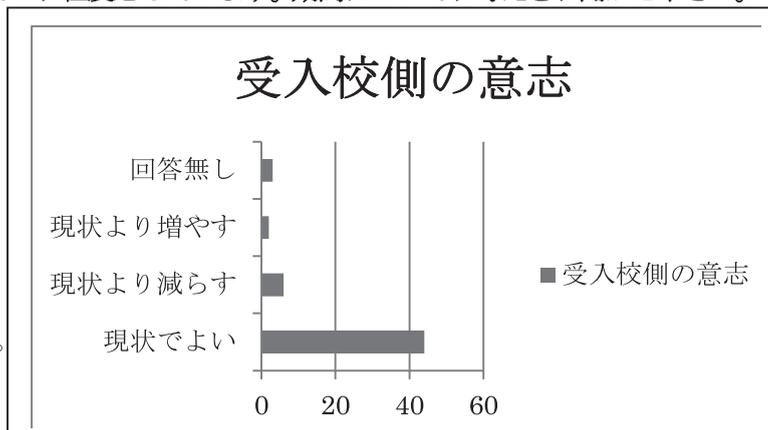
一方、「全く意義がない」と「意義がない」の回答を合わせると11/55(20.0%)名であり、その主な内容項目は「学生が何をするために来ているのかが不明確」、「実習生は観察するだけ」、「一部学生が学級経営や生徒指導に支障」「挨拶、礼儀があまりできない学生もいる」、「中学校の職場体験学習とどこが違うのか」、「2学期の行事が大変な時期に実施するのはどうか」、などである。



**問3 教育現場体験学習の期間として5日程度としています。期間についてお考えをお聞かせ下さい。**

学校現場からの総回答者数63校中55名で、「現状でよい」の回答は、44/55(80.0%)名であり、その回答は、「9月は行事が多い時期なので考えて欲しい」が1名で、あとは回答無しである。「現状より増やす」の回答は2名であり、内容は「どうしてもやるなら5日は短すぎる。最低15日(3週間)は必要である」と。「現状より減らす」の回答は6/55

(10.9%)名であり、内容は「学生と関わる時間だけ本務が止まる」、「3日程度でもよい」、「熱中症など、学生に気を遣う面が多い」、「体験学習の主旨を大学側で徹底させられるなら、1日でよい」等である。回答無しは3校である。

**問4 その他、今回の実習について、今後の取組に向けての大学側への要望、助言等がございましたら、お書き下さい。**

・ここ数年の様子を見ると、全体的にまじめに取り組むが、個人差があるものの高校生気分が抜けないのか、現場体験の目的意識がもてないのか、意義が自分の中で明確でないのか、仲のよい学生同士でいつも一緒にいたり、ロッカールームで長時間話し込んでいたりするなど、真摯に取り組めない場面も見られる。逆に、教職員としての視点を持たなければならないという意識の表れか、実習日誌に担任に対して指導のようなコメントをする学生も見られる。1年生ということを考えて目をつぶらなければならない部分もあるが、ボランティアで実習生を預かる担任の心情を考えると、大学側で相応の事細かな指導をお願いしたい。

・事前指導を十分に行い、自覚をもって実習に臨んでほしいと思います。初日から全員遅刻には、少々あきました。

・実習(学習)で取り混ぜる内容についてより具体化して、学生に何を身につけさせたいのかはつきりしたものにして下さい。

・大学入学後の早い段階で、学校現場の実態を感じるにより、今後の大学生活の励みになるのであればいいが、逆のパターンになってしまう可能性もあるのではないかという心配もある。

・今回6名の受け入れでしたが、本校は現在空き教室等が全くなく、学生の控え室を確保することが困難です。会議、親との面談、生徒指導などを避けながら控え室を移動してもらいました。どのように人数の振り分けをしているのかわかりませんが、少なくしていただきたい。

・大学ではこの体験を個々に評価するのだと思いますが、個々の体験の様子をどのように評価しているのでしょうか。個々の評価に大きな差があり、学生の記録だけにたよる評価だけでは疑問です。

・可能であれば体験学習終了後も学校との関わりを持ちサポートしてもらえるとありがたい。

・体験学習の学生さんを見て、今時はこんなものなのかな?とも思いますが、現在行っている教育実習できている実習生はたいへんすばらしい態度で学んでくれています。1年生のうちうまくできなくても、大学で3年間鍛えられるとこんな感じで成長するんだと実感できました。

・グループリーダーからの連絡の仕方や時期、実習への心がまえなどもう少し手を入れていただけると、受け入れ校の負担が減るように感じています。

・教員を志望する学生が早い段階で教育(学校)現場にて体験することは、とても有意義なことだと思います。実習では別にボランティアで学習支援の機会があると学校としてはよりありがたいです。

・「見学」の意識が強く、担当教師の補助・教育活動の参画意識が弱く、前半はやや傍観者的でした。子ども側から見ると「教師」ですので、「気づき・考え・実行する」の態度で取り組めるよう事前指導の充実をお願いします。

## 2 事後指導の話し合い活動を通じた学生の意識・態度

教育現場体験学習では、「フィールドワーク→省察→共有」という過程によるアクションラーニングが重要です。学生自身が実際に教育活動の行われている教育現象の中に身を置きながら、持っている知識をフル回転させ、実際に行動しながら考えていくこと、つまりその体験学習を通じた振り返りと気づきを大切にしています。具体的には、まず学生自身が公立小・中学校の学校運営の仕事フィールドワークします。そしてフィールドワークで得た知識を自身のさまざまな知識と結びつけながら理論的に省察し、さらにはフィールドワークによって得た知識を学生同士で共有し合うことで、自身の成長を図ります。学生たちが教育現場体験学習を通じた成長した証としての主な具体的様相は、次の通りです。

### (1) 学びとしての成長

#### 【学年（学級）文化の存在】

- 学級担任の先生によってクラスの雰囲気がこんなにも異なるものなか。
- 学級担任の子どもに注ぐ一瞬の視線で子どもの態度も一瞬に変わる。
- 学年（学級）全体のまとまりを考えた指導の大切さが実感できた。
- 発達段階もあるだろうが、1年から3年までの授業雰囲気づくりの変化に驚かされる（中学）。
- 授業の導入で生徒集団が集中しやすい学級の雰囲気づくりは大切だ。
- 同じ教材を使って指導しても、クラスの雰囲気によって授業が全然違うのには驚いた。

#### 【教師の指導性の大切さ】

・時には優しく、時には厳しく指導していかなければならない。/・子どもを叱ることは大切だが、難しい。/・子どもを叱った後のフォローが実に上手い。/・常に子どもたちの進捗状況の違いに応じた授業に心がけることは大切だ。/・子ども一人ひとりに合わせた指導の難しさを痛感した。/・あのような臨機応変な対応ができるだろうか。/・ただ叱るのではなく、しっかりと指導していくことが大切なんだ。/・ハプニングへの臨機応変な対応ができてこそ教師である。/・子どもの安全を常に考えた指導に心がけなければならない。/・教師は常に生徒と全力で接しなければならない。

#### 【教職の大変さ】

・今まで見ることの出来なかった教師の裏の苦労が分かったことは今後の励みになった。/・授業をみると、それまでの事前の準備に時間をかけているのが分かる。大変な仕事だ。/・仕事量や裏方の仕事の多さに驚いた。仕事をしっかりと、ソツなくこなすことが求められる。/・雑務をしっかりとこなすための体力が必要だ。身体的、精神的体力の必要性を痛感した。/・教師と塾講師の違いが凄く実感できた。/・教師の仕事は半端じゃない。

#### 【教員としての自覚】

・敬語の必要性を実感した。/・積極的な教師、子どもとのコミュニケーションを図らなければならない。/・現場の雰囲気を知ることで教師としての責任を強く実感できた。/・教師には元気、若さ、発想力が必要だ。/・教師としての強い心と強い身体を持ちたい。/・今まで何となく持っていた教員のイメージが明確になった。/・少しだけ意欲が湧いてきた。/・大変な仕事だけど、それだけやり甲斐を感じた。/・子どもの成長を感じることが出来るのは幸せなことだ。/・保護者や地域の方々と積極的に関わらないと指導は難しい。/・地域の願いや思いを知る必要性を痛感した。

#### 【子ども理解・子どもへのかかわり方】

・子ども一人ひとりの提出物からその子どもの姿が分かるんだな。/・私たちの視点からみる「当たり前」が通用しない。/・子どもとの接し方一つで、こんなにも子どもとの距離感を感じるものなのか。/・本当に子どもは十人十色。先生はどんな方法で子ども一人ひとりの特性、性格等を把握するのか。/・子どもを知るには、自分から積極的にかかわりにいくことが一番だ。/・子ども一人ひとりに合った

声かけは難しい。/・細心の注意を払って児童を見守ることの大切さを学んだ。/・本気で子どもと向き合うことから相互理解が生まれるんだ。/・自分が思っていた小学生とはまるで違った。/・一人ひとりを平等に見るとともに、全体をみることの大切さと難しさを痛感した。

## (2) 自己省察 (self-reflection) を通した成長 (下線部が学生が省察していた痕跡)

教職の入門期において、「省察」(reflection、一般に日本語で「反省」と言われている)はとても重要です。とりわけ、学生が自身の体験を通して、「自己発見」(self-discovery)する営みが大切です。省察は、人間性についての意味深い潜在力を反映した価値を含んだ概念であり、精神作用です。学生にも自己のパーソナリティの次元にまで分け入った自己省察 (self-reflection) が必要です。学生が子どもに示す態度や行動は、基本的にその学生のパーソナリティのあり方に深く根ざしています。

\*\*\*\*\*

・完全に教師としての意識不足だった。/・教師は自分の特性、人格、生活態度全てに改善しなければ/・私の何気ない行動で授業の進行を妨げてしまった。取り返しがつかない。生徒と深く関わることができない。私は教師には向かないのか。/・子どもと平等に接することの難しさを嫌と言うほど味わった。/・何と私は馬鹿なのか (子どもの前では教師であるはずなのに・・・) /・注意や指導が甘い。全く自己判断ができない自分がある。子どもが呼びかけてくれたのに、私は気付かない。その子の心を思うと・・・/・教師としての自覚の甘さが情けない。/・一度に複数のことをしなければならない状況への対応が自分に出来るだろうか。/・障害のある子どもへ対応できない。正直怖かった。どうかかわればよいのか。/・いったん学校に足を踏み入れたならば、もう学生ではないのだ。社会人としてのマナーが身に付いてない。言い訳にならない。/・指示待ちにならないようにと思いながら、何をどうしていいかわからない自分がいた。悔しい。/・実習生としての立場でどう生徒と触れ合うべきで、どこまで先生として指導して良いのか分からない。/「先生」としてではなく、「友だち」として接してしまった自分の甘さが情けない。/・先生としての立場から注意することができなかった。その状況での判断が全くできない。/・これからの大学生活で今の自分の言葉遣いや性格が改善されるのだろうか。/・声をかけたくても、かけられない自分がいた。/・この生徒との距離感はどこから来るのだろうか。/・どうしたら思ったらすぐに行動できるのか。自分の積極性のなさを痛感した。/・子どもへの一言の注意がこんなにも大変なのか。/・どうしても触れ合う子が偏ってしまう。自分では差別しているつもりはないけれど。/・もっと厳しくすべきだったろう。でもできない。掃除の時間の監督としての責務が果たせない。/・平等に接することはどうすればできるのか。/・予想外のとっさの一言が出てしまう。

## (3) ふれあい体験の重要な一つの意義—学生の教職アイデンティティの確立—

学生のライフストーリーの有り様は、その学生ならではの個性によるものです。そして、このようなライフストーリーがその学生の個性の核心に触れていれはいるほど、逆に普遍性を帯びた課題、つまり柔軟で多様な学校集団の中で育まれた意識・態度の有り様という特質が浮き彫りにされてきます。学生のライフストーリーの中で語られる言葉は、その学生に属する「その」学校での生活であり、意識や感情、態度なのです。

今回も教職意識が0～30%未満、50%～70%未満、100%の学生各1名を対象に、ふれあい体験終了後の今の心境を自由に語ってもらいました。その結果、体験前の教職意識に関係なく、どの学生も教職アイデンティティを高めており、前回同様ふれあい体験学習の意義が読み取れました。学生や教師の名前は、プライバシーの点から全て仮名です。学生の自発的な語りは、事前に用意された質問への回答を肉付けするものではなく、学生の発想で立案され、その手で創りあげられていくものです。本人が自発的に語ってくれない限り、私には想定できない生活の局面を提示することはできません。

### <N学生の語り (女子)>

正直、私は教師になりたいという強い思いをもって大学に入ったのではありません。しかし、この五日間は本当に忘れられない宝物となりました。凄いスピードで人に出会い、数え切れないほどの思い出ができました。そんな中で私は、子供たちから学んだことがあります。人との接し方です。本当

の大人になるにつれて、恥ずかしいがために、人と会話するときの私の瞳はいつもキョロキョロでした。子供たちは、私に話しかけてくれるとき、その輝いた瞳は一直線に私の瞳へと向かっていた。

教員をめざす人には致命的なことだが、しゃべり下手だった私を育ててくれたのは、他ならぬT小学校の子供たちでした。また、子供たちとの接し方に困っていた私を助けてくれたのも、やはり子供たちでした。無理矢理腕を引っ張られて痛かったことや、しゃがんでいるところを後ろからのし掛かってきて重く感じることも、その感情とは真逆にすごく嬉しかったです。今では、私から子供たちに気軽に声をかけることができるようになりました。

人と会話すること、意思疎通し合うこと、触れ合うことの喜びを改めて学ぶことができました。この現場体験学習では、他にもたくさんのお話を学びましたが、私が一番学んだことは人との接し方でした。

### <T学生の語り（女子）>

5日間、K小学校という現場で、現役の先生の姿をみてきて、私が今まで抱いていた理想とは全く違うということを知った。教師なのだから、子供たちと接する時間がほとんどだが、職員室で仕事をしている時間もとても多かった。

先生方の話を聞くと、仕事を家に持ち帰ることもよくあるそうで……。また、女性の先生は、結婚や出産などの時はとくに大変だったことも話されていた。このような話を聞いていると、教師になるにはしっかりと覚悟が必要だと、改めて実感した。

自分の子どもが物心ついた頃でさえ、あまり一緒に遊んであげることができなかつたかもしれないと話される先生もいて、ただ驚くばかりだった。それでも、子どもが好きだという強い心があって、教師という仕事にやり甲斐を日々感じているからこそ、教師を続けられるのだと思った。

どんなに大変でも、毎日子どもが成長していく過程に携わることができ、そして自分自身も一緒に成長できることを、このふれ合い体験学習で学ぶことができて良かった。

### <Y学生（女子）>

教師は子どもに様々なことを教えます。しかし、ただ子供たちに向かって言えばそれで終わりではなく、理解させなくてはなりません。今回のふれ合い体験学習では、一人一人に合った教え方を考えさせられた。

分かっている子どもは間違っているところを指摘すれば、すぐ直したり考えたりするのですが、分からない子どもはやり方を説明しなくてはなりません。その説明をするときは、習ったことをそのまま説明するのではなく、算数で125が分からなければ、100と20と5で分けたり、図で表したりしてあげる必要があります。分からないことを分かるようにするには時間がかかりましたが、分かるようになると、私も嬉しくなり、やり甲斐を感じました。

教える難しさを実感したのは、運動会です。中でもダンス練習は毎日やっていたので印象深いです。初めは子どもたちと一緒に覚えてのに必死でしたが、覚えてくると教える側となり担任の先生方とかけ声を工夫したり、よく分からない子がいれば、その場で一緒に踊ったりしました。ダンスを始めるタイミング、立ったりしゃがんだりするところは、きっかけとなる子どもを中心に教えるとスムーズにできました。リズム感や拍をとれない子どもへ教えるのが難しかったです。

あっという間に当日となり、始まる前はみんな緊張しているようでしたが、終わった後のみんなのキラキラとした表情は忘れられません。先生になったら、私も子供たちのキラキラした表情をたくさんみたいです。

## II 教育実習事前事後学習

教育実習事前事後学習は、教育実習の事前と事後に行う学習を通して、教育実習の目的の達成を充実させるために実施する活動である。事前学習は、学生が学部教育と教育実習との間の距離を狭め、教育実習に円滑に臨めるように配慮すると共に、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的・基本的な知識・技術を確実に身に付けさせることが重要である。また事後学習では、学生が教育実習での学びを通して、実習前の自己の教育観、指導観、子ども観、学校観などと対比・整理することによって、今後の学校教育や教師の課題を認識し、学部における今後の教育、研究に十分役立つようにすることが必要である。

このような教育実習の事前事後学習の実施を通して、教育実習の成果をより実りある豊かな内実にするとともに、教育実習を学部教育の中核に、より明確に位置づけることができるのである。

### 1 事前事後学習の概要

教育実習事前事後学習は、全体オリエンテーション、本実習事前学習、本実習事後学習の3つに大別される。そのうち、本実習事前学習は、「専攻別事前学習」「カウンセリングに関する講義」「学習指導案の作成指導」「模擬授業用学習指導案作成①②及び模擬授業」「特徴あるすぐれた教育実践の紹介と講義（主に道徳）」、本実習事後学習は、「校種別事後学習」「専攻別事後学習」の内容から構成されている。平成27年度の事前事後学習の流れと実施計画案は図1と表1の通りである。

図1 教育実習事前事後学習  
教育実習A, B 教育実習C 幼稚園実習(附属学校園・公立学校)

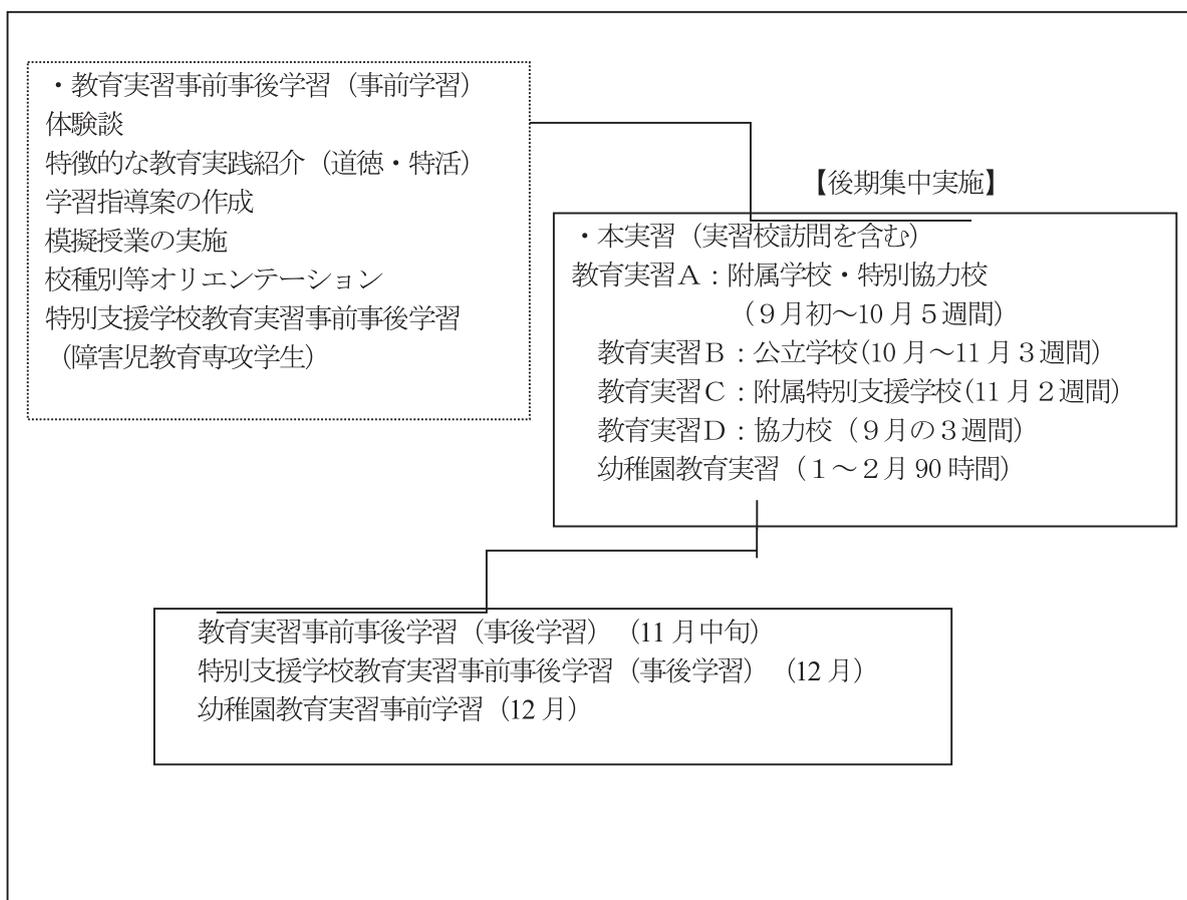


表1 平成27年度 事前事後学習 実施計画書

番号	事 項	実施日	内 容
1	全体オリエンテーション	4/15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習の意義・目的、実習内容の概要、実習に対する心構え、実習態度の注意点、健康管理上の注意点などのガイダンス</li> <li>・校種別の教育実習の詳細なガイダンス</li> </ul>
2	体験発表と事前学習	5/20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専攻毎に4年生が3年生に教育実習の体験談の発表。また、専攻教員による教育実習の準備物や留意点の指導</li> </ul>
3	講義①	5/27	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオ視聴による喜怒哀楽の表現方法から児童理解の大切さ</li> <li>・児童理解のためのカウンセリングを学びながら自己理解の大切さ</li> </ul>
4	学習指導案作成指導	6/3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教材研究から具体的な学習指導案の書き方まで、基礎的な内容を実際の授業の流し方も交えた指導</li> <li>・子どもの実態把握、単元理解、教材や指導方法の在り方等</li> <li>・学習指導案の意味、生徒・教師・教材の3要素の相互作用としての活動についての説明</li> <li>・学習指導案の意味と指導案作成の流れと形式についての説明</li> </ul>
5	模擬授業用指導案作成指導①	6/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・②の学習指導案作成に向けた教科目標からその教科の特性や授業の在り方の概要的説明</li> <li>・実際の単元を例に、授業作りの要素となる板書計画の仕方から全体イメージの把握の仕方の指導</li> </ul>
6	模擬授業用指導案作成指導②	6/17	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導案は略案とし、本時の部分を中心に作成した指導案を指導担当が読み、授業の流れや活動、学習の準備資料の工夫、その他の具体的な留意点等、基本的な授業の組み方や教科の特徴的な手立ての工夫等の個別指導</li> </ul>
7	模擬授業	7/1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・②で作成した学習指導案を基づくグループ毎の実施</li> <li>・授業の様子や学習指導案の記述内容から題材のとらえ方や授業展開、児童がねらいに到達できるようにするための手立ての指導</li> <li>・教科目標の解説、授業の進め方や学習指導案の書き方についての説明</li> <li>・指導担当が実際に模擬授業を行い、指導者と児童の両面から授業を観察できるような配慮点の説明</li> </ul>
8	講義②	7/8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳の模擬授業を観察して、道徳の活動展開と留意点の理解</li> <li>・授業実践のビデオ視聴による子ども理解の方法についての理解</li> </ul>
9	教育実習 B 説明会	10/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習 A を踏まえた教育実習に対する情報提示 (実習 B の校務、実習録、諸会費、部活動、授業、評価など)</li> </ul>
10	校種別事後学習	11/11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導と生活指導を中心に指導と評価の一体化の意味と方法について実際の授業場面に基づいた指導</li> <li>・小学校と中学校の比較 (教科指導、生徒指導、教師間連携) についての自己の振り返りをもとにしたグループ協議</li> </ul>
11	講座別事後学習	11/18	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の専攻内容に関わる授業内容の確認、および生活指導、生徒指導などの経験を報告し、教職に向けての改善方法などの検討</li> </ul>

## 2 学校組織集団における協働性や同僚性の追求意欲の高さ

今日の学校や教職員を取り巻く環境には大変厳しいものがあります。そのような状況の中で、教育実習は一般的に見れば、厄介者の何物でもなく、実習校の諸先生方の多大なご協力を仰がなければならない性格のものであることを十分承知しています。しかし、教職に身を置いている者であるならば、

教育実習は誰でも一度は経験したことのある苦しくも味わい深い「ライフステージ」であり、その経験が今日の教師自身のアイデンティティ形成の原点になっているのも事実です。

今日の市場原理主義を基盤とする工場生産モデルとしての学校組織の中で考えるならば、教育実習を「多忙感を生み出す産物の何物でもない」とバツサリ切り捨てるか、それとも「未来の子どもたちの教育を担う後輩を育てているやり甲斐のあるもの」という温かな気概をもって受け入れるかの分岐点は、その学校組織体を構成する教師の持っているパーソナリティの豊かさや柔らかさを基底にした「同僚性」や「協働性」の追求意欲の高さにあると思われます。

ここでは、今日の厳しい社会状況の中でも、校長のリーダーシップの下、この教育実習を学校の同僚性や協働性を高め、組織の活性化を図る学校改善の一助と位置づけ、ポジティブな組織文化を構築すべく努力している学校集団の内実を明らかにしてみます。具体的には、教育実習Bを意義ある活動と肯定的に受け止めている学校の主な記述内容から読み取ることになります。

平成27年度 教育実習Bに関する実習校（実習担当者）へのアンケート調査結果

( )は26年

設 問	選 択 肢	小学校		中学校		小+中	
		人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
問1 実習生の事前準備は十分であったと思いますか。	十分	38	58.5(63.4)	37	58.7(52.4)	75	58.6(58.2)
	ほぼ十分	21	32.3(28.2)	20	31.7(36.5)	41	32.0(32.1)
	あまり十分でない	3	4.6(4.2)	5	7.9(7.9)	8	6.3(6.0)
	不十分	0	0.0(0.0)	0	0.0(0.0)	0	0.0(0.0)
	無回答	3	4.6(4.2)	1	1.6(3.2)	4	3.1(3.7)
小 計		65	100.0	63	100.0	128	100.0
問2 実習生の取組は充実していたと思われますか。	大変充実	47	72.3(46.5)	34	54.0(39.7)	81	63.3(43.3)
	おおむね充実	14	21.5(46.5)	28	44.4(55.6)	42	32.8(50.7)
	あまり充実しない	2	3.1(2.8)	0	0.0(1.6)	2	1.6(2.2)
	全く充実しない	0	0.0(0.0)	0	0.0(0.0)	0	0.0(0.0)
	無回答	2	3.1(4.2)	1	1.6(3.2)	3	2.3(3.7)
小 計		65	100.0	63	100.0	128	100.0
問3 教育実習Bは貴校によって有意義であったと思いますか。	大変有意義	14	21.5(15.5)	5	7.9(15.9)	19	14.8(15.7)
	ある程度有意義	39	60.0(70.4)	42	66.7(57.1)	81	63.3(64.2)
	あまり有意義でない	7	10.8(4.2)	8	12.7(20.6)	15	11.7(11.9)
	全く有意義でない	0	0.0(1.4)	0	0.0(1.6)	0	0.0(1.5)
	無回答	5	7.7(8.5)	8	12.7(4.8)	13	10.2(6.7)
小 計		65	100.0	63	100.0	128	100.0

○この時期、忙しいのは何処も一緒である。授業を参観されたり、授業を指導する中で、自分の授業を見つめ直す良いきっかけになった。実習生に自分の若い頃の姿を重ね合わせながら、新鮮な気持ちになれた。若い教師を育てることは私たち教師の使命であろう。

○実習生に関わって、教師として大切なものを改めて確認し、新鮮な気持ちで生徒に接することができた。普段はいつの間にか経験や勘を頼りに十分な教材研究もしないで授業に臨むようなことがあるが、実習生の指導も兼ねて予備実験などを行うことで良い結果を生み出せるような準備ができた。

○児童と実習生がかかわるのを見て、学習指導はもちろん、生活の中でも色々な学ぶべき点があった。改めて若い頃の自分を振り返るきっかけになったり、教材を改めて見つめ直したりすることにつながった。

- 行事が多く、慌ただしい中だったが、実習生の指導を通して我々も自分自身を見つめ直す良い機会になった。
- 忙しい中で職員全体が「群馬の若い教師を育てるんだ」という気概をもって示範授業をしたり、教材研究を見直したりしたことは教員一人ひとりの資質向上に生かされてよかった。
- 実習生の指導のために教科担当の教員間で学年の壁を越えた連携が深まった。
- 教育実習を受け入れることで日頃の指導を振り返ったり、工夫・改善する機会が増えたという点では有意義だった。担当教科の先生の負担は大きかったが、教育実習は「教職をめざす学生ために行うもの」と考えると、今後も「後輩を育てる」という点から協力させていただきたい。
- 久しぶりに実習生を受け入れ、若い後輩を指導したことは先輩教員として勉強になった。
- 「若い教師を育てる」という教員のひとつの役割が刺激されました。
- 謙虚で熱意のある実習生をみていると、我々教職員により刺激となった。指導教諭も実習生と一緒に教材研究をする中で、「そういった考えもあるのか」と勉強になった。
- 16年目の教員が実習生の指導にあたったが、二人で自分のことのように授業について考え、悩みながら授業を創りあげている様子に周りが感化された。他の担当教師も示範授業や講義のために資料を工夫するなど大変であったが、良い勉強になっていた。

### 3 平成27年度 教育実習A・Bに関する学生へのアンケート調査結果（ ）は26年度。

学生が5週間の「教育実習A」と3週間の「教育実習B」をどのように受け止めているかを、次の4つの質問内容からみてみよう。質問内容は、以下の通りである。

**質問1 「教育実習A」に関するあなたの充実度はどの程度でしたか。**

- (1)大変充実 (2)おおむね充実 (3)あまり充実してない(4)全く充実してない

**質問2 「教育実習B」に関するあなたの充実度はどの程度でしたか。**

- (1)大変充実 (2)おおむね充実 (3)あまり充実したない(4)全く充実してない

**質問3 教育実習Aの経験が、教育実習Bに生かされたと思いますか。**

- (1)非常にいかされた(2)ある程度は生かされた(3)あまり生かされない(4)全く生かされない

**質問4 教育実習Aと教育実習Bの二つの異なる実習を体験した意義はあるか。**

- (1)非常に意義深い(2)ある程度意義深い(3)あまり意味がない(4)全く意味がない

	選択肢1	2	3	4	合計
質問1 教育実習Aの 充実度	大変充実 67.3(71.6)%	おおむね充実 30.4(28.4)%	あまり充実して ない 1.8(0.0)%	全く充実して ない 0.5(0.0)%	有効回答数 220名
質問2 教育実習Bの 充実度	大変充実 55.0(57.8)%	おおむね充実 43.6(29.8)%	あまり充実して な 0.9(4.1)%	全く充実して ない 0.5(0.0)%	有効回答数 220名
質問3 Aの経験のB への効果度	非常生かされ た 37.7(44.0)%	ある程度生か された 56.4(45.4)%	あまり生かさ れない 5.0(2.3)%	全く生かされ ない 0.9(0.0)%	有効回答数 220名
質問4 2種類を体験 した意義	非常に意義深 い 68.2(70.2)%	ある程度意義 深い 31.3(20.6)%	あまり意味が ない 0.0(0.9)%	全く意味がな い 0.5(0.0)%	有効回答数 220名

次に、学生の自由記述回答から、「非常充実していた」「非常生かされていた」「非常意義が深かった」など、学生が効果的に受け止めている教育実習Aと教育実習Bの具体的様相の内実について、主立った内容を列挙する。

#### (1) 大変充実した教育実習Aの内実

○ベテランの先生方による学習指導をたくさん見れた。学習指導法について手厚くご指導してくださ

- った。初めての「教員」という立場での勤務実習だったので新しく知ることばかりであった。
- 授業づくり、生徒指導等、様々な面で学校というものに深くかかわれた。児童としっかりコミュニケーションがとれ、授業も自分で説明するところが少なく、児童の発言が多いものにできた。
  - 放課後に同じクラスの教生で話し合えたり授業準備をしたりする時間が十分にとれて、担任の先生にも助言をもらえて、授業について考えられた。先生方との話し合い、子どもとの触れあい、すべてが充実していた。
  - 学習指導案指導や授業参観など、主に学習面での指導が充実していた。同じクラスの教生と様々な話し合いができた。空授業→実践→研究会と授業についてのスキルを高めることができた。また生活指導に取り組むことができた。
  - グループのメンバー同士で、協力・刺激し合えることができた。授業数が多く生徒と関わる機会があり、教師としての経験を積むことができた。5週間という長い期間であったが1日1日充実した毎日を授業でも学校生活すべてにおいて過ごすことができた。
  - 部活も参加でき、充実していた。授業数も多く、たくさん指導改善をする機会があり、実のあるものになった。一つの授業に長い時間をかけて追究することができた。授業以外での子どもの指導、行事など様々な教師の仕事を経験できた。子どもたちとの関わり方や、授業などを考える際の留意点、実際に子どもたちを相手に授業をしている時にどのようなことを考えるべきか、自分自身がどのような状態であるのかを知ることができた。
  - 教師になる上での技術、態度、姿勢など様々学ぶことができた。授業の作り方や子どもとの関わり方など、現場の先生方のご指導で様々なことを学び、身につけることができた。小学校1年生という事で、高学年や中学生とは違う指導法や接し方を学ぶ事ができた。
  - 実際に現場で体験してみて、大学では学べない子どもたちとの関わり、授業実践の難しさ、今後の課題や良かった点と様々な所で気付き得ることができ、現場の先生方に評価をいただくことができ充実していた。毎日、子どもたちと接する機会があり、レベルの高い師範授業を見せていただけた。
  - 指導教官にとっても面倒見てもらい、仲間とも良い距離間を保ち、しかし協力するところは協力して授業の準備にのぞめた。放課後の担任の先生との打ち合わせの時間がしっかりと確保されていて、多くの指導を受けることができた。授業実践をたくさんさせていただけたことと、生徒と直接関わる機会を多くいただけたことが特に充実していた。
  - 各クラスに1人配属であったため、クラスの子どもたちと積極的に関わる事ができた。人前で話すことに慣れた。授業の仕方、作り方がわかった。子どもと仲良くなる事ができた。
  - 指導案の書き方や授業づくり、授業研究会、担任の先生による指導が充実していた。教師の仕事の基本を学べただけでなく、言葉づかいや時間を守って行動することなど、社会人になったときに大切なことが学べた。先生方に空授業を何度も見て頂いたり、指導案の修正もとても丁寧にして頂いた。また最新のIC機器を使って授業をさせて頂いた。
  - 先生のご指導の下、4人で協力して相談しながら授業づくりを行うことができた。学校生活での子どもとの関わり、ひとりひとりと笑顔を絶やさず真剣に接することができた。まず学ぶ事の多さです。1日が始まり終わるまで、全てが学びでした。特に最初のうちは仕事にも生活のリズムにも慣れず、毎日遅くまで教材作りをして体がボロボロでした。しかし、子どもの笑顔を見るたびに、元気がわき、子どもたちが楽しそうに学習に取り組む様子を見て、がんばってよかったと達成感を感じていました。その喜びも、夜遅くまで悩んだつらさも、この実習を通じて行ってきたすべてが本当に充実した学びでした。
  - 技術でクラスの子どもと関わる機会や教室にいる時間が少ないことが残念でした。授業を比較的多くさせて頂いただけのため、自分の良い点、悪い点も見つかり試行錯誤をする機会も多くもらえた。
  - 大学の講義だけでは分からない子どもたちの実態を自分の目で見る事ができた。毎日の学びがたくさんあり、自身が少しでも成長できていると思えた。朝早く起きて、子どもたちとふれあい、指導をし、夜遅くまで授業づくりの構想を練ったりする毎日だった。日々いろいろのことが起きて困ったり、楽しんだり退屈することがなかった。
  - 授業から児童に対する指導まで幅広く経験できた。同学年配属の教生、そして荒牧小学校配属の教

生全員と助け合えた。自分の弱い所（積極性のなさ、計画性のなさなど）に気づけた。形式を徹底して守ることの大変さを味わった。一学年に一人の実習生が配属されたので、学年ぐるみで指導を受けることができた。

- 実習生控え室が7人で使うのに適していた。先生方、クラスのメンバー共に熱心で良かった。実習生同士で授業の計画を立て、実践して振り返る過程で色々な人の意見を取り入れることができた。自分のやる時間だけでなく全体の流れを通して考えられた。
- 学習環境や設備など、子どもにとっても、または教師や実習生にもすぐれていた。指導案について、非常に細かく見て頂き、子どもの実態に合わせた授業作りについて考えさせられた。
- とにかく忙しかった。1人で授業を作っていたので、とても難しかったし、クラスの子もたちと遊んだり話したりして、笑いあり、涙ありの日々でした。専門教科の指導法をたくさん学ぶことができた。授業を1回1回やり切ることができた。
- いかに **All English** で分かりやすく生徒に伝えられるかをとことん考えられた。生徒の反応・意見のまとめ方を学べた。教科指導で、担当の先生方が遅くまで残って指導してくれた。実習生も積極的に行事に参加させていただいたので、生徒たちと良い思い出ができた。
- 同じ専攻の仲間と意見を出し合い、良い教材研究をすることができた。本物の中学生と過ごすことができ、本当の教師の仕事をするすることができた。教材研究に関してより実践的な指導が得られた。
- 生徒の反応に対する指導や指示ができた。学校での教員の具体的な職務を体験できた。特別協力校ではあるものの、公立の一般中学校だったので、より現実味を帯びた授業計画を考えたりすることができた。教師となる者として、また将来を考える上で、とても良い経験、勉強になった。
- 専門教科を一単元通して授業をもつことができ、多くの事を学べた。5週間と長い期間生徒と接することができ、実態を把握しやすかった。担当をしてくださった先生が、指導案であったり、実際の授業を見て、こうした方が良かったなどのアドバイスをしてくださった。何度も指導案を添さくしてくださり、授業の作り方、やり方などがわかるようになった。
- 大学では学習できないたくさんのことを勉強できた貴重な5週間でした。指導案の書き方から授業の作り方まで、とても丁寧に教えていただけた。また、学級経営のあり方を先生方の姿を見る中で学ぶことができた。5週間という十分な期間によって児童の成長も感じることもできた。多くの時間を子どもたちと過ごすことができた。
- 仲間と協力すること、一人では困難なときには、援助をたのむことの大切さを学べた。先生方が本当に熱心に授業づくりにとりくんでいて、その姿勢を学べた。今まで知ることのできなかつた、生の授業の雰囲気味わうことができたのが一番の大きな要因です。授業の難しさ、生徒指導の大変さを身をもって感じることもできました。
- 細かく丁寧な指導を受けることができたため、自分自身で成長を感じることもできた。多くの生徒と触れ合うことができて大変よかったため充実していた。授業をする難しさを知った反面、楽しさや充実感があつた。体育大会で生徒のがんばる姿を見られた。授業研究で活発に意見交換ができ、改善できた。
- 授業前、授業後と指導教官の先生に丁寧にご指導をいただき、1つ1つの授業を意識を持って行うことができた。部活動にも参加し、大会も見学に行く等、多くの生徒と関わることができた。研究授業をした。実習生の仲間が多く、色々な事を共有できたのがとてもよかった。
- グループで授業をつくるということで、話し合いながら教材研究をした。他専攻の授業の見方は、国語科とはまた違うところがあり、面白かった。グループで授業を作っていく中で、先生のアドバイス等も加わり、とても充実した授業作りになった。
- 教材研究や空授業、指導案の修正などを自分の納得がいくまで行うことができ、授業に臨むことができた。授業のつくり方や、授業の仕方、児童との接し方などを実際に見て学べた。また、実際に先生をしている片のお話がナマで聞けた。
- 自分の長所、短所をしっかりと見つめ直すことができた。その中で、自ら進んで実行することの大切さを実感した。教員になりたい気持ちは正直、つらさをたくさん知れたので減った気はしたが、子どもとの接し方や授業のつくり方について考えられてよかった。

- 大学での授業では、ある種「机上の空論」であった内容を児童、生徒に実践し効果の程や手応えなど実感することによって、理論に実態を持たせることができた。
- 実地は4回と多くはありませんでしたが、担任の先生の丁寧なご指導のもと、指導案の書き方から授業の進め方まで基盤となる部分をじっくりと学ぶことができた。また、5週間の実習期間で児童と関わる中で、児童からも学ぶことが多くあり、とても充実していた。
- 大学の授業では知ることのできない、実際の子どもの姿を見て、触れ合うことができた。また、日直などさせてもらい、授業以外の教師の仕事も経験することができた。
- 授業をすることに、学年のメンバーで授業研究を行い、先生からもアドバイスをいただくことができ、非常に勉強になった。
- 授業に対する見方が変わり、授業の奥深さを知ることができた。部活動に参加し、授業外で生徒と関わることができた。指導案の書き方や、生徒との関わり方、教員としての自覚など、教員になる上での基盤となってくる部分を学べた。授業をじっくり考え、生徒の前で行うことができた。授業をすることの難しさを知ることができた。行事、部活動等の教室では見ることができない表情を見ることができた。生徒との関わりが上手くいった。
- 教材研究や授業づくりに多くの時間を注ぐことが出来たので、毎回このように授業を進めていこう流れをしっかりとつかんで授業に臨むことが出来た。
- 授業の後には、良かったところ、直した方が良いところを丁寧に指導していただけたので、次の授業に活かしていこうとする意欲がしっかりとあった。指導教官からの指導が丁寧、不明点は一緒に考えてくれた。基本は自分の考えたものをやらせてもらえ、自分の力量を知れた。実習生間の協力が多くあった。授業や指導案など、細かい点までご指導頂けた。休み時間など、自由時間に子どもの様子をつぶさに見ることができた。
- 授業前後の話し合いに多く時間を割いていただいたので、深く考えることができた。自分の授業観が大きく変わった。良い授業は、子どもに満足感を与える授業だということをつかめた。教材研究に時間をかけ、仲間と協力することの良さも実感した。現場に出て実際に児童と触れ合うなかで、教職の難しさや楽しさを体験できた。良い意味でも悪い意味でも、自分の想像以上の期間だった。
- 授業の作り方、児童と触れ合うときの心掛け、学校行事のサポートなど、教員となる上で欠かせない能力、知識を養うことができた。生徒との関わりや授業の仕方がよくわかった。生徒と触れ合える時間が多かった。想像よりも自由度が高く、やりたかったことが、やりやすかった。
- 指導案の書き方、授業の仕方、子どもたちとふれ合い、すべてにおいて、学ぶことが多かった。先生方から丁寧なご指導をいただき、学習指導や生活指導なども多く経験させていただけた。
- 教科指導では、教科担当の先生と様々な授業実践をすることができた。部活指導においても顧問の先生に指導の仕方や関わり方まで幅広く指導していただいた。
- 生徒とたくさん関わるすることができた。同じ授業を2回行うことができたので、改善することができてより良い授業を考える事が出来ました。担当の先生が非常によく指導して下さいました。教師という職業の責任を感じることができた。教師で大切なことはチームワークだということを感じることができた。リアルな中学生に対しての授業で経験を積むことができた。
- 学習指導案の書き方、授業の構想の仕方など学習指導面で沢山指導してもらってBにも活かされた。
- 子どもとの関わりや行事などを通して、児童の実態把握等についても勉強することができた。指導案作成に非常に余裕があった。期間が5週間ということで、少し慣れてきた中で授業に挑めた。
- 大学で学べなかったこと、例えば子どもへの接し方、授業の雰囲気等たくさん学べた丁寧に指導してもらえた。中学校への指導は大変だったが、やりがいも感じた。4回という少ない授業回数だったが、1回1回に時間をかけて考える事ができた。効率良く教材研究が行えた。
- 班で協力して取り組めた。一般校ということもあり、より生徒の実態や現場に近い指導を行うことができた。また、生徒や児童のおかげでより理想に近づけた授業にチャレンジすることができた。
- 生徒と多く触れ合う機会があり、様々なことにチャレンジできた。その分、成功もあり失敗もあったので、いい経験になった。また先生方も細かく指導してくれて大変為になった。十分に教材研究をする時間がとれた。教科指導を熱心にしていただけた。1つの単元を丸々教えきることができた。

- グループの中で、ぶつかり合って“授業”そのものについて話し合うことができていた。先生方も本当に尊敬できる人たちばかりで、勉強になった。最初は全く自身がなかったが、少しずつ自身がもてるようになり、自分のよさを考えることができた。
- 指導案の書き方から、中学生の発達に不足した関わり方など、教師としての基本的な心構えを丁寧に指導していただいた。教科指導、子どもへの関わり方のアドバイス、指導案の書き方、行事参加、子どもと関わる機会等、とても充実していた。

## (2) 大変充実した教育実習Bの内実

- 実習Aとは異なり、自分で授業を構成し実践するという、力試しの場であった。Aのような指導案指導がなかったため、何度も自分で練り直して授業をつくった。授業を工夫しながら行う事ができ、そのため教材研究の時間をしっかり確保してもらえたので充実した実習だった。
- 1年生から6年生まで全学年、ほぼ全クラスを参観させていただき、大変充実した学びがあった。A実習で充実していた点に加え、学校経営や教師の仕事全般について学ぶことができた。担任の先生だけでなく、学校にいらっしゃる教員の方々全員と関わる事ができた。
- 全日経営をやらせていただいて、一日の授業から雑務までこなすという、担任の先生方の日常を体験できた。算数、国語、図工など、体育だけでない科目の授業をしたことで、科目によって考え方や授業の構成が違っていることが分かった。学年を問わずたくさん子どもたちが頑張る姿や成長する姿を見ることができた。A学習で学んだことを活かす活動を通して、学んだ力が定着した。
- 実地指導や担当教諭のアドバイスを受けて授業をよりよいものへとしていくことができた。A実習の反省を行かして臨むことができ、改善することができた。また、小学校と違い、1つの授業でクラス分の授業ができたので、その分、教材を練ったりして完成度を高めることができたのでよかったし、充実させることができた。
- 専科の授業を多くやらせていただけた。1人1クラスを担当したので、子どもたちと深く関わる事ができた。家庭科の先生から、授業のつくり方をたくさん学んだ。学校のチームワーク、生徒指導を学んだ。
- 理科の授業を行ったのですが、予備実験も担任の先生が見て下さり、一緒に授業を考えて頂けた。授業を何回もやる事ができ、生徒の実態や反省をふまえて授業ができた。文化祭があったので、それに向けてクラスの子と深く関わる事ができた。大学でやっていたこともいかす事ができた。
- 附属に比べて帰る時間が早かった。実習生も少なかったので、児童と密に触れあう事ができた。働いている先生方も指導担当以外の方でも授業と一緒に考えてくれた。生徒との関わり、思春期の子どもたちと適切な距離をはかりながらメリハリをつけて接することができた。
- 授業について、教材研究の際に、どのような教材で提示したらより理解が深まるか、どのような声かけ、問をつかうことで、うまく授業が進められるか、何をしたら興味・関心を持続できるかを考えながら取り組むことができた。普段の生活の中で子どもたちと築いた信頼関係を授業の中で生かすことができた。
- たくさん会話して、多くの子どもと関わる事ができた。教科指導だけでなく、クラス全体に向けて注意をするといった生徒指導も体験できた。児童との信頼関係を築き、児童の実態に沿うように授業を考えることができた。小学校とちがいで、自分の専門の科目について深く考え、授業づくりをするのが楽しかった。改めて、美術のおもしろさ、奥深さを感じ、それをどうすれば生徒に伝えることができるか考えるのがおもしろかった。
- 実習Aとは違い、良い意味で自由に行わせて頂いた。授業によらず合唱コンクールの指導等まかせて頂くなど中学校という現場を想像以上に知れた。先生方がとても温かく迎えてくれ、実習が行いやすかった。
- 毎時間、生徒の評価をつけた。毎時間、実習後に教師から改善点をメモで渡された。担任の先生と1対1で話し合うことができたので、自分が不安に感じていること、わからないことをその都度、相談して解決することができた。授業の他にも、校外学習や給食指導も深く関わる事ができた。同じ内容の授業をくりかえせたので1度目を踏まえて次に生かしたり、先生の手本を見て自分との

- ちがいを知ることができた。
- 担当学年だけでなく、全ての学年の授業を見せて頂いたので、各学年の実態を把握することができた。国語で全案を書くのが大変だったが、将来の小学校で授業するためにも良い勉強になった。
  - 子ども、先生方との距離が近く、生徒指導、教科学習指導、多面的に様々なことを学べたから充実していた。他教科の授業を初めてした。子どもの背景をふまえながらの関わりについて深く考えさせられた。中学は同じ場所を改善しつつ授業できるが、小学校は一発勝負で後悔することも多いとも思った。
  - 朝の会、帰りの会だけでなく職員会議、合唱指導も参加させていただけた。また、1年生クラスの授業をさせていただけた。教師の仕事がよくわかった。初めて外国語活動を行いことができ、外国語活動において貴重なことを知ることができた。学級経営の難しさと、やりがいにも気づくことができた。道徳、算数、理科など様々な教科を教える機会をくださり、今まで気づけなかった点に気づかしてもらうことができた。
  - 生徒指導の面もよく教えてくださり、実際の教師を少し感じるすることができた。研究授業をやらせていただいたり貴重な体験ができた。専門外の教科の授業を主におこなわせていただいたので、充実した実習だった。一般校での実習だったので、附属とはまた違った角度から教師という仕事を見ることができた。児童と接する中で、小学生の様子を知ることができた。授業では、子どもたちが積極的に発言してくれたので、充実した授業をすることができた。
  - 国語の授業づくりにおいて十分に指導していただくことができた。A実習とは違い、実習生が自分だけだったので、A実習以上にとっても手厚く指導をうけることができた。また、とても行事が多い期間だったので行事を通して学ぶことも多くあった。
  - Aの倍の量の指導案をつくり、指導案形式の地域差にもふれることができた。複数のクラスで授業をしたことで、子どもによって授業を変えていくことの必要性を感じられた。合唱コンクールに参加させていただき、行事の大変さ、取り組む子どもたちの気持ちにふれることができた。
  - 実習生は一人で不安が大きかったのですが、先生方にたくさん支えられていただき、かなり自由勝手をさせていただきました。やってみたいと思った事に挑戦できてよかったです。授業もたくさん参観できてよかったです。
  - 授業数がAが3時間だったのに対し、Bは20時間任せてもらった。全クラス（4クラス）の全授業を担当するのは責任感もあったが、様々な子どもと丁寧に関わることができてよかった。
  - （中学校とは異なり）児童と多くの時間を共有することができ、「教師としての接し方」を体感することができた。多くの授業をさせてもらい、1つの授業を修正していくという経験をすることができた。子どもと関わる時間が長く、学習指導以外の教員の仕事を知ることができた。
  - “現場”の感じを強く感じる事が出来たという点でとても充実していた。教育現場の雰囲気、現職の先生方の授業や児童に対する思いを聞くことができた。子どもたちと関わることの楽しさや「子どもが好きだ」という思いがより強くなった。掃除、給食、休みの時間など1日のほとんどを児童と過ごすことができた。
  - 自分の専門外の教科の授業実践を行い、良かった点、反省点などが明確になった。児童との関わり方、指導について、専攻教科以外の教科を教えることができて視野が広がった。
  - 授業づくりにとても協力的で、指導案指導の時から、こうした方が良いのではないかと多くのアドバイスをもらうことが出来て、とても充実した授業をすることが出来た。1日ほとんど担当のクラスの授業を参観していたので、児童の実態をしっかりと掴んで授業をすることが出来た。
  - 1クラスに1人配属だったので、児童と深く関わる事ができた。研究授業参観、授業研究会、指導案検討会、就学時検診、校外学習の引率、校内研修など様々な学べた。
  - 学力向上指定校なので、指導案の形式、授業の展開は学校でも統一されている子どもたちは、説明する力など身につけているので、授業が活発になった。
  - 子どもたちと触れ合えた時間がとても長くて、また配属学級の子たちはもちろん、その他の学年の子どもたちとも休み時間を通して関わりを持つことができた。授業も複数の学級ですることができ、子どもたちの様々で多様な姿を見ることができた。

- 教材研究では、Aの反省を生かしながら取り組むことができた。担当の先生とも積極的に意見を交わしたり、相談したりした。授業でも、しっかり的をしぼって、臨むことができた。休み時間など、可能な限り子どもと過ごすことができた。別れの時は、子どもたちと一緒に泣き合った。研究授業もさせてもらうことができた。先生方のおかげもあり、研究会も、とても深いものになった。
- 自分一人だけだったので、自由に活動できた。担当の先生方、担当外の先生にもご指導いただき、学級経営なども経験させていただけた。小学校では、指示の仕方から子どもたちとの関わり、教科指導の工夫に至まで、発達段階に応じた指導方法を教えていただいた。
- 支援を要する子をいかに普通学級の子どもたちと一緒に学習させるか等、インクルーシブ教育についても学ぶことができた。指導案をしっかりと指導していただいたので、授業を作る上での指導案の大切さを考えることができた。休み時間、昼休みにたくさんの子どもと関わることができた。
- 素晴らしい授業を見ることができて、授業の工夫、ポイントを学ぶことができた。小学校と関わっていくなかで、実態を知ることができた。社会科の授業が1つ単元を通してできた。
- 演劇教室や合唱コンクールなどの行事があって、生徒との関わりの方でも充実していた。他の大学の教生がいて、その方の授業を参観して教材等の参考になった。指導もきめ細かく、それでいて自由な雰囲気もあり、自分のやりたいことが100%出せ、いい経験となった。
- 授業や休み時間などで子どもと接する機会が多かった。小学校は1つのクラスに基本的にはずっといる状態なので、中学校とは違う雰囲気を味わうことができた。子どもとの関わりや、学級経営、学校経営について学べた。A実習で学んだ事を活かし、失敗した点などを修正したりしながら思考錯誤できた。
- 担当の先生が、去年まで県の指導主事をされていた先生で、指導案の書き方や授業のスキルの基礎を丁寧に教えてくれた。しっかり指導案をつくった。体に負担をかけることなく、計画的に授業準備が行え、充実していた。子どもたちと長い時間関わることができ、充実していた。
- 自分から積極的に生徒に関わっていった。やってみたいこと、分からないことをすぐに担任に相談した。同じ指導案×3クラスで、改善しながら授業を行うことができた。教育実習生の意思を尊重してくれた。Aに比べ、児童と接する機会が多かった。
- クラスの子を見る時間が多く、子どもの実態についてたくさん見ることができた。たくさん授業を、いろいろなクラスに対してさせていただいた。また、その1つ1つに指導をしてくださった。
- 児童・生徒たちとの関わりが充実していた。副専としての体育だったが、初めは不安だったが、T・Tで授業をやらせていただけたことがすごく新鮮だったし、勉強になった。部活動も2週間限定でメニューを考えさせていただいたり、本当に学ぶことが多かった。
- 多くの時間、子どもたちと触れあうことができたので充実していた。小規模校だったため、児童数も少なかったが、もちろん先生方も少なく、指導教官の先生だけでなく多くの先生方とお話をする機会があり、また先生方同士の連携、コミュニケーションの姿を間近で見ることができたものも、とても良い経験だった。

### **(3) 教育実習Aの経験が教育実習Bに非常に活かされた内実**

- 授業づくり、指導案づくり、子どもとの接し方に活かされた。指導案の書き方や授業での声かけや発問はもちろん、自分は教師として児童の前に立っているという自覚をBの始めから持つことができた。
- 生徒との関わり方、B実習のほうが積極的にできた。指導案の書き方が活かされた。書類や提出物の体裁を整えることができた。基本的な立ちふるまいが分かった。指導案の進め方やスケジュール管理においては計画的にこなせて、B実習ではゆとりを持って実習に臨めた。授業の展開のしかたや子どもたちの動かし方はA実習の経験が生きた。
- 子どもとのふれ合いに方に最初かなりのギャップを感じた。話や説明の難易度を子どもに合わせられた。授業だけでなく、生徒指導上の留意点などに意識することで、円滑に進めることができた。
- 朝の会や帰りの会などの進め方に慣れることができた。人前で話すときの話し方や態度などを生かした。A実習では仲がよいだけになってしまったが、B実習では指摘したり、良い面だけでなく改

- 善点についても伝えることができ、お互いに意見できる関係をつくることができた。
- 指導案の形式がAとBでは全く異なっていたが、Aでよく教えて頂いたおかげで、Bの指導案形式にも対応できた。どのように授業を進めれば良いかがA実習で学ぶことができた。
  - 授業の流れや話し方（トーン、間）をAで訓練できていた。Aで朝や帰りの学活、清掃指導を多く経験できたので、Bが始まってすぐに、それらの活動に積極的に参加することができた。
  - A実習では、他専攻の実習生の授業を多く見る機会があったため、B実習でいっしょになった他大学の実習生にアドバイスをすることができた。Aで培った授業実践力を生かし、更に子どもたち主体の授業ができるよう努力することができた。Aで足りないと感じた子どもたちとの信頼をBでは築くことができた。
  - 丁寧な言葉使いや、机間巡視の仕方がわかるようになった。Aで机間指導の弱さを指摘され、それを意識してみたり、Bの先生に伝えたりして、弱点強化をすることができた。積極的に実習にとりくんでいくことがAでできなかったため、Bで個別で指導を受けられる分、どんどん自分ができること、やりたいことをするようにしていった。
  - 導入から最後のまとめに入るまでの授業の作り方、実践技術を活用することができたが、それだけではなく生徒の様子を見ながら授業を進めていくことが出来た。生徒の実態を見る目が、Aのときに少し培われたように感じた。授業の技術や余裕の持ち方や児童の実態の把握ができた。
  - 指導案作成において、Aで学んだノウハウがそのまま活かされた。生徒指導よりも、Aでやった方法とそこから得たものを文の中で吟味して、よりよくしようとできた。指導案の書き方や子どもへの対応の仕方、授業の流れ、子どもたちとの関わり方等がよかった。
  - 多くの子ども前で授業をしていた分、慣れがあったので、あまり緊張することなく授業を行うことができた。指導案も作り方が少し分かっている分、スムーズに取り組めた。授業の展開の仕方や、指導案の書き方、突然話を要求されたときの対応力が活かされた。
  - 児童と接する態度や児童との距離感、授業内での指導、授業での目線の配り方、心構えなどができた。実習Aで何回も授業をただけあって、Bのときはあまり緊張しなかった。
  - 実習Bでは、学生一人だったため教材研究や空授業などに不安がありましたが、実習Aの時の友だちの意見や視点を参考に、すすめていけました。また、附中でおこなわれていた「全力挨拶」が習慣になっており、大変ほめられたし、児童と親しむきっかけにもなりました。
  - Aで教具作りを力を入れてやったおかげで、Bでは当たり前のように必要な物を準備し、スムーズに作ることができた。授業作りや教師としての立ち振る舞いという点で、A実習で学んだことをBでも生かすことができた。
  - 子どもとの関わり方、距離のとり方・縮め方等が生かされた。指導案を考えると同時に、授業の構想をするという経験が生かされた。授業における細かい配慮などできた。子どもは先生の熱心さ、一生懸命さに応えてくれるということを実習で学び、B実習は、ひとりで心細かったが、その不安を伝え、それでも頑張っていきたいんだという気持ちを素直に表していったおかげで、多くの人が支えてくれた。とても“支え”というもののありがたみを感じた。
  - 具体的な授業のイメージ（学習活動、指名の方法、板書計画）は、B実習においても役に立った。指導案の書き方、書く内容がとても役に立った。また、子どもとのふれ合い方、授業で前に立つことの緊張感等を生かすことができた。指導案の書き方や、生徒（児童）との関わり方ができた。
  - A実習では、なかなか子どもとのコミュニケーションを取れなかったため、B実習では、どんどん積極的コミュニケーションを取りにいき、子どもたちについて多くのことを知ることが出来た。
  - 授業づくりをどのようにすれば、はかどるのかをA実習でしっかりと指導して頂いたため、B実習では、1人でほとんど授業を考えながら、スムーズに進めることが出来た。
  - 授業の参観の仕方などが生かされた。指導案の書き方を学ぶことができた。授業の見方を学ぶことができた。授業では、子どもの声を使って展開していった。指導案の書き方は、実習Aの反省を踏まえて作成できた。
  - A実習では授業づくりに追われている日々を過ごしたために、生徒と関わる時間を大切にできなかった。それを踏まえて、B実習では学習面に加えて、生活面でも多くの時間を子どもたちと過ごそ

うと意識して、実習に取り組むことができた。

- 子どもに自分から話しかけることができた。授業中に子どもの様子を、よく見ることができた。授業中に起きた問題について、冷静に対処することができた。教材研究、子どもとの接し方（立場をわきまえ、TPOを意識したメリハリのある態度のとり方）ができた。
- 指導案の書き方、実地の際の机間指導の仕方、実習生としての態度、生徒の前で堂々とふるまうこと等ができた。生徒指導の面でもA実習で学んだことを活かすことができた。
- 指導案作り、授業の進め方、強い精神、参観記録のとり方、指導案作成、板書計画等授業面、授業慣れ（Aでの課題をB実習で解決・改善していくこと）、子どもとの接し方等ができた。
- 授業の雰囲気、学級経営、指導案づくり、指導案の書き方（印刷機の使い方）、教科指導、授業づくりにおける視点や、子どもとの接し方、話し方、子どもに適した環境を作っていくという点で生かされた。
- 指導案を作成する際の手際が良くなった。学習指導案の書き方や生活指導の仕方は生かされたが、授業の構造自体は生かされなかった。授業作りでの子どもの思考がどのように流れるのかを考えながら授業を作れた。指導案の書き方（授業のつくり方）、学校生活に慣れた、子どもとの接する距離、時間配分の手配が考えやすくなった。
- 授業に関しては、中学生で理科の授業を行ったが、小学校では理科がなかったため、あまり生かせなかった。両方公立だったので、様々な場面で経験が生かされた。A実習で授業を全部合わせて7回行ったおかげで、指導案の書き方が授業の中でのある程度の時間の目安を知りながらできた。
- 指導案の書き方や発問の工夫、子どもに対しての声のかけ方や指示の仕方が明確であるとB実習で誉めていただいた。
- 指導案もスムーズに書くことができた。授業の進め方もスムーズにできた。

#### **（4）教育実習A・Bの2種類を体験したことの意義についての内実**

- 子どもの雰囲気が違うため、どう接すれば良いのかなど、小、中の違いを学べた。附属と公立校では子どもの様子、態度が違って、いろいろな子どもがいるのだと分かった。実習Aで6年生、Bで中学2年生を担当したが、その年代の相違点を知ることができたので意義があった。また、附属と公立校の違いも感じられたので教師になるために役立った。
- 学校ごとに教師も子どもも、学級も、がらりと雰囲気がかわることが分かった。Bは1日を教師としてやりぬくこと、という別の目的でのぞむことができた。Aでは、お世話していただいた、という感覚があるのに対して、Bでは、自分から、より実践的に動く必要があった。
- Aでは実習生という感覚だが、Bでは先生の方が強く感じた。Aでは教科ごとに部会があり、年計など学校でのまとまりがあったが、Bでは規模が小さいため、各教員でスタイルが違うという点により明確になった。実習性の受け入れとして、よく理解している附属小では私たちのことを配慮して様々な指導を行ってくれた。Bでは私たちが受け身ではなく、主体的に行動する重要性を学んだ。
- 規模や地域の状況が異なる学校に行けたので、学校経営や方針の違いを見ることができた。学校によって、また校種によって、こんなにも雰囲気が違うというのが分かった。発達段階によって、子どもたちは、こんなにも考え方が違うんだというのが分かった。
- Aのように常に指導が行き届いていて、子どもがしっかりと行動できる学校で基礎を培って、Bで普通の学校を通して、そのAでの経験を生かすというところに意義があった。様々な子どもたちと接することは良い経験であったと思う。小学校、中学校で学ぶべきことが全く違っていると同時に、つながりがある為、指導する上で知っておくべきことが多くあった。
- 附属学校では、学校側もとても協力的でクラスにも実習生が5、6人いて、とても恵まれた環境で実習ができた。公立学校では、附属とはちがひ、より普通な（リアルな）学校（現場）を体験できた。同じ教育現場でも、その学校自体の方針が違えば、まったく異なる教育がなされていることがわかった。
- 附属と公立の違いを身をもって体験できた。附属では実習生慣れをしていたり、色々な面でよくできる生徒が多いが、公立学校では色々な児童がおり、自由な印象を受けた。児童が伸び伸びやっ

- いて、授業の中でも積極的に先生と会話する場面が見られた。
- 学校によって校風、生徒の様子、先生方の様子が全く違うので、たくさんの学校を見るのが勉強になった。A実習では授業数は少なかったものの、たくさんの授業を参観し、先生方の指導方法や児童への関わり方を多く知る事ができた。1つの指導案を何度も見てもらい1つ1つの授業をとて濃いのものにした。B実習では、自分の専門の教科を14時間も授業する事ができた。まだまだ足りない点や改善点はあったものの「自分がしたかった授業」をさせていただいた1つの授業を4クラス分やってくうちに、より良くしたり、少しずつ慣れていく事ができた。
  - 教員になるための自覚や覚悟を学ぶことができた。2ヶ月間の実習だったが、得るものは非常に大きかった。まず、子どもの様々な姿を見ることができた。小、中どちらも体験できたことで、それぞれの違いや授業な内容を考えることができた。また、B実習の教員になれてない子どもたちとのかわりというものは、とても現実に近いので良かった。
  - 子どもたち自身が、実習に慣れているか、慣れていないかということだけに環境が大きく異なった。慣れている環境では、授業や指導案について学びやすく、慣れていない環境では、ありのままの子どもたちの実態や生活を知ることができた。Aでは6人チームで行い、Bでは1人で授業準備や先生方、生徒と関わってステップアップできた。
  - Aは整った設備、子どもの学習意欲、専科という形で、先生方が非常に専門性の高い指導をしてくださったが、Bでは限られた設備、色々なレベルの子どもが混在する中で、どう対応していくかという先生方のリアルな姿を模倣させて頂くことができた。A実習では、授業作りについて詳しく学ぶことができたのに対し、B実習では、公立学校の普段の児童の様子や先生の仕事の様子について学ぶことができた。
  - 附属の子どもたちは教育実習生に慣れていたり、普段から授業に対する意識が高かったりする子が多く見られた。公立の子どもたちは、様々な家庭環境、学力がある中で珍しい教育実習生と接してくれたので、AとBでは大きな違いがあり、学ぶことが多かった。
  - Aは研究校ということで、何事にも、とことんつきとめて取り組んでいた。Bは行事、部活動がさかんで、子どもたちの一生けん命な姿を見ることができた。
  - 小と中学校の両方を体験して、いろいろな先生の話聞いて④の大変さ④の大変さを知ることができた。それぞれの学校に、それぞれ力を入れていることがあることがわかった。実習Bでは、忙しさを知ることができ、先生がどのように過ごしているのか分かることができた。
  - 一つの授業が一回限りというプレッシャーと、何度も同じ授業を行うことができ変化を実感することのできる心持ちと双方の大変さ、良さを体験することができた。Aはある意味特殊で、先生方も“教員を育てる”という意識のもと色々指導を手厚くしてくださっていた。Bでは通常の学校経営のあり方を見ることができ、それもとても良かった。
  - ひとつの実習校では得られなかった教職の楽しさ、厳しさを知ることができた。各校における相違を体験できるという点で複数の学校で実習が行えたのは、意義があった。
  - Bは今期から特別協力校に指定されたこともあり公立学校と待遇に近いような気がした。一方で、公立よりも教師と話をする機会や時間が多かった。教育実習Aでは、配属学級のお他メンバーと歩調をあわせていく必要があったが、Bでは自分自身が能動的に動きやすい。Aで授業づくり、生徒指導の基礎を他メンバーや先生方から学び、Bで自分なりに応用することができた。Bでは公立学校だったので、現場のリアルを見ることができた。
  - 中学校は、きちりして、小学校はアットホームな雰囲気があった。そういった面でも、小、中のちがいを理解することにつながっていた。それぞれの現場において、先生の指導の仕方も違い、とてもためになった。Bも実習生 welcome な感じだった。先生たちがAでは慣れていて「～やってきて」「～に来て下さい」等、指示を出して下さり、それに従ってできた。Bでは先生が忙しかったため、自ら動くことが必要とされたため、Aで雰囲気を掴むことが大切であった。
  - 群馬は小、中両方での採用があるので、小、中体験できたのは良かった。Aには附属学校の、公立学校には各公立学校の学校方針が様々なあるということを知ることができました。
  - A実習では自分の専門教科の授業の進め方、作り方について考えを深めることができ、BではAで

学んだことを、他教科にも応用させながら授業をつくることができ、教科ごとの共通点や、相違点に気づくことができた。

- Aで毎日のように教科指導をしてくださったので、教科指導の面でAでは多く学び、Bではより児童とふれる時間、一緒にいることのできる時間が増え、特に生活指導について学ぶことが多かった。
- 校種が異なるため、より多くの年齢層の子どもたちを観察することができた。Aにおいて集中的に授業づくりについて学習でき、そしてBで児童の実態について体感して、それに応じた授業をつくっていくことができた。基礎→応用というステップで実習ができた。
- A実習では自分の専門の教科の英語をどのように教えるか、また授業をどのようにしていくかを深められたが、自分のやりたいようにほぼできたのは、附属なので「分かっている子」が多かったからだと思う。それを基礎にしB実習の公立校では、子どもの実態をつかむことができ、附属でない公立校の状況などを知ることができた。
- 中学校と小学校、附属と公立で実態が全く異なっていたので両方を体験することができて、良かった。様々な学校の方針があり、様々な子どもがいるということを知れたし、それらに柔軟に対応しようと努力する態度を養えた。附属学校と公立学校の雰囲気は大きく違っていた。将来どちらの学校にも行く可能性はあるので、勉強になった。
- 小学校と中学校では、子どもたちの学校生活スタイルや教師としての指示や雰囲気などが異なっていることが多かった。附属学校の児童・生徒と公立学校での児童・生徒の差があるため、これまでは附属学校での参観しかしてこなかったのが、B実習はとても参考になった。
- よくできている生徒たちと、あまりできない生徒たちを知ることで、配属された場所によって、臨機応変に対応しなければならないことや、教師としての心構えを築くことができた。附属小には1つ1つの授業に対する熱意が非常にあり、授業研究会を経て授業をみる目が養われた。公立学校では、どちらかということ、生活指導について話されることが多くAとは異なる経験ができた。
- きっとA実習とB実習の順序が入れ替わっていたら、こんなにたくさんのは吸収できなかったのではないと思う。A実習で指導案の書き方や立ち振る舞いなど基本のところを5週間かけて教わられたからこそ、B実習でひとりだったとしても、あきらめることなく、すべきことをこなし、さらに自分にできることを見つけて実行していく柔軟性も身についた。
- 児童と生徒では、コミュニケーションの仕方が大きく異なり、自分の向き不向きを考えるとという点において、非常に意義深いものであった。AとBで様子が大きく異なるので、色々な経験ができてよかった。また、Aで基礎的な力がつき、Bで実践的な力が身についた。
- 学校によって考え方が違ったりするけれど、根本的な部分で、子どものために先生方が一生懸命に動いているということに変わりはないということに気付いた。附属と公立学校だと、生徒・児童の実態が全く異なっており勉強になった。
- 友人の話聞いたことも含め、附属と一般校では同じ発達段階であっても違う姿が見られた。多様な子どもたちを見られたのは大きな意義があった。群馬県では、小、中学校の行き来があるので、両方を経験できて良かった。
- Aではやはり、“いい子”ばかりなので授業もやりやすいし、これといった問題も起きないが、Bだと、全員が“いい子”ではないので色々なタイプの子とも触れ合うことができた。Aは正直かなり特殊な環境でした。なので、授業の理想を見ることができたと思います。Bは実際に働くであろう環境にかなり近いと思うので、触れ合う生徒のレベルや性格、先生方の職員室での様子や仕事内容など現実感がありました。AとBを経験したことで、Aでの理想をそうBに反映していくのイメージがしやすかった。
- 附属中では、群大の学生が大勢いて、集団に従って行動するという受け身な部分が多くなってしまったが、B校では、自分一人（他大学から一人）ということもあり、積極的に行動できた。小・中両方で実習を行うことが出来るので、子どもの発達段階の差が今までは知識だけだったものを実際に見ることができた。小・中学校で異なる発達段階の子どもを見ることができ、それぞれとの関わり合いを学ぶことができた。
- 小学校と中学校の、生徒・児童の成長や、学習内容、接し方等様々な違いを学ぶことができた。

- 特別協力校でない学校にも行くことで、よりリアルな現場に近づくことができた。また、協力することの重要性を感じた。実習Bは、こちらへのサポートが最小限であったため、自分から行動する力も養うことができた。
- 同じ教師でも、相手にする子どもたちの発達に応じて、対応を変えていかねばならないことを実感した。B実習がA実習で学んだことを生かす場になっていた。
- A実習では中学生ということで、学校の授業のみならず、部活動なその活動にも参加でき、先生の指導の様子を近くで見ることができた。B実習では、小学生が相手だったので1日の大半を子どもと過ごし、生活指導も多かった。Aは受け入れることに慣れていて、そこで基礎をじっくり学び、Bで普通の学校に行くことでAで学んだことが生かされたり、生かせなかったり知ることができた。
- 様々な発達段階の子どもたちと関わるのが、実践的にコミュニケーションの仕方を学ぶことができた。小学校と中学校、また、特別協力校と一般校では、子どもはもちろん先生方にも違いがあった。その両方を自分の目で見て、勉強できた点でもとても意義があった。実習に協力的である学校で実践的な技能と知識を得られ、それらを実際の通常の現場で生かしながら活用できたので、段階的に自分に必要な力を見つめ直せた。
- Aで基礎・基本（授業、生活）をしっかりと学び、Bでそれを発展させるという構図が良かった。
- 中→小の違いも大変よく知れ、良い経験だった。Aで学んだことをBに応用するという意味で意義はあった。附属中では主として教科指導、小学校では主として生徒指導を深く学ぶことができた。
- 実慣れしていない子どもと関わることで、素の子どもと授業をどう展開していくか学ぶことができた。附属校という特別な空間と今後勤めることになるであろう公立校の両方で実習を終え、多様な子どもの姿を見ることができ、意義があった。附属は、授業や子どもも公立とは違うような気がした。たとえば、附属は算数の教科書を使わずに授業をしていた。
- 模擬授業だけでは分からない、実際の学校で指導するという実習を通して、教育現場の現状を学ぶことができた。
- Aでは、指導案や授業の流れなど、担任の考えが多く入ってきて型にはまったものを学んだが、Bでは、教生の考えを多く入れてもらえて、フリースタイルな授業（自分で思ったままのもの）をすることができて、個性を出すことを学べた。学校の校風であったり、規則、子どもの違いから見えてくる家庭環境や育ちの違いなど、それぞれの良さを見させていただくことができた。
- Aでの指導は、何も分からない私たちにとって、とても細やかで助かった。中学生と小学校は、考え方も行動も全くといっていいほど、違ってくる。それに合わせた授業構成や接し方をする必要があるので、非常に意義深かった。小・中の児童、生徒の違い、生徒指導の違い、授業中の配慮の違いに気が付く事ができた点で意義があった。
- 大学の理論を近く、子どもの学力も高い附属中で先に実習を行うことで、実習中の基礎・基本が身につく。一方で、一般校では通用しないことも多いので、それをB実習で知ることができた。特別協力校の子どもは、実習慣れしていて、進んで協力してくれたり、また先生方も慣れていて、実習生のやる事がはっきりしていたので、実習の要領をつかむのに役だった。公立校では、本当の現場という感じで、Aでは見られないハプニングや素の生徒の実態を知ることができた。
- 附属の場合はある程度学力が高く、同じくらいなため「考える授業」というものをつくるという意味で勉強になりました。公立校では、実態が様々な児童に対してどのように授業を考えていくかという点で勉強になりました。附属では、指導教諭の先生方から丁寧に教師としての仕事や心構えについて指導をしていただき、公立学校では、実際に忙しい先生方の中で一緒に働き、生の学校を実感できました。

### Ⅲ 体系的教育実習カリキュラム構築の意義と課題

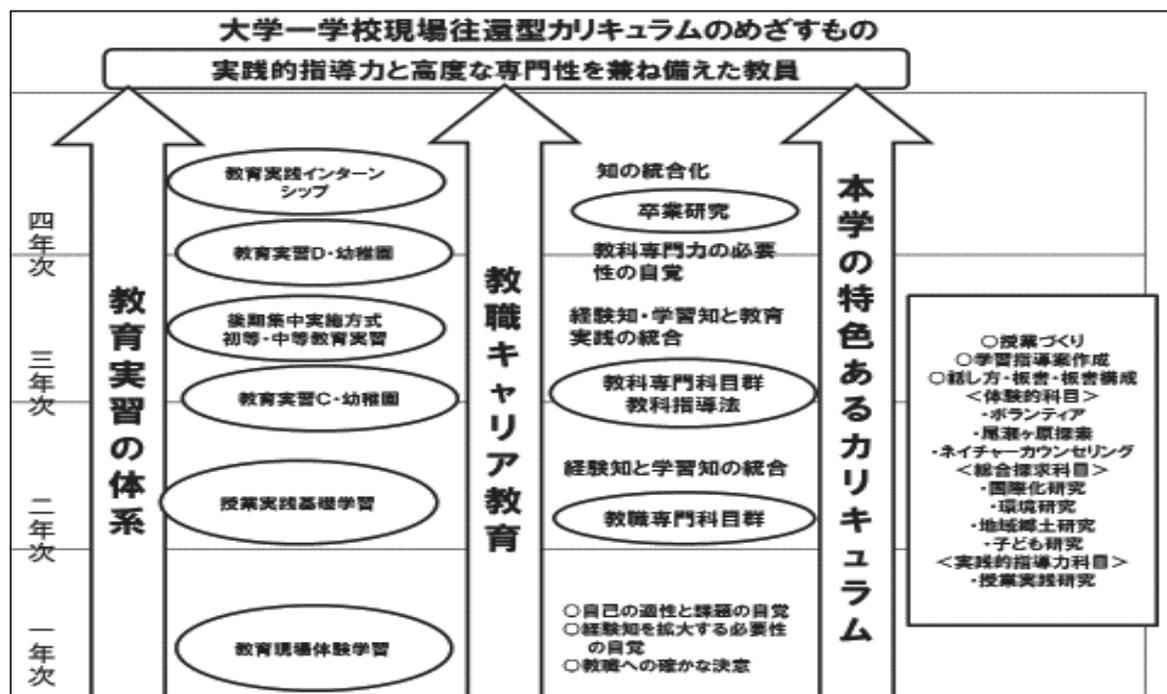
#### 1 はじめに

本学部の教育実習は、群馬県の教員養成を協働で担うという自覚のもと、「本学が求める学生像」という教育理念を県教育委員会と学校現場、そして本学部が共通理解して、県全域で集中的に展開してきた。ここでは、「地域密接型」の教員養成学部の中核である体系的教育実習（別称「群馬モデル」）（平

成 20 年度より実施) の今日までの活動の成果及びそれを踏まえた今後の展望について述べることに  
する。

## 2 大学—学校現場往還型カリキュラムがめざすもの

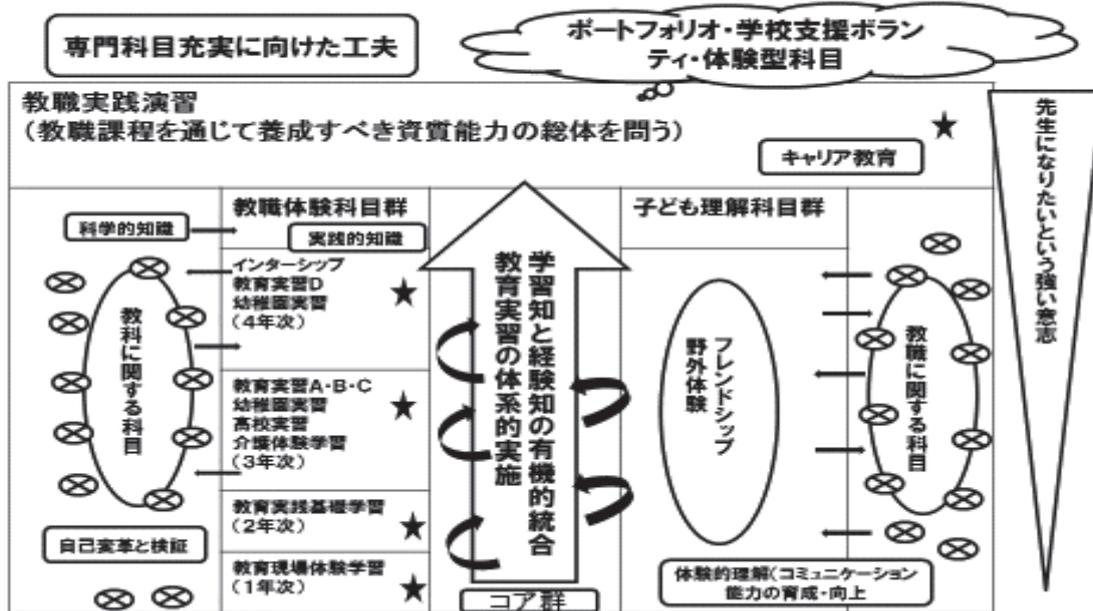
教育現場の教員養成ニーズと入学してくる学生の実態を比較すると、教員養成学部として教職キ  
ャリア形成(教職アイデンティティ)の必要性を強く実感する。教師という職業は、幅広い経験と  
人間関係形成能力、心豊かで明るい人間性が強く求められる。その意味から早期からの教職適性を  
自覚し、様々な教育現実とのかかわり、課題意識をもった教育実践と大学講義との統合、自らの課  
題を自覚した4年間の意欲的な学び等の具現化などを図っている。



## 3 体系的教育実習カリキュラムの実践過程

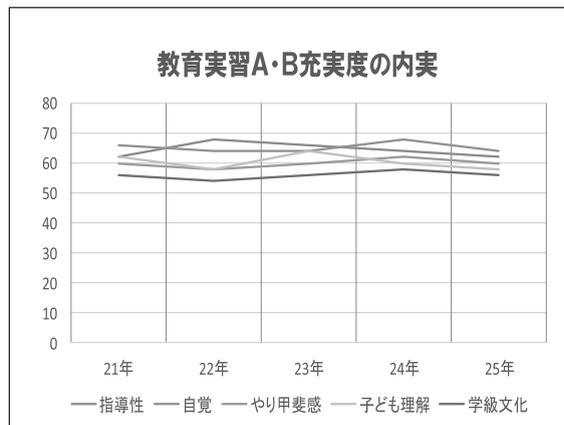
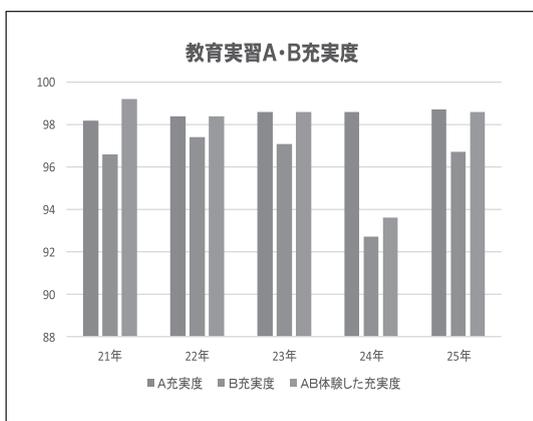
教育実習を中核にしたカリキュラムは、1 年次から 4 年次までの教育実習を体系的に位置づけてい  
る。とくに 3 年次では、教職専門や教科専門を背景に初等教育実習と中等教育実習を合わせて 8 週間  
の「本実習(教育実習 A・B)」を行っている。附属学校園はもとより広く一般校の協力が得られ、き  
め細やかな指導体制を確立している。1 年次の教育現場体験学習、2 年次の授業実践基礎学習、3 年  
次の本実習(教育実習 A・B) 4 年次の教職インターンシップである。本実習では、その他に実習校  
への学生配当、教育実習 B 説明会、教育実習運営協議会、研究授業に関わる学部教員の実習校訪問、  
教育実習 B 実習校への挨拶回り、教育実習研究協議会の開催等、学部の全教員参加型の協働体制で行  
っている。

## 教育学部教員とカリキュラム経営

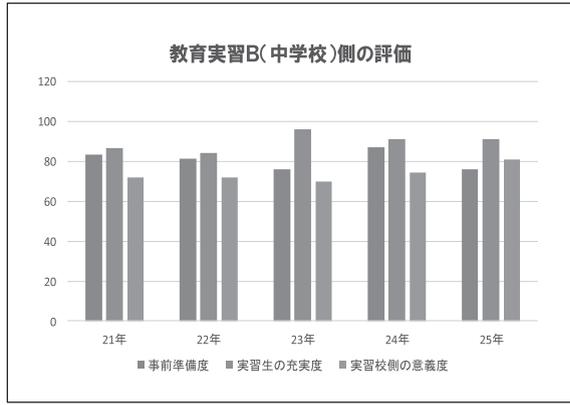
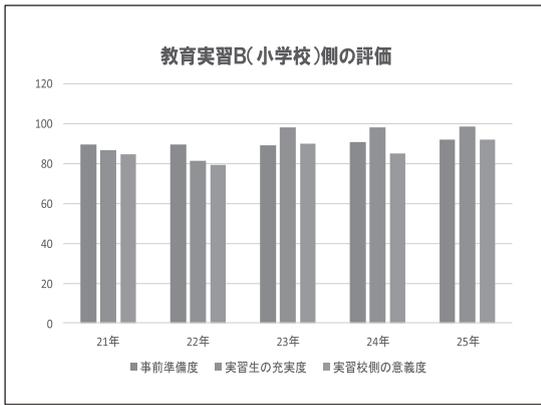


### 4 育実習実践の評価・分析からみえてくる意義

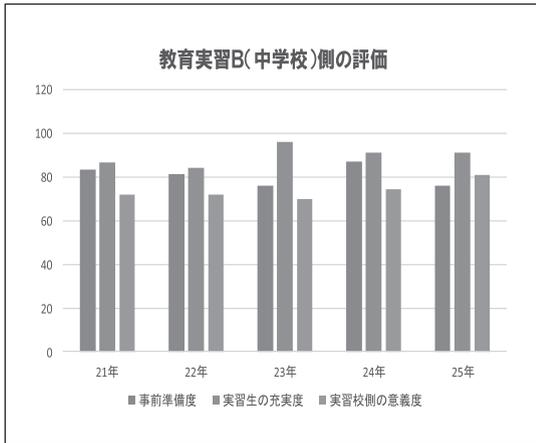
毎年、全実習生を対象に、実習状況や体系的教育実習カリキュラム評価のために、実習後のアンケート調査、全実習校を対象に、その年度の実習生の状況、体系的教育実習カリキュラムに対する意見等のアンケート調査を実施している。ここでは、平成21年度から平成25年度までの過去5年間のアンケート調査と実習状況および卒業生の追跡調査を総合的に分析した結果について述べる。



分析1は、教育実習A・Bに関する学生へのアンケート調査結果（有効回答者数220名）で、グラフの数値は「大変充実」と「概ね充実」を合計した割合である。分析2は、教育実習A・Bを充実したと回答した学生の過去5年間の記述内容をカテゴリー化して、多い順から5項目を列举したものである。分析1では、異なる教育実習AとBを連続して体験した充実度の高さが窺える。分析2では、教師の指導性の大切さ、教師としての自覚、教師としてのやりがい感、子どもとのかかわりを通した子ども理解、学級文化としての教室の雰囲気や子どもの学びの質の違い等が常に上位を占めている。教育実習A・Bを通して、「教育学部生」としての自己理解を深め、教職キャリア形成を主体的に図っている。



分析3・4は、教育実習B（小・中学校）に関する実習校側へのアンケート調査結果（有効回答数は小・中各50校）で、実習生の事前準備度のグラフ数値は、「十分」と「ほぼ十分」の合計割合、実習生の充実度は、実習担当者側が見取った「大変充実」と「概ね充実」の合計割合、実習校側の意義度は、実習担当者側が見取った「大変有意義」と「ある程度有意義」の合計割合である。教育実習協力校の組織集団としての協働性や同僚性の追求意欲の高さが窺える。



分析5は、教育実習Bを意義があると回答した小・中学校側の自由記述回答の内容をカテゴリー化した。主な記述内容を列挙してみると、省察する教師、組織の活性化、誠実な指導教員としての資質等が常に上位を占め、「忙しい中で職員全体が『群馬の若い教師を育てる』という気概をもって示範授業をしたり、教材研究を見直したりしたことは、われわれ教員一人一人の資質向上に生かしてよかった」等と教員が協働性や同僚性を高め、組織の活性化を図りながら学校改善に結びつけている学校が多い。

## 5 体系的な教育実習カリキュラムの実施上の諸課題

本学部の教育実習は群馬県教育委員会をはじめとする地域の教育委員会との緊密な連携の下、例年教育実習Bでは100校以上、教育現場体験学習では60校以上という質・量ともに充実した実践的な教員養成カリキュラムが特色である。県内の公立学校と協力し、先進的な教育実習のしくみを整備し、実践的指導力が身に付けられるように1年生から円滑な導入を図っている。この基盤的背景に、個別学校の多大な協力と理解が不可欠であることを肝に銘じ、現場の実践知を含み込んだ日々の講義に努めていかなければならない。

### おわりに

本学の教育実習は、実習生の実践的指導力の向上がみられ、今年度の教員採用の二次試験合格率も61.2%であり、概ね成功している。今後は、更なる群馬大学と群馬県教育委員会との連携体制の確立・充実に努め、学部教員間の豊かな人間性を基底にした実践的指導力の向上を教員養成学部の最たる使命であるとの共通理解に基づき、誠実かつ地道な研究活動と実践活動の相互的環流を図っていきたい。

## 学部としての変容

- 各教員が学校を訪問し、挨拶、お礼、授業参観、研究協議等に積極的に参加している。
- 研究授業でない普通の授業を主体的に参観している。
- 普段見えない授業づくりに参加している。

普段大学で見かけている学生の様子と異なり、生き生きとした表情に驚かされる。発達段階に応じた言葉遣いや教材が等が工夫され、しっかりと授業構想が立てられていた。



学生が授業を行う様子は参観する機会はあるが、事前にどのような指導が行われているのかを参観する機会は持ちづらい。事前の指導内容や授業づくりの手順は大学の指導に最も生かせる部分であろう。



### ◇◇◇ むすびにかえて—教育実習生の直向きな態度に触れて—◇◇◇

私は教育実習担当であるため、協力校へ訪問する機会が多い。ある時は1日で4～5校を訪問する場合もある。私の訪問は、授業研究よりも普段の取組状況を参観することに重点を置いている。特に1・2年次の大学講義で少し気になる学生ほど、事前に協力校に連絡を入れ訪問させてもらっている。訪問時刻が4時過ぎる場合も多々あった。私の訪問はいつも取り越し苦労で終わっている。いつも帰途の車中では清々しい心持ちでいっぱいになる。心配していた学生たちは、大学での活動とは見違えるほど、一人一人が「精神的な若さ」を持って直向きに取り組んでいるのである。「生徒が後にした教室で一人黙々と机と椅子を整頓している姿」、「生徒の実態把握に裏打ちされて、一人黙々と教材研究に腐心している姿」、「自分の仕事を積極的に見つけ、『自分にできることをやりたい』とつぶやきながら生徒に熱心に声かけをしている姿」、「生徒との学び合いをしながら、生徒の目線に立って熱心に支援している姿」など、どれをとってみても精神的な若さが薫習（その学生の薫りとして滲み出ている意味）していた。どの学生も生徒たちの内面に響く教育行為を主体的に行っているのである。雨水の一滴一滴が少しずつ石を削るように「じわっ」と心に沁み込んでいく教育行為である。長年、教師教育に携わってきた一人として、学生の成長には一に「若さ」二に「若さ」、三、四がなくて、五に「精神的な若さ」であると考えている。ルソーの『エミール』の一節に「子どもを教える教師は若くなければならない。賢明な教師であれば、なおさら若いほうがいい」という言葉がある。教師にとっての精神的な若さの保持は、生徒との距離を狭め、自身の未熟さを認め、その上で向上しようとする直向きな姿勢がそのまま生徒に共感的に理解される。また権威をふりかざす身体を持たないが故に、常に新鮮に生徒の内面世界を敏感に感じ取れ、教師と生徒、生徒同士の中に「教育的関係」（心の通った温かくて受容的な雰囲気）を創り出すことができる。今日の変化の激しい現代社会において、ますます多様化が進行していく子どもたちの個性を受容する人間性とその発達は、「教師の不断の努力」によってのみ可能であると考え。その不断の努力の姿が、教育の基盤である教師と生徒の教育的関係をつくっていく。見栄えのする派手な小手先の研究授業に奔らず、しっかりと自身の足元をみつめて一步一步着実に努力している学生の姿は、自分を教育の原点に回帰させる。

（文責：黒羽正見）

体験的科目におけるコミュニケーション力育成の試み  
—ピア・ラーニングによる実践を通じて—

## 〔はじめに〕

文部科学省は、1997年度から国立大学の教員養成課程において、「フレンドシップ事業」の設置を提唱している。これは、教員という対人援助職に期待されるコミュニケーション能力について、多くの様々な子どもたちと触れ合う機会を通じて、その習得を目指していくものと考えられる。弊学では、上記の「フレンドシップ事業」を「体験的科目」として設定し、主に2年生を対象とした取り組みを実施している。

学校教育臨床総合センター教育臨床心理部門では、2012年度より、体験的科目として、「ネイチャー・カウンセリング (1単位)」を開講しているが、2015年度は新たに「コミュニティ・サービス・ラーニング (1単位。以下 CSL)」を追加開講し、特に「協力」や「双方向性のコミュニケーション」「集団のモチベーションの維持」などの向上を重視し、それらの知見やスキルを地域社会の子どもたちに還元できるような実践を行った。

## 〔計画の概要〕

CSL においてはコミュニケーション能力を、社会人基礎力を構成する中核たる要因としてとらえ、事前指導などにおいてその向上を図るとともに、習得された能力を地域の子どもたちへのサポートで般化すること、さらにブラッシュアップして活用していくことを目的とした。そのため、「臨床心理学、社会心理学、教育心理学の観点から、人間理解およびコミュニケーションに関する基礎的知識を習得する」、「自己理解とともに、自己に可能な地域への貢献、地域への関わりについて考察する」、「社会における組織について理解し、各々の役割分担、協力などに関し体験的に学ぶ」という、3つの段階的な目標を設定した。なお、本稿においては①の段階を中心に述べていくこととするが、実践に際しては、近年積極的に活用されつつある、学生(参加者)同士の協働による学びの手法として「ピア・ラーニング (以下 PL)」を取り入れていくこととした。

## 〔取り組みの概要〕

2015年4月のオリエンテーション終了後、10名の参加希望があった。期間、日程などを下記に示す。

- |   |          |   |                     |             |      |
|---|----------|---|---------------------|-------------|------|
| ① | ガイダンス I  | ; | 5月13日(水)            | 本学荒牧キャンパス   | 約1時間 |
| ② | 事前研修 I   | ; | 7月24日(水)            | 本学荒牧キャンパス   | 約1時間 |
| ③ | 事前研修 II  | ; | 9月26日(土)            | 本学荒牧キャンパス   | 終日   |
| ④ | PL 草津合宿  | ; | 9月27日(日)～9月28日(月)   | 草津セミナーハウス   | 1泊2日 |
| ⑤ | 事後研修 I   | ; | 10月7日(水)            | 本学荒牧キャンパス   | 約1時間 |
| ⑥ | CSL 赤城合宿 | ; | 10月24日(土)～10月25日(日) | 国立赤城青少年交流の家 | 1泊2日 |
| ⑦ | 事後研修 II  | ; | 11月16日(月)           | 本学荒牧キャンパス   | 約1時間 |

①や②、⑤や⑦では、コミュニケーションに関する臨床心理学的な理解を深めるとともに、グループダイナミクスを高めたり、取り組みへのモチベーションの維持・向上にはたらきかけたりしていった。①～⑤のプロセスで、PLによりコミュニケーションについて深く体験的に学ぶとともに、それらを⑥における、地域の子どもたちとの野外体験やふれあい活動に有機的に用いていくことを最終目標としていった。

なお、④に関しては、昭和女子大学大学院心理学研究科山崎洋史教授および同学大学院心理学研究科の皆さんより、③および⑥に関しては、国立赤城青少年交流の家のスタッフの皆さんより、多大な協力をいただきつつ、取り組みを進めていった。本稿では、「コミュニケーションにおける自己理解」や「双方向性のコミュニケーション」などについて、PLによりその習得・促進を目指した、④を中心に述べていくこととする。

## 〔PL 合宿〕

### 1. 方法

前述の臨床心理学を専攻する大学院生 5 名と協議し、いくつかのグループワークやエクササイズを設定・検討するとともに、ファシリテータも教員ではなく、学生が担うことを確認していった。

### 2. 取り組みの概要

#### <第 1 日目>

第 1 日目は、アイスブレイキングとともに、下記のセッションを設定した。協力者や学生が作成し、配布したしおりの一部を下記に紹介する（図 1.）。また、取り組みの様子は、写真 1.～6.の通りである。

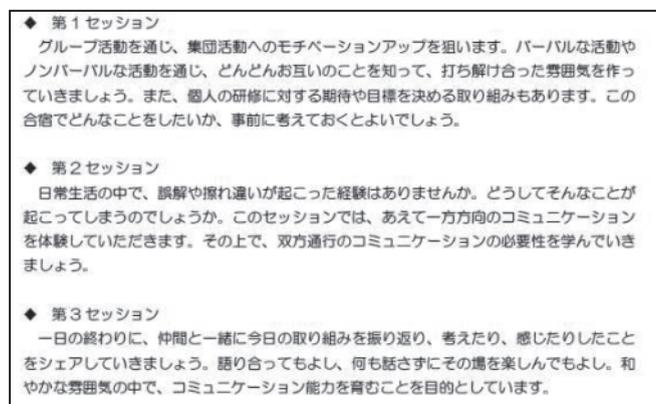


図 1. 第 1 日目の流れ



写真 1. アイスブレイキングの一部の様子。初対面の者同士もいるため、今回の合宿期間中のニックネームをつけるとともに、自己紹介、他者紹介を進めていった。緊張している者も少なくなかったが、いくつかのエクササイズを進めていくうちに、次第にグループダイナミクスを高めていった。



写真 2. 学生同士での学びを促進すべく、教員は直接的な指示や介入は行わず、ファシリテータもすべて学生が担い、エクササイズなどを進めていった。写真は大学院生がタイムキーパーを、学部生がファシリテータを担当し、エクササイズの紹介と流れを説明している場面である。

写真 3. 冒頭のエクササイズの一つである。ペアワークをきっかけとし、段階的に、ペアでのコミュニケーションから、小集団でのコミュニケーションへとつなげ、出会いのコミュニケーションについて検討していった。写真は自己の期待や目標をパートナーに語っている場面である。



写真 4. 自分自身のコミュニケーションのクセやパターンに気づくエクササイズである。スケーリングを活用し、自己を振り返るとともに、他者からのフィードバックを得ることによって、自分自身のコミュニケーションを立体的にとらえ、本合宿における課題や目標を明確にしていった。

写真 5. 各々の作業を積み重ねるとともに、それをメンバー全員でシェアし、最適なものを話し合っていくエクササイズの一部である。ここでは、簡単な描画をもとにして、コミュニケーションが円滑であった部分や、そうではなかった部分についてディスカッションを進めていった。





写真 6. 一方的なコミュニケーションの特徴について気づき、考えるエクササイズの一部である。ここでは、誤解や摩擦が生じる可能性について考えるとともに、双方向的なコミュニケーションにおいて、意識できること、心がける必要のあることなどについて、話し合いにより理解を深めていった。

### <第2日目>

翌日は、参加したメンバー相互のリレーションを深めるとともに、下記のセッションを設定した。一部を下記に紹介する(図 2.)。また、学生の取り組みの様子は、写真 7.~10.の通りである。

#### ◆ 第5セッション

生活のあらゆる場面において、私たちはどのくらい相手の話を聞いているでしょうか。また、話している人は、どれくらい聞いてもらったと実感しているでしょうか。聞いてもらった、わかってもらえたときの嬉しさはひとしおであり、コミュニケーションが深まれば、相手に対する親密さがまし、相互の信頼関係が深まっていきます。そこで、このセッションでは、聞く・話すについて学んでいきましょう。

#### ◆ 第6セッション

本研修で学んだことや考えたこと、自分の感情や希望といったことをまとめ、振り返りを行います。自分の心や共に活動してきた仲間への思いと素直に向き合うことで、これからの自分の在り方を考えていきましょう。そして、合宿での体験を冷静に見直し、現実に対応させる準備を行うことで、「今、ここで」の体験を「帰ったとき、そこで」の状況に転換することができます。

図 2. 第2日目の流れ



写真 7.~8. ここでは、自分自身がコミュニケーションや対人関係において重視する「価値」について把握するとともに、それを発表し、相互での意見交換を行った。そのプロセスにおいては、自分の価値を主張するとともに、メンバーの価値も尊重し「聴く」ことを重視していった。



写真 9.~10. クロージングセッションの一部。自分自身のコミュニケーションについて振り返るとともに、メンバー同士でメッセージカードを交換し、1泊2日の合宿で感じたこと、メンバーの長所、感謝していることを相互フィードバックしていった。

### 3. 学生自身の振り返り

④では、自分自身のコミュニケーションや気づきなどに関して、その変容を量的・質的な方法で把握していった。ここでは、質的な部分を一部紹介していく。

#### <コミュニケーションについて>

○ 相手が本当に自分の長所を認めてくれているかは不明であるが、長所を認められると素直に嬉しい。このことからコミュニケーションにおける重要な点は相手の長所を認めてあげることにあると気づいた。簡単なことだが普段あまり意識していないことであった。相手の否定から入る会話では相手の心を開くことができず、よい関係が生まれることはない。相手に興味をもって相手の長所を認め、受け入れることからコミュニケーションが始まるのだ、ということを明確にこの合宿から学んだ。いわば円滑なコミュニケーションとは相手の長所探しとすることができると感じた。自分の普段のコミュニケーションを振り返ってみると、良好な関係が築けている友人との間でも相手の長所を直接賞賛するというコミュニケーションをとることは少ない。この経験は普段の自己のコミュニケーションを見直す上で良い機会となった。全体を通してコミュニケーションの基本事項、重要点を学ぶことができ、自己を見直すことができたという点で今回の合宿は非常に価値あるものだったと感じる。

○ コミュニケーションの基本さえ押さえさえすれば、初対面の者同士でも打ち解けて話ができるということを学んだ。このことはお互い初対面の学生が多く集まって、エクササイズを通すうちにお互いが打ち解けたことから明白であるといえる。

○ 交流をする、またはより深い関係になるには自分から行動を起こすことが重要であるということを学んだ。人任せに受け身で参加するのではなく、自分から能動的に活動に参加していく意思が非常に重要だと感じた。また、その中で自分の役割を見つけるということも重要だと感じた。ただ元気に明るくただらただらとおしゃべりしているのも、それはそれで楽しいが、そうではなく、他者との関わりの中で、今自分が何をすべきなのか、また、

相手が何を感じているのかを考えながらコミュニケーションを深めることで、短い付き合いの中でも互いに高め合い成長していけると考えた。

○ 第一印象だけでその人のことをすぐに判断するのではなく、相手の内面について自分から進んで知ろうとし、その人と良い人間関係を築いていこうという気持ちや姿勢を見せていけば、話しかけられた方も自分のことについて話しやすいと感じ、自分のことについてもっと知ってほしいと思ったり、相手のことについても同じように質問し返したりすることで、心地よい空気を作り出せることを実感した。

○ 外見だけでは他者を知ることに限界があり、コミュニケーションは他人を理解するためにも自分を理解してもらうにも必要不可欠なツールであると実感した。学生である今でもそうだが、社会に出ると多くの人と関わり、何かひとつの物事に向かって一緒に取り組む機会が増えると思う。その中で上手くやっていくためには、やはり自分とはどういう者なのかを知ってもらい、相手がどのような人なのかを理解することが必要であり、コミュニケーションをするという大切さに気づかされた。

#### <PLについて>

○ 自分は、「この人は少し恐そうだな」、「自分の性格とは合わなそうな人だな」ということを考えてしまい、相手から話しかけてきてくれることを待つことが多々あったので、他の学生の積極的な姿勢を実際に見て、自分も見習い、これからの自分の他者とのかかわり方を改めていこうと思った。

○ 合宿で学んだことは、同じ学生と言っても考え方や価値観がまるで違うということである。教員志望である自分とそうではない学生という立場により、社会のとらえ方も、将来に対する見通しや考えも大きく異なることを実感した。単に学生、若者と言っても価値観がまるで違うということは、範囲を拡大すれば世界中の人間における価値観がいかに異なるものであるのか、ということを実感させられた。価値観が多様であることは頭でわかっていたが、実際に目の当りにすることにより、価値観の違いという問題を身に染みて理解することができた。

○ 学んだことは、自分は人見知りではないということ、そして、自分もメンバーも皆同じ学生であり、ある程度同じ時間を生きてきて、考え方の多少の違いはあっても、本質的な部分は違うことはなく、似ている部分を発見し、共有していこうという気持ちになれた。エクササイズやセッションでそれぞれ多くのことを学んだ。

○ 話し合いのとき、メンバーの話の振り方や、聴き方の上手な点、積極的に自分の意見を言う姿などに目が向き、自分もそれらを意識し、真似したり、アレンジしたりして取り入れてみるようにした。「こうなさい」という指示を受けるよりも、身の周りに「こうなれるといいな」というモデルを見つけられたと思う。

○ 同世代の人の将来に対する考えを知ることが出来たのがいい経験になった。他のメンバーが、将来の自分の目標や夢を明確にして、それに向けて努力していることを知った。一方で私は、明確な夢もなければ将来に対して何も考えていない状態であり、自分の将来の未計画さを痛感した。自分のやりたいことは何なのか、何に興味があるのかを、今後の大学生活でじっくり自分と向き合ってみて見つけていきたいと、この合宿を通じて強く感じた。

○ 他の人から見える自分の印象やイメージについても知ることができ、外から見える自

分についても意識することができた。今までの自分を振り返ったり、将来の自分がどうなっているのか考えたりする活動で、将来について曖昧なイメージしか持っていないことに気づき、将来の自分のことについてもしっかりと考えようと思えるきっかけにもなった。

○ 教職志望者は教員になった際のことを考え、学んだことや考えたことをどのように子どもたちに伝え、還元していけるかというものの見方で自分の考えを公表していた。しかし、教職志望ではない学生は、社会の中で困っている人たちや、企業の中でどのように活用できるかなどの見方で話していて、描いている将来や学ぶことが違うだけで、いろいろな見方ができることに気づいた。

<その他>

○ PL 草津合宿では、今までの自分を振り返るいい機会になったと感じるとともに、自分の足りないところ、これから意識していく必要のあることなど、自分を見直す機会のもなった。これらは、これから先多くの人と関わるうえでも、教員となってからも確実に不可欠なものになると思う。毎日の生活の中で意識していくことはもちろんであるが、来月の赤城合宿では、多くの初対面の子どもたちと触れ合う機会がある。そこで今回の合宿で学んだこと、身に付けたことを活かしていきたい。

○ 最後の話し合いの時、素直に時間が過ぎるのがとても早かったし、なにより今は帰りたくないと思った。それはグループ全員が思っていることでもあった。合宿前の目標である、楽しくやること、初対面の人に自分を理解してもらい自分を出す、という2つの目標は自分なりに達成できたと思うし、目標よりもよい経験ができたのでこの合宿は行って良かったと考えている。

[まとめ]

④の活動においては、「コミュニケーションにおける自己理解」と「双方向性のコミュニケーション」に主眼を置いていったが、学生の振り返りを概観する限り、非常に有意義な取り組みであったことが読み取れる。コミュニケーションに関しては、基本的な部分を確認することに加え、より深いコミュニケーションのための工夫や留意点などについて、ある程度の知見やスキルが得られたと判断できる。また、PLに関しては、同世代の価値観などの相違に気づくとともに、コミュニケーションにおける「良きモデル」と接する貴重な機会になったことが確認された。

以上のことから、今回の活動には、コミュニケーション力の促進とともに、有効なキャリアデザインサポートの可能性も見出すことができた。引き続き、取り組みを継続させることで、より多くの成果が得られるものとしていきたい。

(文責：岩瀧大樹)

## 群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

所在地：住所 〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町四丁目2番地  
電話 027-220-7111 (代表)・7385 (直通)、FAX 027-220-7381  
URL <http://center.edu.gunma-u.ac.jp>  
E-mail [k-rinsyou@ml.gunma-u.ac.jp](mailto:k-rinsyou@ml.gunma-u.ac.jp)

構成員：(平成28年1月31日現在)

センター長	教授	上原景子	( <a href="mailto:k-rinsyou@ml.gunma-u.ac.jp">k-rinsyou@ml.gunma-u.ac.jp</a> )	内線 7385)
専任教員	教授	黒羽正見:教育実習・実践開発部門	( <a href="mailto:kuroha46@gunma-u.ac.jp">kuroha46@gunma-u.ac.jp</a> )	内線 7386)
	准教授	吉田浩之:教育実習・実践開発部門	( <a href="mailto:yoshida-h@gunma-u.ac.jp">yoshida-h@gunma-u.ac.jp</a> )	内線 7340)
	准教授	岩瀧大樹:教育臨床心理部門	( <a href="mailto:iwataki@gunma-u.ac.jp">iwataki@gunma-u.ac.jp</a> )	内線 7384)
客員教員	客員教授	井田廣司:教育臨床心理部門	( <a href="mailto:ihiroshi@gunma-u.ac.jp">ihiroshi@gunma-u.ac.jp</a> )	内線 7394)
非常勤職員	事務補佐員	品川仁美		

### センターの概要

本センターは、平成24年7月に現代の新しい教育課題にも応えていくために改組を行いました。具体的には3センター「子ども総合サポートセンター」「教員養成FDセンター」「学部・附属学校共同研究センター」を「学部・附属学校連携推進室」として本センターの傘下に置き、従来の3部門「教育実習・実践開発部門」「国際理解教育部門」「教育臨床心理部門」と連携して大学教育を支え、地域の教育に今まで以上に貢献できる体制を整えました。新しいセンターの目的は、大学と学校現場との協働的・実践的な研究を通して、今日の学校教育課題の解決に資する実践的指針を見出し、していくことと考えています。

### 学内での年間活動状況

#### a) センター専任教員の学部・大学院教育への参与状況

##### センター共通

学部通年：「教育実習事前事後研究」(他講座教員と共同開講) センター専任教員担当コマ数8コマ 受講者各コマ 約240名

学部通年：「授業実践基礎学習」(他講座教員と共同開講) センター専任教員担当コマ数8コマ、センター非常勤教員(実地指導講師)担当コマ数4コマ(専任教員が各コマを授業コーディネート) 受講者各コマ 約240名

##### 黒羽 正見

学部前期：「教師論(一)」「特別活動(初等)(一)」「特別活動(中等)(一)」

教養前期：「地域社会実践論」

学部後期：「教師論(二)」「特別活動(初等)(二)」「特別活動(中等)(二)」

大学院前期：「学校の自己更新力と教師」「教職実践研究A」

大学院後期：「教育課程編成の課題と実践I」「教職実践研究B」

学部通年：「教職実践演習」コマ数5コマ

##### 吉田 浩之

大学院後期：「生徒指導論」

##### 岩瀧 大樹

教養前期：「教育臨床心理学」

教養後期：「カウンセリング心理学」

学部前期：「道徳教育の研究(初等)(一)」「カウンセリング演習」「生徒指導・生活指導(初等)(一)」

学部通年：「ネイチャー・カウンセリング」、「コミュニティ・サービス・ラーニング」

学部後期：「道徳教育の研究（初等）（二）」、「生徒指導・生活指導（初等）（二）」

大学院前期：「児童・生徒指導の課題と実践Ⅰ」「教職実践研究A」

大学院後期：「教育相談の課題と実践」、「教育相談実習」

井田 廣司（客員教授）

学部前・後期：「教育カウンセリング概論（初等）（一）」、「教育カウンセリング概論（中等）（一）」

学部前期：「学校教育相談概論」

学部後期：「教育相談の方法」

大学院後期：「教育相談の課題と実践」

## b) その他

- ①黒羽 正見・教員養成FDセンター員として、教育学部教員の実践的指導力を向上させるための教育学部教員に適したFDプログラムを組織的に実行した。
  - ・教育実習副委員長として、附属4校園と学部各講座との連携を図りながら教育実習生の教育実習問題に関する連絡調整の強化を図った。
  - ・教育実習副委員長として、附属4校園と学部各講座との連携を図りながら実習カリキュラムの計画・実施・評価を行い、円滑なカリキュラム実践を推進した。
- ②岩瀧 大樹・教育学部を中心とする学生を対象とし、教育実習および観察実習、教職に関わるキャリアカウンセリングを担当するとともに、対象学生に指導教官とのコンサルテーションを適宜実施した。
  - ・教育学部学生を中心とし、学校教育相談の見地から必要な「遊戯療法」・「箱庭療法」・「心理検査」などに関するワークショップを適宜に実施した。
- ③専任教員及び客員教員が開講する大学院開講科目について、14年度中に課程認定を受け、15年度から「学校教育専攻学校教育専修」の科目として扱われている。
- ④センター長が教育実習委員長を兼任するシステムとなっている。
- ⑤センターで学内非常勤講師による次の科目を開設している。
  - 学部前期：牧原功准教授（留学生センター）「外国語としての日本語を考える」
  - 学部後期：園田智子講師（留学生センター）「外国語として日本語を教えるために」
- ⑥センター専任教員2名、客員教員1名で免許更新新制講師として、県内外の教師の指導力向上に寄与している。

## 対外的な教育・研究活動

a) 都道府県／市町村／公立学校との共同事業による研究会・研修会

【教育実習・実践開発部門教員による活動】

### 教育・研究活動

- ・群馬県内の小中学校の教育現場体験学習の受入校 63 を訪問し、教育現場体験学習での連携推進を図った。
- ・教育実習サポートチームの一員として、県内の小中学校の教育実習問題に関する連絡調整を図った。
- ・教育実習担当教員として、県内の小中学校の教育実習状況を観察して、学校管理者・実習担当者と連絡調整を行い、連携の強化を図った。
- ・教育実習副委員長として、群馬県内の小中学校の教育実習校 128 校の配当計画を作成し、各市町村教育委員会との連絡調整を行い、連携の強化を図った。
- ・群馬県内外の児童生徒の豊かな人間性を育む道徳教育を推進するために、学校、家庭、地域社会との連携を踏まえた、学校における道徳教育の具体的推進について努めた。
- ・日本学校教育学会の常任理事として、教育実践委員会を中心に新たな角度から教育実践や教育課題に関する総合的・開発的研究を推進した。

- ・日本基礎教育学会の理事として、教育実践や教育課題に関する総合的・開発的研究を推進した。
- ・時間と教育研究会の副会長として、全国の小中学校のカリキュラム開発や校内研修の支援・援助を促進した。
- ・連携事業の一つである萩っ子学力アップモデル事業の講師として、教師の授業力向上の支援・援助を促進した。
- ・連携・協力推進事業に係る学力向上推進事業として、大子町立大子中学校の授業力向上の支援・援助を促進した。
- ・教員研修リレー講座講師（群馬大学）
- ・校内研修会講師（学力向上）（富岡市立富岡小学校）
- ・校内研修会講師（学力向上）（高萩市立高萩中学校）
- ・学力向上対策事業講師（富山市立楡原中学校）
- ・学力向上推進事業講師（大子町立大子中学校）
- ・校内研修会講師（日上市立河原子中学校）
- ・校内研修会（日上市駒王中学校）
- ・道徳教育総合支援事業講師（群馬県立渋川青翠高等学校）
- ・道徳教育総合支援事業講師（伊勢崎市立名和小学校）
- ・小中連携による学力向上対策委員会講師（常陸太田市立里美小・中学校）
- ・沖縄県立那覇国際高校評議員として、学校教育全般の点検評価と助言を行った。（於：那覇国際高校）
- ・宜野湾市教育委員会点検評価委員として、教育委員会所管の活動に関する評価と助言を行い、報告書を作成した。（於：宜野湾市教育委員会）
- ・沖縄県教育委員会委託事業「学力向上先進地域育成事業」推進員として、宜野湾市指定校の取り組みに関する企画・支援を行い、その報告書を作成した。（於：琉球大学、宜野湾市教育委員会）
- ・沖縄県教育委員会島尻教育事務所において、所員および管内10年経験者に対して、「ミドルリーダー」に関する講話を行った。（於：島尻教育事務所）
- ・豊見城市教育委員会の教育長及び参事、指導主事に対して、「いじめ防止対策推進法」に関する教育員会の役割等の説明・助言を行った。（於：豊見城市教育委員会）
- ・沖縄県立総合教育センターの指導主事および研究主事に対して、「いじめ防止対策推進法」に関する学校現場の対応について、指導・助言を行った。
- ・鶴岡市教育員会の管内の小・中学校教員に対して、学級経営研修会の講師を務めた。（於：鶴岡市教育委員会）

#### 講演（一部のみ記す）

- ・平成27年5月24日「中央地区PTA連絡協議会」（於：笠間市立笠間公民館）
- ・平成27年6月25日「大子町教育講演会」（於：大子町交流センター）
- ・平成27年7月30日「9年間を見通した学びのための研修会」（於：里美中学校研修室）
- ・平成27年8月17日「学力向上特別講演会」（於：ホリゾンかみね研修室）
- ・平成27年10月11日「JASE特別研修」（於：東京工業大学イノベーションセンター）
- ・平成27年11月10日「市学力向上研修会」（於：高萩中学校研修室）
- ・平成27年11月13日「富山市学力向上研修会」（於：楡原コミュニティセンター）
- ・平成27年11月19日「群馬県小学校特別活動高崎大会講演」（於：高崎市研修センター）
- ・平成27年11月20日「生徒の伝える力を育む授業づくり研修会」（於：大子中研修室）
- ・平成27年12月16日「道徳教育総合支援事業研修会」（於：渋川青翠高等学校研修室）

- ・平成 28 年 1 月 22 日「日立市教育研究会教育課程研究部研修会」(於：会瀬青少年の家)
- ・平成 28 年 2 月 5 日「道徳教育総合支援事業研修会」(於：名和小学校研修室)
- ・平成 28 年 2 月 13 日「日立市学力向上上研修会」(於：河原子中学校視聴覚室)
- ・平成 28 年 2 月 26 日「メンター制研究授業研修会」(於：駒王中学校多目的ホール)

#### 【教育臨床心理部門教員による活動】

##### 教育・研究活動（一部のみ記す）

- ・平成 27 年度 学校カウンセリング専門研修 講師  
「学校教育に生かすカウンセリング技法—認知行動療法—」  
(於：千葉県子どもと親のサポートセンター)
- ・平成 27 年度 日本学校教育相談学会群馬県支部学校教育相談スキルアップ講座 講師  
「認知行動療法における認知再構成法」・「集団認知行動療法による認知への介入」  
(於：前橋市総合福祉会館)

##### 講演（一部のみ記す）

- ・平成 27 年度 東京都学校教育相談研究会 基調講演  
「今、改めて学校教育相談を考察する—子ども・保護者・自分を支え、育てる心理学の観点から—」  
(於：品川区総合区民会館きゅりあん)
- ・平成 27 年度 群馬大学教育学部教員による「高等学校への出張講義」 講師  
「人を支える心理学」 (於：群馬県立高崎女子高等学校)
- ・群馬大学附属学校教育臨床総合センター主催による、群馬県内のスクールカウンセラーおよび教育相談担当教員を対象とした、事例検討会（群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター教育臨床事例検討会）の実施（年間 10 回）
- ・群馬県前橋市教育委員会、国立赤城青少年交流の家による連携事業「ふじみ自然体験活動ふれあいキャンプ」へのスーパーバイズを実施。

b) 教育臨床心理部門専任教員による公立学校等へのカウンセリング/コンサルテーション活動状況  
群馬県および前橋市HP、群馬県教育委員会および群馬県総合教育センター発行のいじめ防止パンフレットなどを利用したインフォメーション、プロモーション活動による地域貢献を行った。適宜学校教育臨床総合センター内におけるカウンセリング及び電話相談などを実施した。

c) その他

##### ①学び合う仲間による教員リレー講座

- ・平成 27 年 5 月 9 日から 7 月 11 日に亘り、群馬県教育委員会・上毛新聞社後援の下、「学校教育課題解決シリーズ 2015」の公開講座を全 10 回実施した。(於：群馬大学)

##### ②学校経営サロン

- ・平成 27 年 6 月から 28 年 2 月に亘り、月 1 回の割合で現職教員の力量形成と教育情報交換の場として夜間研修会を実施した。(於：群馬大学)

##### ③センターの教員研修員・研究員の実施

- ・2 年目の取り組みとして県内の小学校 2 校、高等学校 1 校と県外の小学校 1 校、中学校 4 校の参加があり、適宜随時に直接指導と e ラーニングを織り交ぜた研修を推進した。

##### ④紀要『群馬大学教育実践研究』第 33 号の発行（発行：平成 28 年 3 月）

##### ⑤『教育実践年報』第 5 号の発行（発行：平成 28 年 3 月）

##### ⑥センターニュース第 4 号の発行（発行：平成 28 年 3 月）

#### 外部資金導入状況

2014 年度日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(c) 課題番号 26381278,

「部活動学習到達度尺度を用いた教育活動としての部活動の具体化にむけた実証的研究」,

研究代表者（吉田浩之）、2014 年度～2016 年度（4680 千円）

## 編集後記

『教育実践年報』は、5年前の東日本大震災で被災地の人たちと直に対話するなかで、子供たちの学びを中心に大学と学校現場と家庭・地域社会が「つながる」ことを願って生まれました。群馬大学附属学校教育臨床総合センターでは、この年報が今日の学校教育課題を取り上げ、広い視野から報告、論説、解説をいただき、群馬県内の学校教育現場との研究・実践交流の場をつくるものだと強く思っています。今年度で第5号となります。まだ荒削りで学校現場のご期待に添えるような内容にまではいかないかもしれませんが、県内の先生方に現場の実践感覚に根ざした、学校教育の問題解決に資する明確で具体的な「実践的指針」を提示したいという強い思いをもって刊行しております。

特集「グローバル化に対応した英語教育改革の実際」では、群馬大学と群馬県教育委員会と学校教育現場の三位一体による緊密な協働体制のもとで推進されてきた先進的な英語教育改革の実際について、理論と実践の統合の視点からきめ細かく論じています。内容に関しましては、英語教育強化地域拠点事業から始まり、教員の指導力、英語教育カリキュラム開発、実践事例、外部専門機関との連携に亘っています。

優れた実践事例としては、小学校では新潟県長岡市立阪之上小学校長荒木正氏に、中学校では秋田県仙北市立角館中学校長佐藤心一氏に、今日の年々厳しさを増す教育環境のなかで、先生方に勇気がいただけるよう地域に根ざした学校独自の地道な取組について執筆していただきました。

また、この実践年報の表紙裏・裏表紙裏を飾るカメラレポートでは、学社融合教育を目指した複合型教育施設校の学校建築で有名な埼玉県志木市立志木小学校をレポートさせていただきました。

さらに、若手教師を育てるためのワンポイントアドバイスでは、学部の精鋭な教師陣である吉田浩之氏、郡司明子氏、小野智信氏、中村保和氏、新藤慶氏の5名の方に専門領域から本県内外の先生方のために執筆していただきました。どれを読んでも、その先生らしい温かみで味わい深い内容になっています。

センターの活動は、今年度も2部門の活動内容について報告いたします。

最後になりましたが、『教育実践年報』第5号を発行するにあたり、ご多用のところ快く執筆をお引き受けいただき、玉稿を賜りました皆様に、当センターを代表しまして、衷心より感謝申し上げます。

---

## 教育実践年報 第5号

平成28年3月 発行

発行 群馬県群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

〒371-8510

群馬県前橋市荒牧町四丁目2番地

電話（直通）027-220-7385

ファクシミリ 027-220-7381

印刷 上武株式会社印刷

---

# 生き生きと児童の瞳輝き笑顔あふれる学校づくり



いろは遊学館サークル・協育サークルの方々による遊び・製作体験（金曜日・業間の時間 生涯学習棟ふれあいスペース）

いろは遊学館・いろは遊学図書館・いろは大学の方等を招いての**おもてなし会食**（各クラス年2回）

## 学校地域目標

明るくあいさつのできる子  
 思いやりのある子  
 地域を大切に  
 する子  
 意欲的に学ぶ子

学社融合施設になった時に『どんな子どもに育てたいか』のアンケート実施により決めた目標



いろは遊学館探検**サークル体験**（1年）  
生涯学習棟・和室



水墨画サークルの方々による**水墨画体験**（6年）昼は学校、夜間・休日は一般の方が使う図工室



PTA・おやじの会・地域の方による**もちつき大会**  
地下にある体育館



地域の商店街で**お店体験**（3年）



地域の書道教室の先生による**書き初め指導** 教室棟オープンスペース（学年ごとにある学年スペース）

日々のふれあいから  
小さな感動のある毎日

今日も楽しく  
明日が待たれる学校



## 埼玉県志木市立志木小学校

〒353-0004 埼玉県志木市本町1丁目10番1号  
TEL048-471-0111 FAX048-471-0164

児童数 633 教職員数 46  
 学級数 23 通常学級 21  
 特別支援学級 2  
 （平成28年2月1日現在）

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。